
恋せよ狐と幼馴染み

爆弾蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋せよ狐と幼馴染み

【Nコード】

N6908D

【作者名】

爆弾蛙

【あらすじ】

少年に思い寄せる少女達。恋に戦いに燃える男と女。目的至上主義の師弟。その他色々…な人達を、それら全員に関わる一人の寡黙な少年の目線で進んでいくラブコメディである(たぶん)。現在、【キャラが質問に答えます】を実施中。詳しくは第4話のあとがきまで！！基本的に不定期更新です。

ブローグゝ週一回の夢ゝ (前書き)

【花嫁は狐と幼馴染み】の連載版です。

設定を煮詰めていたら【花嫁は狐と幼馴染み】とは似て非なるモノになってしまいました。

楽しんでもらえたら光栄です。

プロローグ 週一回の夢

コレは夢だ。

あと、昔体験したことを追体験してる夢というのもわかってる。わかるのはそれだけ、他は全く分からない。

ココがドコなのか、コレからなにが起るのかも分からない。

「おい、人間。小娘が目を醒ましたぞ」

後ろから女の子の声がした。

どこか警戒心のある。

僕は、声の主を確認しようと振りかえようとすると、暗転。

見える景色が一気に変わる。

川べりから屋内に、趣のある和室に変わった。

和室には布団が敷いてあり、ソコには毛の赤い小さな少女が寝ていた。

気持ち少女が薄く透けて見える。

まだ起き上がるコトはできないようだが、精一杯の笑顔を僕に向けている。

その精一杯の笑顔は、本当に嬉しそうだ。

「少し待ってね。今起きるから」

とてもつらそうな声。

無理はして欲しくない。

僕が止めようと口を開こうとした時、ふすまが開き、

「小娘、無理をするな。今は休め。どうせ焦ったとしても、お前たちの世界への道は閉じたままだ」

先ほどの少女だ。

僕は、さっき見るコトのできなかった少女を見るために振り返った。だがまたしてもここで暗転。

この夢はどうしても僕に少女を見せたく無いのだから。

だが、そんな考えは次の場面で間違いだと理解した。

次の場面は、公園のような広場。

布団に寝ていた少女も元気になったようで、地元の子たちと遊んでいる。

そして、僕はベンチに座り休んでいる。

隣には、あの姿を見ることができない少女が座っている。

「お前たちが来て一週間たったが、小娘もあんなに元気になった。よかったな」

少女が話掛けてきた。

今度は難なく少女を見るコトができた。

そして、今までなぜ見るコトができなかったのかがわかった。

僕は、少女の顔を覚えていないようなのだ。

少女の顔は歪み、ぼやけていた。

表情は分からないが、雰囲気ですべて居るのが分かる。

それにしても少女は僕らと一緒に遊ばないのだろうか。

僕も地味に汗をかき、大分整ってきたが息だつて切れていた。

少女にその様子が一切ない。

「そんな顔するな。ワラワだつて遊びたいさ。だがな、ワラワは、化物だから……皆……とは遊べ……ない」

少女はうつむき、何かを耐えるような声で話す。

気付けば少女を優しくだき、頭をナデていた。

多分、記憶の中の行動だと思う。

ここでまた暗転。

今度の場面は、ふすまの前。

ふすまの向こう、部屋の中からは、あの少女の声がする。

「ワラワはアイツが好きなのだ！ だからアイツと一緒にアイツの世界に行く。小娘とも、らいばるだたと話をしたし、勝負すると

約束したのだ。約束を破るなど言ったのはお姉様方だ。だから……」
少女の懇願する声。

多分、少女と話しているのは、この屋敷の主人である双子の美人姉妹。

この少女との関係は……思い出せない。

「わかつてるでしょ。神隠しにあつた子共をあちらに返す時は、こちらでの記憶を消さなきゃならないこと、力を満足に制御できない者の渡航が禁止されていること。あなた達はまだ11歳。子供なのよ？」

「玉藻、それぐらいにしてあげてわいかが？」
たまも くずは

「葛葉！」

「あなただって可愛い孫娘の恋を応援したいでしょ？ だったら……」
どうやら美人双子姉妹は密談に入つたようである。
そこでまた、考える間無く暗転。

どうやら次は、神社のようだ。

ココには見覚えがある。

近所の狐禮神社こらいに似ている。

「お急ぎ下さい。もうじき閉じてしまいます」

神主らしき人がせかしてくる。

「おい」

僕が赤毛の少女を連れ、神主さんの所に行こうとした時、あの少女が声を掛けてきた。

「五年だ。五年待っている。五年でワラワはそちらに行ける。だから待っていてくれ。必死で勉強するから。女を磨いて行くからな。覚悟しろよ小娘」

「いい加減名前で呼んでよね。たく……待ってるわ。正々堂々行きましよ。それまで待っててあげる」

ふふふと笑い会う二人。

「恋敵の一人や二人、倒せないで何が恋か！何が乙女か！ってね」

「すっかり意気投合してたらしい。」

「お二方。お急ぎ下さい」

焦る神主さんの声。

「はい。またね。待ってるから」

「ああ待っているよ。あと」

少女が改めて僕の方を見る。

「ありがとうな。絶対に行くから…本当にありがとう」

まだ少女の口は動く。

だが僕には聞こえない。

ただ口が動くのを僕は見ているだけ、たぶん僕の名前を言っているのだろう。

そして僕の視界は徐々に暗くなっていった。

夢の終わりなのだろう。

プロローグ 週一回の夢 (後書き)

ありがとうございました。

2、3話ぐらいはすぐに載せるコトが出来ると思いますが……後は

……

すみませんわかりません。

第1話〜三人の幼馴染みと僕〜（前書き）

毎週月曜日に更新できるかと思います。

第1話 三人の幼馴染と僕

目が醒めるとまず真っ白な天井があった。

見覚えはある。学校の保健室だと思う。

「おっ親友。目が醒めたか。心配したぞ。ほれパイポだ。吸って目を醒ませ」

次に目に入っただのは目覚ましパイポ（以下パイポ）を渡してくる親友。

ひでかわげんた

日出川源太だ。

成績優秀、スポーツ万能、常に見せるのは爽やかな笑顔。

性格も良好。

神は一体いくつのモノを彼に上げれば気がすむのだろうか……

そう言いたくなるのが彼だ。

僕ら二人には、特別な共通点があるが、それでも僕と彼が親友なのは不思議な感じする。

ちなみに僕は、暇あればパイポを吸っていたりする。

それはそれでいいとして、僕はどうして保健室にいるのだろう。

「おいおい、どうして自分がここに居るのか、分かっていない顔だな。さては見てた夢が最高だったから忘れちゃったのか？」

どんな夢を見てたかどうかは、僕自身、覚えていないが、たぶん違うと思うよ。

「冗談はさて置き、お前マジで覚えて無いか？ スポットライトが落ちて来たんだよ。お前の上に」

源太の言葉に驚き、自分に怪我がないか確かめる。

幸いにも怪我は無い。

「運が良いのか悪いのか分からないな。まあたぶん悪いんだろうよ。幸いにもライトはお前の横に落ちたんだが、助けに入った紅葉のおかげでお前は気絶。足元を見てごらん。彼女が寝ているよ」

こやまもみじ
古山紅葉。

今、僕の足元で可愛い寝息をたてている幼馴染みだ。

赤茶けたクセの強い綺麗な長い髪を寝苦しいのか、何度も払いながら寝ている。

彼女に突き飛ばされたのなら気絶してもおかしくはないな。

小さいながらもハイパワーのパワフルガール。

彼女を表すところな言葉になる。

冗談抜きに150kgバーベルをリフトアップできるって凄くない？
身長155cmの体だよ。

「うつ、うにゃあ。うによっ!!」

起きた。

よだれを拭く紅葉。

そして僕に気付く。

「あっ！ 起きた！？ ごめんね。私のせいで……」

「紅葉気にするコトはないよ。こいつならいつものことで慣れてるさ」

「むっ。源太、少し黙って欲しいなあ」

「その拳を下ろしてくれると嬉しいなあ……あはは……」

ぎこちない笑顔に青筋を浮かべる紅葉と爽やかな笑顔に冷や汗をかく源太。

とりあえず止めてあげなきゃな。

僕の取った行動は簡単。紅葉の頭をナデ、なだめるコトだ。

紅葉も、

「くすぐりたい。くすぐりたいよ。分かった、分かったから。止める、止めるってば」

よいい子だ。

「ありがとう。助かったよ……話しは変わるが、お前マジにお被い

行ったら？ 素人の俺が見てもヤバいつて思うもん。お前だつて見えてるんだろ？」

源太の言う、被う被わない。見える見えないというのは、当然のごとく幽霊といったぐいの話した。僕と源太には幽霊が見えるのだ。そして、今僕には禍々しい黒い何かが左肩に居ついているのだ。

うーん、やっぱり行った方が良いのかなあ。

「行こうよ。ねえ狐禮神社に行こ。あそこなら近いし。うん。そうしよう」

いきなり立ち上がり、僕の腕を引っ張りながら自己完結する紅葉。紅葉の頭の中には、神社に行く僕と自分の姿がえがかれているのだろつ。

「明日の土曜日に行こ！ねっ！？」

まあ迷惑してたし、ちょうどいいかなあ。

こうして僕と紅葉は狐禮神社に行くコトが決まった。

源太は用事があるらしく行けないと悔しがっているし。

紅葉は、狐禮神社へ電話をかけ、明日お被いに行くコトを話している。

狐禮神社と言えば五年前、僕と紅葉が見つかった場所。

僕ら二人は二週間ほど行方不明になった経験がある。

僕らには、その二週間の記憶がなく、ただ気づけば狐禮神社に居たというものだ。それ以来、僕と紅葉は何かと狐禮神社に行くようになった。

初詣は必ず狐禮神社。

合格祈願も狐禮神社。

何か無くした時も狐禮神社。

そして今回も。

なにか嬉しいような申し訳ないような微妙な気持ちになる。

悪いコトではないと思うのでコレはコレでよしとしようか……

そんなコトを考えていると、電話を終えた紅葉が話し掛けてきた。
「OKだつて。やったね」

「どうやら話がついたらしい。」

つくも何も、その神主さんとも結構長い付き合いだから、突然行つても被つてくれると思う。

とりあえず明日、狐禮神社に行つてみることにしようと思う。

「おい、大丈夫か？」

突然窓が開き、一人の少年が入ってくる。

「怪我したんだつて？ ……ん？ 怪我して無いじゃないか。まあいいや。よかつたな怪我なくて。これ見舞いのりんごだ。食え」
「気が早いよ。」

「うん、何にせよ我が友に怪我なくてよかつた。じゃつ、俺は悪党狩りにでも戻るから。さいなら」

そして窓から出ていく。

奴の名前は橘槻大豊。
きつきたいほう

一見クールだが、その心にある意志は熱く、暑い（鬱陶しい時がたびたびある）。

悪と罪を憎み、正義を貫くそんなやつだ。

ちなみに大豊にとって【友】とは【永遠のライバル】とか【拳で語り合つた者】とか【裸の付き合いのあり者】とかといった意味がある。

悪い奴じゃないし、幼馴染みでもあるから僕自身も大豊のコトを親友だと思っているが……あの熱血の温度をもう少し下げて欲しいのが本音だ。

大豊が立ち去つてしばらくして源太が、

「よし、明日の予定も決まつたコトだし、俺らも帰りますか」

「うん、わかつた。」

源太は立ち上がり、僕らを促す。

紅葉も同意する。

そして、源太を笑顔で睨みながら僕に向かって話し掛けてきた。

「ねえこの後2人で喫茶“昼行灯”によってかない？」

どという顔してるんだ……

まあ別にこの後用事があるわけでもないし、昼行灯に行くのも良いかもしれないなあ。

あそこのペペロンチーノは美味しい。

僕らはそのまま保健室を後にした。

第1話〱三人の幼馴染みと僕〱（後書き）

どうも、爆弾蛙です。

頑張りますので応援よろしくお願いします

第2話 お被いと白髪と金髪の美人双子姉妹と僕（前書き）

どうやら木曜日にも更新出来そうです。

ただ、月曜日は必ず更新しますが、木曜日は必ずという訳にはいか
ないと思います。

第2話 お祓いと白髪と金髪の美人双子姉妹と僕

次の日、土曜日。

「いつ来ても長いよね。この階段。」
階段の長さが突然変わったら、それぞれ怖いし困る。

僕は紅葉と一緒に狐禮神社へと続く長い階段を上っていた。
赤や黄色に変わった栴や銀杏がとても綺麗である。

「ゴール！！ さっ次行ってみよあ！」
階段を先に上りきった紅葉が満面の笑顔でいう。
とっても元気だ。

元気なのはいいがもう少し落ち着けよ。
「早く来るべし！！」
ビシッと指差し、僕をはやしたてる。
仕方ないので早足で階段を駆け上る。

狐禮神社の境内は広い。

鳥居をくぐると本殿まで平気で500mはある。

「神主さんいないね」

境内を見回した紅葉が言う。

そりゃいないだろうよ。

本殿の中で準備でもしてるんじゃないのか。

「分かった。本殿の中でお祓いの準備してるんだよ。さあ行こ」
元気いっぱい駆け出す紅葉。

僕は引つ張られる形で本殿に向かう。
お願いだからのんびり行こうよ

本殿の前に着くと神主さんが本殿の中から現れた。

「さっ準備は整ってますよ。中へ」

僕は神主さんに促されるままに本殿の中へと入った。

本殿の中には見慣れない巫女さんが二人いた。

アルバイトでも雇ったのだろうか？

二人は双子らしく、そっくりでとても美人だ。

年はだいたい20代半ば〜20代後半ぐらいだろう。

一人は艶のある白髪で、落ち着いたきのあるお姉さんのようなイメージのある美人で、もう一人が輝くような金髪で、今時のねえちゃんみたいなイメージのある美人だ。

白髪の美人さんが僕らに気づき声をかけてきた。

「あっお久しぶり。ワタクシたちこと覚えていらるかしら」
えっ

どこかで会ってるのだろうか？

紅葉を見てみると、紅葉も僕と同じように困惑していた。

「葛葉……覚えてないから……いくら私が色々仕込みを入れた記憶の消し方したって言っても基本的には覚えてないから」

金髪美人さんが白髪美人さんを葛葉と呼び、たしなめる。

「そう言えばそうでしたわ。玉藻」

一人ご満悦の白髪美人さん。

玉藻と呼ばれた金髪美人さんは苦笑混じりに話始めた。

「さて、私達の目的は、あなた達に会ってもらいたい人がいるから会ってもらう。ただそれだけよ」

それだけって……

僕らを無視した内容だ。

って僕らの意志は？

「ちよつまっ待ってよ。私達はお被いをしに来たのよ。そんな……」

「いいから会いなさい」

紅葉が食い下がるが、有無を言わせない口調の金髪美人（……えっ

と玉藻……さんかな？）の口調に押し返されてしまった。

「いいから会ってくださらない？　きっと良い結果が得られますわよ」

柔和な優しい笑顔で言う白髪美人（葛葉さんだっけ？）。

「でっでも……」

上目遣いで僕を見つめてくる紅葉。

僕と紅葉の身長差は20cmもあるので自然とそうなるのだと思うが、可愛いと思ってしまうのはこれ如何に。

それはそれで置いて、今重要なのは美人双子姉妹の言う会って欲しい人に会うか会わないかだが……

会うしかありません。

だって二人から何か……スッゴいオーラ出てるんだもん……

“気配で人を殺しますよ”的なオーラが……

僕は紅葉の肩に手を置き、首を横に振った。“諦めて会おう”の意志表示だ。

「わかったよ……」

紅葉も素直に従ってくれるようだ。

「さつさとその“会わせたい人”って人に会わせてよ」

ふくれっ面で美人双子姉妹をみる紅葉。

僕も美人双子姉妹をみる。

美人双子姉妹は微笑みあい、二人同時に指を鳴らす。

………

………

………

っておい！

何も無いのかよ！

紅葉も同じようにずっとけている。

そして僕より先に紅葉が抗議の声を上げようとすると、金髪美人の玉藻さんが笑いをこらえたような顔で僕らの後ろを指差している。
ん？

ドッ！！！！

振り向きなり突如、体に走る衝撃と腹部の痛み。

そして弾ける様に舞い上がる木の葉。

衝撃に備えていなかった僕の体は後ろに倒れていく。

こういう時って、ゆっくりに感じてホントなんだなあ……

とどうでもいいコトをしみじみと思っていたが、床に叩きつけられた痛みで正気に戻る。

首を上げてみると、僕の上には一人の少女が乗っていた。

たぶんこの子が僕に体当たりをかましてくれたんだらう。

勝ち気な表情の少女は木の葉が舞う中口を開いた。

「五年ぶりだな。玉葛^{たまか}だ。覚えてるか？ 忘れてるなら直ぐに思

い出す。なっ！ 安森晴信^{やすもりはるのぶ}！！！！」

第2話 お被いと白髪と金髪の美人双子姉妹と僕（後書き）

神道の知識があまりにも無さ過ぎる爆弾蛙です。

頑張りますので応援よろしくお願いします

第3話　謎の少女と僕

状況を確認しようと思う。

まず、僕の名前は安森晴信^{やすもりはるのぶ}。

晴れの“晴”に信じるの“信”と書くのに“はるのぶ”と不思議な読み方をするのは、ただ親が出生届の時だけに間違えたからだそう
だ。

で今の現状だが……

1・少女が僕に体当たりをかましてくれた上に、馬乗りになって僕の上に乗っている。

2・少女はニコニコ笑っており、どいてくれそうない気配はない……

4・少女は、何故か僕の名前を知っており。また、玉葛^{たまが}と名乗っている。

5・紅葉が居る辺りから何とも言えない……

「ちよっ……君！　なんなの！？」

怒鳴りだす紅葉。

そうとう怒ってます……

だが、僕の上の少女、玉葛ちゃんのは表情はどこ吹く風の余裕な様子。

むしろ、分かっている分かってるといった表情だ。

「紅葉……そうだったな。消えているんだったな。うんうん。でわ

「名前も知ってるし。

何者だよ。

てか、そろそろどいて欲しい。

「　思い出させようじゃないか」

咳払いをして立ち上がる玉葛ちゃん。

やっとどいてくれた。

腹の上だから苦しいかったんだよ。

玉葛ちゃんは、パット見、紅葉と体格的には大差ない……

年齢は年下に見えるが、案外同じ年かも知れない。

髪……と言うよりは髪型がかなり変わっている。

艶やかな白髪の中に金髪のメッシュが入っており、首の後ろ辺りで一つに結っている。

結われたその垂れる髪は、まるで狐の尻尾の様な形にまとまっていて、なんかとてもふかふかしていそうなのである。

癖毛なのか頭には獣の耳の様に髪が立ち上がっている。

「目醒めよ！ 我が名は玉葛。目醒めよ。古山紅葉！！」

立ち上がった玉葛ちゃんは、紅葉と向き合つと呪文の様な言葉を発した。

「あっ……」

紅葉は衝撃を受けたのか、目を丸くして呆けている。

かと思えば、あっと閃いた様な表情に変わり、徐々に驚いている様な表情に変わる。

そして、

「ああー！！！！」

叫んだ。

「玉葛！！！！ 久しぶり。ホント五年ぶり。ちゃんと玉葛が来るまで約束は守ったわよ」

へっ？

紅葉知り合い！？

へっ？

「おお。思い出したか。そうさな、わ、私も約束を守ったぞ」
二人手を取り喜ぶ。

玉葛ちゃんは背をこちらに向けて居るので顔が見えないが反応を見れば明らかだろう。紅葉はめっちゃ笑顔。

なんか僕……置いてけぼり？

美人双子姉妹の方々も暖かい目で見てくるし……

神主さんにいたっては泣いてるよ！

ここ感動的場面なの？

「ハル、まだ思い出さないの？」

「無理もない。玉藻姉様の一時的記憶消去だ。そう簡単に解けんよ」
心配そうに覗き込んでくる紅葉。

自慢気に語る玉葛ちゃん。でも顔は未だ、紅葉に隠れて上手く見えない。

「玉葛、一時的消去じゃなくて封印よ。消したら戻らないわよ」

玉藻さんが玉葛ちゃんの言葉を訂正する。

つて、だから、僕が置いてけぼりなんだよ。

「晴信、そう怖い顔をするな今、思い出させてやるから」

玉葛ちゃんが紅葉を押しつけ前に出てくる。

初めてちゃんと見れた玉葛ちゃんの顔は可愛いと思っちゃった。

狐目が印象的だが、全体的にまとまっており、美少女と言っても差し支えない。

髪も綺麗に切りそろえられているし……つてあの癖毛……耳？本物の耳？

今ピクツて動いた。

しかし、玉葛ちゃんは慌てている僕をしり目にあの呪文の様な言葉を言い始めた。

「目醒めよ！！ 我が名は玉葛。目醒めよ！！ 安森晴信！！」

……

ええつと……何ともありませんが？

……

しばらくキョトンとしていると玉葛ちゃんが心配そうに見つめてきた。

「思い出さないか？」

と言われてもピンと来ないし……

「あれ？ おつかしいなあ……そんなはずは……」

記憶を封印したという玉藻さんもどこか慌てた様子である。

紅葉もかなり心配そうである。

神主さんも……ってこの人も一枚噛んでいるな……まあ別に良いけど。

ただ一人、この空気の中ただ一人だけ葛葉さんだけが明るい笑顔で近づいてきた。

そして、

「邪魔ね」

パシッと左肩をはたいた。

するとスツと肩が軽くなり、あの禍々しい黒い影が姿を消した。

「玉葛さん。もう一度」「はい！」

優しく厳しい、そんな感じのする葛葉さんの言葉に玉葛が返事を返し、またあの呪文を言い始めた。

「目醒めよ！！ 我が名は玉葛。目醒めよ！！ 安森晴信！！」

真っ白だ。

そして、一気に溢れ出してくる情景。

……これは……五年前のモノだ。

神隠しにあった五年前の空白の二週間だ。

その時の記憶……

思い出した。

玉葛ちゃん、いや、玉葛のコトを思い出した。あと、葛葉さんに玉藻さんのコトも。

僕は全部思い出したあ！！！！

第3話「謎の少女と僕」(後書き)

どうも爆弾蛙です。

次回、晴信の回想です。

でもかなり短縮されたものです。
ちなみに木曜日に更新出来ます。

第4話　思い出した記憶と僕（前書き）

過去の話です。

でも過去を振り返っている程度のもんです

第4話　思い出した記憶と僕

全部……全部思い出した。

五年前の二週間。

空白の二週間。

神隠しにあった二週間に一体何があったか。

五年前。

僕と紅葉は、狐禮神社の側にある林で遊んでいた。

そこで僕らは穴の様なモノを見つけて、そこに落ちたんだ。

穴を抜けると、そこは、知っている様で知らない……そんな場所だった。

ふと紅葉に目をやると薄く透けていて、今にも消えそうな息遣いでとても苦しそうにしているのが見えた。

原因も分からないし、僕は全然平気だし、紅葉の様子がまるで幽霊みたいで凄く焦ったつけ。

僕は紅葉を背負って、急いで人を探したんだ。

そして、初めて会ったのが玉葛だ。

玉葛は始め、僕に驚いている様で、紅葉の方には『対処法を知っているから付いて来い』って家まで案内してくれた。

家に案内されて、僕はそこで葛葉さん、玉藻さんに会ってここがどこでどういう所なのかを教えてもらった。
この時始めて玉葛の正体を知った。

玉葛や葛葉さん、玉藻さんの正体を説明するに当たって、まず、ここについて教えてもらった。

ここは、僕らの住む世界と重なる別の世界らしく。

僕らの言う、天国、地獄、魔界、神界、精霊界のことらしい。

二つの世界には、相互関係にあり、この世（決まった呼称が無いのでココでは僕らが住んでいる世界のこと。玉藻さんが気を使ってくれた。今後コレに統一）で何かが死ぬと、あの世（この世の時と同じ理由により、玉葛達が住んでいる世界のコトを指す。こちらも今後コレに統一）に新たな生命が誕生する。

また、その逆もしかりで、あの世で何かが死ねばこの世に新たな生命が誕生するということらしい。

あの世がどういう所かと言うと、それはさっきも言った様に、天国でもあり地獄でもあり魔界でもあり神界でもあり精霊界でもあるから、えっとつまり……僕らの世界でいう空想上の種族が住む世界であるらしい。

ここでやっと玉葛達の正体だが、それは、九尾の狐である。

薄々だが玉葛と始めて会った時にそれは感じていた。

この世にきた今の玉葛は尻尾はちゃんと隠しているが、当時の玉葛は堂々と二本の尻尾を揺らしていたからだ。

玉葛と葛葉さん、玉藻さんの関係はかなあり“ひ”の付く祖母、孫娘の関係らしく、種族長として忙しい玉葛の両親に変わって玉葛を育てていると説明をうけた。

そして紅葉の体に起きている現象は、この世に現れる幽霊というモノに体がなりかけているというもので、いわゆる霊力の少ない者がこの世からあの世、あの世からこの世に移動すると起きる現象らし

くほつておけば一週間で消滅してしまうらし。

だが、既に葛葉さんが処置をしてくれたらしく、紅葉は安静にして居れば数時間で目を醒まし、一晩で元気なると言われ、実際にそうだった。

僕らがこの世に戻るには“世渡しの穴”よわたしのあなを通るしかなく、コレはいつ、どこに現れるか分からない上に、人為的作ろうものなら、色々面倒な書類を沢山書き、結果が出るまで、最低でも二週間の審査に無事合格して始めて世渡しの穴を作れるのだ。

僕らは、玉藻さんのはからいでキツチリ二週間で帰れるコトになった。

この二週間は、とても楽しかった。

玉藻さんや葛葉さんに神秘（あの世では霊力といったそれに類似する力をまとめて神秘と呼ぶ）の使い方を教えてもらったり、あの世に住む僕らと同じ年ぐらいの子供達遊んだりしたからだ。

そして二週間がたち、この世に帰る日。

僕らは玉葛と再開を約束したんだ。

第4話〈思い出した記憶と僕〉（後書き）

あの世とこの世ってこんなもんじゃないですかね？

質問がありましたらお気軽にどうぞ。

その際には“質問”に【その質問に答えて欲しいキャラの名前】をお書き添えの上お送り下さい。

そのキャラで質問にお答えします。

ちなみに各キャラによって知識に差があります。

そこを考慮した上でお送り下さい。

きっと楽しいと思いますよ。

書き方例

晴信への質問

どうして地球は青いのですか

みたいな感じでどうぞ。

対応キャラは

安森晴信、 古山紅葉、 玉葛、

葛葉、 玉藻、 日出川源太、

橘槻大豊です。

追々キャラが増えれば対応キャラも増えて行きます。

無論対応キャラでなくても一応は答えるコトができます。

第5話〈神秘の力と紅葉のお供と僕〉（前書き）

調子がいいです。

だから更新できました。

でもそういう時ほど失敗が多いものです。

なので気を引き締めて行きたいと思います。

誤字脱字がありましたらご一報下さい。

第5話　神秘の力と紅葉のお供と僕

記憶の整理を終わった僕の前には、腰に手を当て、自慢気な玉葛と軽くリズムを取りながら体を動し、無邪気な笑顔でいる紅葉がいた。「晴信も記憶をやつと思ひ出したようだな」

よかったよかったと頷く。

さつきから自慢気にいるが、封印を施したのは玉藻さんだし、この裏技を考えたのは葛葉さんだ。

本来、神隠しにあった人を元の世界に帰す場合は記憶を消さなきゃならない。

それをこんな風にやったのは色々セコい気がしてならないが、玉葛と再会出来たのは喜ばしいコトなので何も言わないコトにする。

「それより玉葛、ツツは？　連れて来てるでしょ？」

「ん？　ああちゃんと居るぞ。ほら受け取れ」

玉葛が紅葉に向けて赤い玉を投げた。

紅葉はそれを難なく受け取ると愛おしそうに撫でて、

「こら、玉クス！　人のペットを大事に扱いなさいよ」

玉葛を怒った。

「あつ、今、玉クスって言った。「葛」を“屑”に変えて言ったな。せつかく大事に守ってかつ、持って来てやったんだぞ。この枯れ葉」

玉葛も負けじと怒る。

「枯れ葉ですって……紅葉は枯れたわけじゃないわよ」

「わ、私だって。わ、私の葛は植物の葛であって、ちり屑の屑じゃない」

喧嘩が始まりました。

「さつきから気になってたけど……玉葛、『わたし』って一人称に全然慣れてないでしょ。どもってるわよ」

「うつ……こつちの世界で『ワラワ』だとマズいかなあって……っ

て何言わすか！」

まあほつといても大事かな。

すぐに仲直りするし、二人の一種のコミュニケーションみたいなモノじゃないかな？

「「恋敵、手強いからこそ燃える恋」」

息を切らしながら叫ぶ二人は、ガシツと握手をし、互いを誉めあっている。

仲良いなあ。

言ってる意味はわからないけど。

互いに誉め終わった紅葉は、先ほど玉葛から受け取った赤い玉を撫でながら呟いた。

「コレ……どうすればいいの？」

へ？

「葛葉さん……どうしたらいいんですか？」紅葉は泣きそうな顔で葛葉さんに助けを求めた。

赤い玉……記憶にある形とは違うが、ツツを紅葉に渡したのは葛葉さんだ。

正体はよく解らないが、主従関係を結んだ相手に対価と引き換えに神秘の力を与えるというあの世の生き物である。

紅葉があので元気いっぱい生活出来たのはツツのおかげである。

「紅葉さん、アナタの神秘をツツに流し込むのですよ。流し込み過ぎるとアナタの命を失いますよ」

「はい」

紅葉が目を閉じ、集中し始める。

神秘が弱い紅葉が、ツツ無しに神秘を使用するのは命がけである。

そもそも神秘とは何なのか、結論から言うと、生命を保つに必要な力で、かつ上手く扱えば魔法めいたコトを使うことのできる力であ

る。

だから神秘が無くなれば死ぬし。

莫大な量の神秘を使えば寿命を延ばせる。

かと言って神秘が少ないから寿命が短いとか、神秘が多いから寿命が長いという事はないので注意が必要である。

あくまでも寿命を延ばすには、莫大な量の神秘が必要なのである。

だから1000年近く生きている葛葉さん玉藻さんはどれだけ凄いのか？

という話になる。

神秘について知識の復習していると、赤い玉状のツツに変化が起きた。

むくむくと表面が動き、ピチッと固まっていた毛皮がフサフサと始めた。

そして、ゆっくりではあるが、玉の形から別の形、本来の形である狐の様な姿に変わった。

何故、狐の様な姿という表現かというと、ツツの姿は、確かに狐なのだが、サイズがチワワぐらいで、かつ寸胴でフサツとした体型をしていて狐と言うには少し抵抗があるからだ。

「くう」

「ツツ、何？ くすぐったいよ。寂しかったの？」

可愛らしい声を上げたツツは、紅葉の体中を這い回っている。

特に、首周りを……

「紅葉さん、ちゃんと契約を守りなさいよ」

「はい。……ドッグフードで大丈夫かなあ……」

葛葉さんに注意され、ブツブツ呟く紅葉。

葛葉さんの言う契約とは、紅葉がツツから神秘を貰うためにした契約だと思う。

詳しくは知らないが、ツツのご飯を必ず紅葉が用意していたのは無関係じゃないと思う。

ふと一つ疑問が浮かぶ。

玉葛はどこで暮らすのだろうか？

どこかにアパートでも借りるのだろうか、それとも葛葉さんや玉藻さん達と一緒に暮らすのだろうか。

悩んでいると玉葛がよってきた。

「ところで晴信。お前の家に、空きの部屋はあるか？」

ん？

無いことも無いが……てか2つ、3つ空いているが……それが……
っ！！！！

も、もしかして……

「よかった。空いているのだな。こっちに来たのは良いものの、うつかり住むところを用意するのを忘れていてな……おっ、その顔は気付いたな。とりあえずは晴信の家に住むことにするコトに決めたからよろしくな。……しかし晴信は凄いな。言葉を使わず、表情だけで気持ちを伝えられるのだからな」

玉葛はうふふと無邪気に笑う。

うん、ありがとう……っておい！

そんな勝手な……

「嫌なのか？」

うっ……。

捨て犬みたいな表情はよしてくれ。

……別に嫌じゃないよ。

五年前のコトもあるし……

「そうか！　なら心置きなく住めるな。」

一気に周りが霞むほどの笑顔になる玉葛。

だが、確かに感じる殺気のおかげで僕は生きた心地がしないのだ。
僕は、ゆっくりと殺気の発生源へと向きを変えた。

向きを変えた先にいたのは紅葉。

ただその姿は、弓を絞る様な姿勢で止まっている。目を凝らすと、後ろに引いた右手が薄く赤い色の光をまとっており、前へ伸ばした左手までその光がうつすらと伸びていた。

紅葉の周りもまた、右手から左手へと伸びる光に沿うように風が流れていた。

「ななな何言ってるのかなあああああ？」

紅葉さんご乱心！？

「ふっ！ 晴信の家に住むと言ったのだ」

玉葛さん！？

紅葉を挑発する玉葛。

玉葛もまた、八本の尻尾を広げ、1つを体の前、8つを尻尾の先で火の玉を作り、構えている。

なに？

マジバトル？

僕の入る余地は……

煌めく一筋の閃光と爆音。

蛇行する九本の筋と爆発音。

……… 無いです。

第5話〈神秘の力と紅葉のお供と僕〉（後書き）

調子に乗っていますが、多分一週間ぐらいでつまずくかと思います。

質問はこの小説のことなら何らかの形でキャラが答えます。

さすがにネタバレの恐れのある質問はそのキャラなりにはぐらかさせてもらったりします。

第6話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（前編）　（前書き）

まだまだ調子に乗っています。

だから長くなって、まとめられなくて前後編になってしまいました。

すみません。

第6話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（前編）

「アナタ達、分かってるわよね。玉葛はもちろんのこと。紅葉、アナタの技だつて十分危険なのは分かってるはずよね。」

「はい、すみません」

神秘の力を使った玉葛と紅葉のマジバトルは玉藻さんの鉄拳制裁によつて幕を閉じた。

そして、現在、お説教の真つ最中というわけなのです。

神秘の力は本当に様々な力へと変化する。

コレは魔法と言つても問題ないと思う。

ちなみに玉葛が使つた技は、俗に言う“狐火”である。

生物のみに作用する不思議な火の玉で、温度は800度を超えているという。

だが、それ以上は何故か教えてくれず、まだ謎の多い危険な技である。

紅葉の使つた技は、自作らしく、名前は“一光矢”^{いっこうや}という。

空気を矢の形に圧縮し、音速で打ち出すという、とんでもなく危険な技なのである。

生まれた時から神秘の力に触れてきた玉葛は当たり前だが、何故、紅葉がああも強力な技を覚えているのかと言うと。

ただただ、玉葛に勝ちたい一心で覚えたのだと本人は言う。

自慢されたのが悔しかったのだろう。

僕としては、当然だが二人ともそれらの技を滅多のことでは使つて

欲しくない。

「つと言つ訳で、晴信の家に行くわよ」

えっ!?

玉藻さん?

どう言つ訳ですか?

話しが見えませんが……

「はい。分かりました!!!」

玉藻さんやの言葉に、これでもかと言わんばかりに目を光らせ頷く二人。

「晴信。何啞然としてるのかな? もしかして、私の話を聞いてなかったなんて事は無いわよね……」

こ、怖い……

笑顔が怖い。

殺気のこもった笑顔が怖い。

「まあいいわ。とりあえず、玉葛が晴信の家に泊まれよう交渉しに行かなきゃならないから案内しなさい」

何か逆らうコトに恐怖を感じるので諦めて案内する事にした。

でも一つ気になるコトがある。

さっきまでマジバトルしてた二人が、手を取り合って、子供みたいに喜んでいるコトとかじゃなくて……

二人が関係するのは間違いないんだけど、喜んでいるコトとは違う。

「ところで玉葛、この床どうするの?」

「大丈夫だろ。大津が^{おおつ}なんとかするだろし」

「大津って神主さん?」

「そつ」

そうだ、今玉葛と紅葉が話してたように、神主さんの名字……じゃなくて、その床が気になるのだ。

一光矢でえぐられた床だ。

見るも無惨である。

紅葉、気にするなら始めっから一光矢なんて使うな。

そして、玉葛。

もう少し、気を使ってあげて下さい。

大津の神主さんがとても可哀想です。

「三人とも早くなさい」

いつの間にか車のキーらしきモノを振り回しながら僕らを呼ぶ。

玉藻さん……車運転出来るんだ……

僕ら三人は玉藻さんに促されるままについていった。

玉藻さんの運転は快適だったが、真っ赤のオープンカーは目立つと思うの僕だけだろうか。

しかも、車自体、無駄に高そうだし……

「この車は、だいたい1000万円はいつてると思ったわ。買って貰ったモノだからよく知らない」

さようで……

もう車については何も言いませんし、思いません。

ちなみに玉葛、紅葉は僕にもたれかかり熟睡中である。

可愛い寝顔だよ。

そうこうしているうちに家についた。

玄関を上がり、リビングのドアの前まで来て、部屋の中の騒々しさに眉を寄せた。

意を決してドアを開けると、

「おい、お前ら急げよ……ん？　おう、ハル坊じゃないか。邪魔してるぜ」

「ホント、シズちゃん達は準備が……あつ、ハル君お帰り。紅葉もいるのね」

「うっさいわね。だってコレも欲しいし……あつ、アレも必要じゃない。晴信お帰り。ええっと、どこに置いたっけ？」

「静音さん、落ち着いて探そ。お帰り晴信、紅葉ちゃん。ええっと後ろの方は？　晴信のお友達？」

僕と紅葉の両親が慌ただしくリビングを散らかしていた。

とりあえず声を掛けて来た順に言つと、

紅葉父、こやましん古山芯。

紅葉母、こやまじうか古山紅華。

僕の母、やすもりしすね安森静音。

僕の父、やすもりはるしげ安森春茂である。

てかアナタ達は何をなさってるので？

「何って旅行の準備だよ。世界半年の旅だよ。世界を半年かけて旅する旅行なのだよ。凄いだろ？　あれ？　言ってなかったっけ？」

聞いてないよ。

父さん。

「ハルのお父さん達は分かるけど、パパ達は何してるの？」

そう紅葉の両親も大量の荷物を持っている。

「シズちゃん、そんなの現地で買えばいいでしょ。あら、紅葉ったら聞いてなかったの？　この旅行の招待券、二人一組ツアー招待券なのよ。リッチね」

「聞いてないわよ!!」

どうやら紅葉の家もそうらしい。

「確かに、言ってなかったな。ガハハハ。そうそう、紅葉、お前今日から半年、こっちの家に住んで、ハル坊に面倒見てもらえよ。帰ってきたら家が無いなんてイヤだからな。ガハハハ」

豪快に笑い、とんでもないコトを言う苾さん。

紅葉、顔を真っ赤にして硬直中。

「ハル坊だったら、紅葉と間違いが起きても問題ないしな」

さらなる問題発言。

誰かこの人止めて!!

紅葉、顔から湯気出てるよ。

玉葛は理解をしてないのか首傾げてるし。

玉藻さんもニヤリって笑わないで下さいよ。

「苾さん、お客さんの前だからそう言う話しは控えて下さいよ」

「おおわりい」

父さんが一応苾さんをたしなめ、苾さんもそれに応じる。

だが、父さんよ。

その言葉、捉えようには、子供の前だけなら話して良いという意味になります。

「ところで晴信。後ろの二人は誰だ」

母さん、お客さんに背中見せながら、誰だは無いでしょ。

紹介してない僕も悪いですが……

でもどうやって紹介すればいいんだ？

「晴信、ちよつと失礼するわ」

あれこれ悩んでいると玉藻さんが前に出てきた。

「どうも、私は玉藻といいます。いつも妹がこちらの晴信君にお世話になっております」

「いえいえ、コレはご丁寧に」

玉藻さんが頭を下げると、父さんも律儀にお辞儀する。

「今日、ご訪問させて頂きましたのは、この私の妹、玉葛が、こちらで晴信君の為に家事などを手伝いたいと言いましたので、そのご相談に参りました。あつご安心してください。この玉葛。そこいらの旅館よりいい仕事をしましから」

玉葛を売り込み始めたあ！！！

僕の両親の荷造りする手が止まった。

はたして両親の答えとは。

常識的な返答を期待します。

第6話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（前編）　（後書き）

多分、話が見えてしまったかも知れませんが突き通します。

あと、質問の内容はホント何でもいいので忘れずに。

作成秘話とかでも答えられる範囲で答えます。

お読みくださりありがとうございます。
最近自動車学校でテンパる爆弾蛙より

第7話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（後編）　（前書き）

後編でえゝす

第7話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（後編）

最初に口を開いたのは、母さんだった。

「……いいわ。二階にある部屋、好きに使って。晴信、紅葉ちゃんと玉葛ちゃんだっけ？　二人を空き部屋に案内しなさい」

母さん！？

ショートヘアーで眼鏡と煙草がよく似合い、背の高いスレンダーな体型を持つ僕の母は、冷たくそう言った。

「そうだね。晴信の友達なら悪い子じゃないだろうからね。晴信さえ手を出さなければ、問題ないでしょ。良いですよ？　芯さん、紅葉さん」

父さんまで！？

エプロンと笑顔がよく似合う僕の父は、これまた笑顔で母さんに同意してくれました。

僕の両親に常識を期待するのは無謀だったのだろうか。

まあ父さんに関しては、母さんにベタ惚れで頭が上がらない人だから予想は出来てたけどね。

熊のような印象の芯さんや、紅葉と並ぶと瓜二つで、しかも姉妹なんじゃないかと思わせるぐらい若く見える紅葉さんも異論は無い様で、頷いている。

玉藻さんは玉藻さんで、意外、と言いたげな顔をいている。

紅葉と玉葛は軽く睨み合いながら何かを話している。

ちよつと長い沈黙の中、また母さんが口を開けた。

「不満でもあるの？　二人より三人の方が間違いが起きにくいですよ。……まだ晴信は誰にもやる気ねえし……」

最後に何かボソツと言っていたみたいだけど気にしない。

だって、母さんが実はこんなにも常識的な考えをしていただんなで……

疑ってごめんなさい。

「文句ねえならさっさと行きやがれ!!」

謝罪の言葉を思っていたら、母さんに怒鳴られてしまった。

その時の母さんの形相に僕ら三人は驚き、小走りで二階に向かった。

「静かに行きやがれ!!」

はい!!

「ああ怖かった、静音さん怒るとウチのパパでも手に負えないらしいし……ええつとたしか、一番奥の部屋がハルの部屋だったよね。」

で、その隣の部屋と向かいの部屋が空き部屋だったよね」

二階に上がり、空き部屋の説明をしようとした矢先、紅葉に全部言われてしまった。

「じゃあ! わ、私が晴信の隣の部屋な」

「良いわよ」

僕抜きの相談。

別に良いですよ。

君達二人で決めることだからね。

「やけに……まあ良い。人間素直が一番だ。これで毎晩壁越しの会話が……」

玉葛さん、そんな今にもとろけてしまいそうな顔で言っても出来ませんよ。

なんせ

「安心して玉葛。そんな安っぽい少女漫画みたいな事は絶対ないから。だって、晴信のベッドは窓際にある上に、隣の部屋のある方の壁にはタンス、クローゼット、本棚によって塞がれてるもの。そして、それら全部を地震対策として頑丈に固定してあるから動かす事

が出来ないのよ」

オホホホと一昔前の少女漫画のように勝ち誇った顔で高笑いをする紅葉。

玉葛もまた、一昔前の少女漫画のようなポーズで床に座り込むと、これまた一昔前の少女漫画のような顔で驚いていた。なんか、リアクションが濃い。

しばらくすると気が済んだのか、濃いリアクションを止めるとそれぞれの部屋を確認し始めた。

2つの部屋は窓の数こそ違えど、基本的には同じ間取りで、ベッド、テーブル、タンス、クローゼット、本棚は完備されており、直ぐに人が生活出来るように綺麗にされている。

なぜ、空き部屋がこの様になっているのかというと、母さんが『殺風景』の一言共に父さんにやらせたのだ。

「これに文句を付けたら罰が当たる」

「さすが春茂さんだね。パパに荷物持ってきてもらわなきゃ」

廊下で待っていると二人が出てきた。

各々満足げな顔をしている。

まあ当たり前だと思うけど。

僕が二人を連れて一階に降りると母さん達は玄関にいた。

「パパ。もう行っちゃうの？」

「ああ……紅葉いい……半年会えないが元気に見送ってくれよ」

「うん！ いってらっしゃいパパ。でもその前に私の部屋のタンス持ってきてくれると嬉しいな」

「なに！？ ホントか？ ……と言うことは、紅葉、部屋に入っているのか？」

「うん。早く持ってきて」

「うおおおお！」

芯さん行っちゃったよ。

てか紅葉、いいのかよ。

そんな扱いで……

芯さん可哀想だよ。

「玉藻姉様。荷物を取りに行こう」

「あら、玉葛そんなに急いで……どうせ引越にはもう少し準備しなくちゃ出来ないわよ」

「それが出来るのだ。貸して下さる部屋には家具が一通りあってな」

「はいはい、わかったから少し落ち着きなさい。それでは、失礼しました。」

玉葛は玉藻さんを急かして荷物を取りに帰っていった。

「紅葉お待たせ」

芯さん早！！

タンスって一人担げる物なの？

「じゃあ運んで」

紅葉さあん労いの言葉とかあげようよ。

「良いぜ」

芯さん……

良いんだね。

幸せなんだね。

紅葉と芯さんはとても幸せそうな顔で二階の紅葉の部屋に向かっていった。

二人の姿を見ていると母さんが話し掛けてきた。

「注意しろよ」

何に！？

ってそれだけ？

もう、既に外に出て煙草を吹かしている。

「とりあえず晴信、火に注意するんだよ。あと戸締まりに賞味期限

と生水と……あつ、掃除はマメにするんだよ。埃は体に悪いからね
気にしすぎだよ!!

父さん、僕は大丈夫だから。

「あとあと」

まだあるのかよ!!

「春茂いい加減にしろ。晴信はそこまでガキじゃねえ。行くぞ。達
者でな」

さすがに母さんが止めた。

そして母さんに父さん、それに苺さんと紅華はずっと待たせていた
タクシーに乗り旅行へと出かけていった。

第7話　玉葛の住む所と僕の両親と紅葉の両親と僕（後編）（後書き）

お知らせです。

中途半端に良かった調子が

ついにけつまずいて普段ぐらいになりました。

月木更新は変わらないのでご安心を

第8話　ダシ巻き卵と厚焼き卵と僕（前書き）

寝坊しました。

昨日、修検と仮免試験だったので…

と言いつけにもならない言いつけをしている分けですが、皆さんは玉子焼きが好きですか？

第8話　ダシ巻き卵と厚焼き卵と僕

僕は朝ご飯を食べている。

ちなみに玉葛は母さん達が行った後直ぐに戻って来て、手料理を披露してくれた。

冷蔵庫の中のあり合わせで作った、油揚げの味噌汁に豚肉と野菜の炒めものだったけど味加減が抜群で美味しかった。

今朝のメニューは豆腐の味噌汁に焼きジャケ、玉子焼きとご飯のごく一般的なものだ。

これらも玉葛が作ったのだが……
とってもピリピリしたプレッシャーを感じている。

「どっちが美味しい？」

僕の前には、二種類の玉子焼き。

玉葛の作ったかつおダシの風味がたまらないダシ巻き卵と紅葉が唯一美味しく作れる甘い甘い厚焼き卵だ。

この二種類の玉子焼きを前に、僕は二人からピリピリとしたプレッシャーを感じている。

「どっちが美味しい！？」

この二人の対決は朝早くから行われていた。

朝、目が覚めて一階に降りるとキッチンから美味しそうな匂いが漂ってきていた。

二人の争う声と共に……

キッチンに近寄り、ケンカの内容を確認してみた。

するところだ。

「今朝は和でまとめるのだから、甘い厚焼き卵など合わん!!」

「そんなこと言っただって、厚焼き卵はハルの好物なの」

「そうは、言っただものの、やはり合わん!」

「そんな事は無いもん。ハルなら美味しいって食べてくれる」

「まあそうだろうよ。……しかし、さっきからずつと厚焼き卵に執着しているな、味噌汁の火の番を頼んだ時の様子からして、もしや

紅葉……お前、料理は厚焼き卵しか出来ないのだな」

「ギクツ………そそそんな事ないよ……」

「目が泳いでいるぞ」

まあ紅葉は凶星を指されたわけで……

内容としては今日の朝ご飯のメニューにどっちを使うか、と言う事らしいが、僕個人としては両方好きなので、両方あってくれた方がいい訳なんですが。

僕がその事を伝えようとした時、二人が急にこちらを向き、

「どっちがいい?」

と聞いてきた。

僕に気付いていらしたんですね。

いい機会のなので二人に伝えようとした時、またしても二人が僕より先に口を開いた。

「どっちの玉子焼きが美味しいか食べて確かめて」

それ、さっきまでの主旨と違いますか!?

そして今に至ると言う訳なのだ。

まだ一切れつつしか食べていないので、もう一切れつつ食べてみる。まずは玉葛のダシ巻き卵から。

口に入れ噛んだ瞬間に広がるかつおダシの風味はたまらない、この後や前に食べるだろう、おかずやご飯と良く合いそうだ。

次に紅葉の厚焼き卵。

口に入れた途端に広がる甘さ。

だが、それは甘過ぎず、丁度良い。

この前がしょっぱい焼きジャケや味噌汁だったとしても上手く打ち消してくれる上に、その後にご飯を食べても問題ないだろう。

どちらも上手い。

若干食べ合わせ的にダシ巻き卵の方が良いが、厚焼き卵も負けてはいない……

コレは難しい……

「どつちが……」

二人も僕の真剣な表情に、気付き、言葉を止めた。

しばし沈黙。

「どつちも美味しい」

優柔不断だと罵ればいい。

どつちも美味しいのは事実だからこれでいい。

必死で自分の答えを正当化するコトを考えていると二人の様子がおかしい事に気付いた。

「ああああううう」

「くううにやあああ」

椅子から崩れ落ち悶えていた。

「こ、腰が砕けたあ……」

「立てないよあ……」

何故!?

どうした！？

「晴信……お前の声は……なんて……」

「わ、私だって、な、何年かぶりだよ……ああ……」

は？
僕の声？

「……とりあえず、晴信^{ハル}、声出すの禁止！！ 体が保たない」

なんと……

禁止されると結構困るんだけど……

つてそうでもないし。

悲しいことに、普段からあまり声出す機会がない……

だから、あえて増やしたり減らしたりする必要ないね。

あははは！！

あはは……あは……はは……はあ

第8話　ダシ巻き卵と厚焼き卵と僕（後書き）

僕は……僕は、玉子焼きが大好きだああ……！！！！！！！！

ダシ巻き卵のたまらない旨味。
厚焼き卵の広がる甘さ。

好きですねえ……！！

無論、塩で味付けした玉子焼きも好きですよ。

他にも海苔を巻いたのや、ほうれん草を入れたやつとかも好きですよ。

すみません。

冗談抜きに好物なものでして……

でわ、また、月曜日に

第9話〜玉葛の一人称と僕〜（前書き）

PVアクセス数が一万を超えましたあ！！

木曜日の時点で既に超えてましたが、玉子焼きに気を取られ忘れていました。
すみません。

毎回読んでくださる皆さんありがとうございます！！

第9話　玉葛の一人称と僕

僕は今、リビングでのんびりテレビを見ている。

僕の脇には、さっき、紅葉にもらった猫まんまでお腹いっぱいになったツツが、腹を見せ寝ている。

うん、お茶がウマイ。

他の二人は、砕けた腰が治りしだい、各々部屋の整理を始めている。基本、衣類の整理が中心なので、僕が助けてあげられるような事はない。

だから、僕はこうして、落ち着いてテレビを見ながらお茶飲んで、目覚ましパイポを吸って居られるのだ。

ドタドタと階段を駆け下りる音。

僕の今日の平穩はどうやらここまでのようだ。

足音は2つ。

また、ケンカでもしたのだろうか。

「ハルル〜聞いて!!」

意外にも僕を呼んだのは紅葉一人。

玉葛は紅葉に引つ張られる形で申し訳無さそうに紅葉の後ろにいる。

「ハルハル、聞いてよ聞いて。って聞いている!？」

聞くから落ち着いて話しましょう。

「あのね。玉葛、着物しか持ってないの」
「は？」

「だから、玉葛のタンスの中には着物しか入っていないくて、洋服が一枚もないの」

「紅葉、服は一着と数えるぞ」

「玉葛、細かいよ……」

ああそういうこと。

つで？

「だあかあ。買い出し行くのよ」

別に良いけど、玉葛はどうなんだ。

僕は玉葛の方を見てみる。

「そ、そうだな。洋服と言うものには興味が無いわけでは無い。むしろ有る。それにわ、私の食器とかも欲しいから買い出しには行きたい」

顔を赤らめて言う玉葛。

そういえば玉葛の食器はお客様用だった。

よし行こう。

あと玉葛の一人称。

言いくいなら無理をする必要が無いと伝えねば。

聞いている僕も何か違和感あるし。

「」

「だからしゃべるな!!」

口を開けた瞬間、二人に止められた。

「ハル、一体なんなの」

ジツと見つめてくる紅葉。

一応『玉葛の一人称が気になる』と紅葉を見つめ返すという形で送ってみる。

するとかつと紅葉の顔が急に赤くなり、紅葉は慌てて顔を背けた。

「あ、あああれよ。玉葛。あなたの一人称が気になるんだって」

と紅葉は赤くなった顔を手うちわで扇ぎながら玉葛に告げた。

うん、ばっちし。

だてに16年間幼馴染みをやっているわけじゃないということところかな。

「……わかった。なら『ワラワ』でいいか？」

うん。
そっちの方がしっくりくる。

「ところで玉葛。何かなその目は、羨ましいのかなあ？」

おいおい紅葉。

つて玉葛もジト目で紅葉を見るなよ。

「さつ玉葛。着替えるわよ。一人称よりも着物で出歩く方が目立つからね」

「えっ？」

紅葉の急な言葉に驚く玉葛。

「今日だけ貸してあげる」

「えっえっ？」

さあと促す紅葉に戸惑う玉葛。

さつさと行つてきな。

僕は軽く玉葛の背中を押してあげた。

玉葛もそれで踏ん切りがついたのか紅葉の後について行った。時間がかかるだろうからゆっくり待たせてもらおう。

一時間弱経過。

「ハル起きて」

「そうだ。晴信起きろ」

うつ…………うつうつ…………

朝？

「「寝ぼけて無いでしっかりしろ」」

……………どうも寝ていたようで。

目が覚めると目の前には美少女が二人。

二人ともボーイッシュを中心に可愛くまとめた様子だ。

寝ぼけた頭の今の僕では、この表現が精一杯だ。

でも二人とも可愛いのは事実。

「玉葛。お金は持っているの？」

「あああるぞ。葛葉姉様がワラワにとくれたからな」と通帳を紅葉に手渡す。

そして、通帳の中をのぞき込んだその瞬間に紅葉が固まった。僕も覗いて見……………る……………。

「確か“株式”で稼いだとか言っていたぞ」と通帳にあるその金額。

10,000,000円。

そう、一千万円

……………多すぎやしないか？

「あと、こっちが低金額用だそうだ」

ともう一枚の通帳。

開けてみると。

一、十、百、千、万、十万、百万。

はい、五百万円。

持たせ過ぎだつて……………

とりあえず金庫も買わなきゃね。

さっ小金額用通帳持って行こうか。

第9話〜玉葛の一人称と僕〜（後書き）

書くことがない……

次回予告でもすればいいのかなあ？

次回、

玉葛の服の為に街繰り出した。

晴信、

紅葉、

玉葛の三人。

そして、出会う暴力英雄^{ひーろー}。

次回

第10話〜玉葛の洋服と暴力英雄^{ひーろー}と僕〜

次回予告難しい。

何が言いたいのかわかんねえよ……

感想やメッセージ、質問を待ってます。

では、また次の時に

第10話　玉葛の洋服と暴力英雄（ヒーロー）と僕

女性の買い物は長い。

しかも、それが洋服となればより一層長い。

玉葛が着替え終わった後すぐに、狐禮市中心街にあるデパートに来て、まず始めに玉葛の食器やら日用品を買い、洋服を買いに来たという訳だ。

だが、玉葛と紅葉が服を選び始めてかれこれ三時間になる。ちなみに僕は、近くの休憩コーナーでひたすら待っている。

何でも、紅葉いわく、『玉葛は今日始めて洋服を買うの。だからいきなりハルに選んで貰うなんてズルい。それにある程度自分の好みを確立しといた方がいいの』との事らしい。だから僕はひたすら待ちぼうけなのである。

ぐううう

お腹すいたなあ。

まあお昼過ぎてるから当たり前だけどね。

「ハル。お待たせ」

あれからまた、30分待つてようやく紅葉が戻ってきた。あれ？

玉葛は？

「ハル聞いてよ」

何？

「玉葛ったら私より背が小さいのに！！　こうスタイルがいいんだよ！！！！」

紅葉は何やら手を動かしながらぼやき始めた。
つて、はあ？

僕にそんなコト言われても……

「でも……サイズじゃ負けて……無いはず」

……

ノーコメントの方向でお願いします。

ところで玉葛は？

僕は紅葉の顔をのぞき込んだ。

「ああ玉葛ね。可愛く仕上がったわよ。玉葛出てらっしゃい」

………

………

………

まだ？

「あれ？ 玉葛？ 何、今更恥ずかしがってるの。ほら、出ておいでってば」

柱の向こうに居るらしく紅葉が引っ張り出そうとしている。

「分かった。分かったから、引っ張らないでくれ」

どうやら決心が付いたようだ。

「笑わないでくれよ」

ああ笑わない。

玉葛は柱の影からゆっくりと現れた。

デニムのワンピースに茶色ファアの付いた黒のジャケット。

玉葛の黒い艶髪とよく似合っていて可愛い。

………っ！？

黒い！？

髪が黒い！？

左の横髪に一房つつ白髪と金髪が残っているが、全体的に艶のある黒髪になっている。

三時間と30分前には、まだ白髪に金メッシュだったのに。

「ああ髪の色か？ 紅葉が目立つと言ってな。黒くしたのだ。九尾のワラワにしてみればこんなの簡単さ」
た、確かに。

よく似合って居るし問題ないか。

「さっ、ハル、荷物持つて。お昼ご飯食べに行こ」
そうだね。

と即、頷きたいが、この荷物を一人で持てと？

僕の目の前、玉葛、紅葉の足元に山のように置かれた買い物袋。
具体的には紙袋18個。
多いよ。

「すまん、晴信」

玉葛まで！？

……わかりました。

僕が持つのは12個までだからね。

どうせ、いくつかは紅葉のだろうし。

僕は適当に12個の紙袋を持つと歩き始めた。

「おいしかったー！」

「うん。あの“なぼりたん”と言う料理は良いな。今度作り方を教えて欲しい」

「あれ、玉葛つて洋食は作れないの？」

「ああ。葛葉姉様が洋食をあまり知らなくてな。ハンバーグとカレ
ー、シチューぐらいしか作れないのだ」

「へえ」。ハルはスゴいよ。本さえあれば大抵の料理作れるからね」
「……ワラワもあれば作れるぞ」

「えっ？」

まあある程度料理が出来れば当然なわけで。

ちなみに僕らは、喫茶“昼行灯”で昼食を取り、家に向かってい
るところである。

昼行灯には、これからちよくちよく行くコトになると思っているので、玉
葛を案内した。

どうやら玉葛も昼行灯が気にいった様なので嬉しいばかりだ。

「きゃっ！！放して下さい」

小さな悲鳴と拒否の声。

目を向けると一人の少女を三人の少年が囲っている。

どの街にも不良はいるものである。

この狐禮市とて例外では無く。

いくつもの不良グループが縄張り争いをしている。

「不謹慎な奴らだ」

ボソツと玉葛の声が聞こえる。

助けに行くようだ。

「玉葛待つて。」

そうその通り。

「何故だ。見て見ぬ振りをするきか？」

違う。

違うんだよ、玉葛。

「違うの。今行くと」

ドンッ！！！

「げふんっ！！！」

「よしき〜！」

「よっちゃん！！」

少女を捕まえていた少年が蛙の潰れる様な悲鳴を上げながら飛んだ

……いや、滑って行く。

きつつきたいほう

橋樑大豊を乗せながら。

「てめえ！！！」

「よっちゃんに何すんだ！？ 殺されたいのか？」

一人が滑って行った少年（以下よしき君）の上に乗った大豊に掴みかかる。

。

「巻き込まれるから……ってアイツ等、新参者なのかな？」

紅葉は、玉葛を止めると、僕の方へたずねてきた。

さあ？

そうなんじゃないの？

ご苦労なこった。

わざわざ殴られに来るなんてね。

「ぶわっ！！！」

「た、たっちゃん」

大豊に掴みかかった少年（以下たっちゃん）は囲まれていた少女と三人のうち最後の一人の上を悠々と飛んでいった。

「あわわわ……」

かなり焦っている様だ。

「ぶぎよっ！」

まだよしき君の上乗っていた大豊がやつと動き出した。

よしき君からまた蛙の潰れた様な悲鳴がでる。

大豊は一瞬で残った少年の懷に入り、腹、顔、胸の順に拳、膝、蹴りと入れ、最後の少年を沈める。

「悪、即、滅」

大豊はやりきった顔で決めゼリフをいう。

お前だけだよ。

そんな言葉が似合うのは……

「誰だ、あいつは……」

「あれ？ あれは私達の幼馴染み……てか一応、ハル親友。でもってこの街の暴力英雄ぼうりよくえいゆう」

そう、大豊は僕の幼馴染みで親友だ。

ちなみに暴力英雄と書いてヒーローと呼ばれたり、そのまま暴力英雄と呼ばれたりする。

「暴力英雄？ 一応正義の味方ってやつか？」

分からないよね。

まあ間違いではないが正確には、大豊の“善”の定義の味方、大豊の“悪”の定義の敵と言う独善者なんだよね。

「微妙な表情だな……それで間違いで無いと言うことなのか？ ない。挨拶した方がいいかな？」

玉葛が挨拶すべきか悩んでいると、大豊がこちらに気付いた。

「晴信。なにしてんだ？ ……ん？ 誰だ？ この子？」

「ワラ、私は玉葛という者だ。昨日から晴信の家に家事手伝いということで居候をしている」

「ふ……ん」

見つめ二人。

「まあいいや。玉葛だな。わかった。覚えとく。晴信、犯罪だけに走るな。友を殴るのは嫌だからな」

縁起でも無いこと言うな。

「じゃ、次の悪党探しにいくわ。さいなら」

そう言い残すと大豊は立ち去っていった。
趣味に忙しい奴だからな。

どうせなら今度、玉葛を源太に会わせてあげなきゃ。
たぶん、双方氣にいるだろう。
いつがいいかなあ……

僕らそのまま帰路についた。

第10話　玉葛の洋服と暴力英雄（ヒーロー）と僕（後書き）

どうも爆弾蛙です。

質問がとどきました。

“ハル君はどうやって普段コミュニケーションを取っているのですか？”

です。

キャラ指定が無かったので僕の方で勝手に決めさせてもらいました。

玉葛、紅葉、晴信です。

玉葛（以下玉）「どうも、玉葛だ」

紅葉（以下紅）「紅葉です」

晴信（以下晴）「」

玉、紅「しゃべるな」

紅「ハルのコミュニケーション能力についての質問だね。確かにハルは、しゃべらないよね」

玉「うむ、極端に無口。コレが晴信だな」

紅「昔頃から滅多なコトじゃしゃべらないんだよね」

玉「そうそう、五年前のあの二週間のあいだずっとしゃべらずにいたしな。まあ玉藻姉様とかは会話してたらしいけど……」

紅「恥ずかしいとかそう言うわけでもってないのに何でだろ。長い付き合いだけど分らないんだ」

玉「そうか……でもまあ、質問はそこじゃ無く、晴信の普段のコミュニケーションだ」

紅「そうね。ハルは顔に考えてるコトがスッゴくでの」

玉「そうだな。表情豊で分かり易いな」

紅「私ぐらいになるとかなり細かい所まで分かる時があるよ」

玉「……」

紅「なによ。その目は……」

玉「別に」

紅「まあ結論を言つと」

玉「そうだな」

玉、紅「考えて居ることが凄く顔に出る」

紅「やったあ。ハモったハモった」

玉「そうだな！そうだな！」

紅「じゃっ帰ろつか」

玉「そっだな」

晴信君。

という事ですがよろしいですか？

晴「うんまあ……でもあまり気にして無かったからなあ」

さようで……

晴「そもそもだ。そもそも、みんな、僕がしゃべる前に話しを進めていくからしゃべる機会が無いんだよ」

確かに……

しかも発声禁止もされたしね。

晴「まああまり普段と変わらないから気にならないけどね。いざとなったら筆談とかあるし」

そ、そっだね。

晴「じゃあ僕も帰ります」

さよなら。

皆さん分かっていただけでしょうか？
要するに、晴信の周りに晴信の意見を聞こうとする人が少ないから
会話する必要が少ないという訳でした。

てか長!!!

質問にはもう少し短く答えるようにしますので、
どんどん質問をください。

でわまた次の機会に

第11話 早起きと朝食と僕 (前書き)

ザッ王道。

第11話　早起きと朝食と僕

自慢じゃないが、僕は寝起きが悪いし、寝付きがもの凄くいい。ほつといたら何度でも寝直すコトができる。

それこそ一日中。

だから、目覚ましパイプなどで簡単に寝ない様にしているのだが……今、僕の目の前には、一瞬で目の醒める状況が出来上がっていた。

現時刻　04:37。

現状況　ベッドの上にて両手に花。

夢のようなシチュエーションにいます。

でも、シングルベッドで三人は辛い。

無論、二人が僕の上に乗る形で寝ている訳で……。

先に謝しておく。

ごめん。

重たいです。

そんな思いを二人に送ってみた。

「んっ……」

その思いが届いたのかどうかは分からないが、とりあえず、玉葛が目を覚ました。

そして、寝ぼけた目と合う。

「……………あっ……………」

僕が起きてるコトに気付いたのか、顔を赤くして慌てる玉葛。

「ももも紅葉。起きて。早く」

「うにゅ……………なに？……………ってええ！？　ハルなんで起きてるの！？」

起きてちゃいけないのかよ……

「すまん晴信。すぐに朝食の準備をするから。ほら、紅葉行くぞ」

「えっ、私まだ寝る……はいはい、分かってます。約束しました。守ります」

と慌ただしく二人は僕の部屋を後にした。

今から朝ご飯の準備って……早くないか？

まあやりたいならやれば良いけど……

僕はもう一寝入りするだけだし。

こうして僕はまた夢の中へと落ちて行つた。

「学校？　ワラワは行かんよ。と言つか行けない」

朝食中、玉葛は学校をどうするのか気になったので聞いて見たら、こう返ってきた。

行けないとはどういうコトなのだろうか。

ちなみに質問は紙に書いてした。

玉葛が必死に声を出すことを嫌がる為だ。

紅葉は、朝が早かったせいか小舟を漕いでいる。

「少し考えれば分かるだろ……」

小さくため息をつく玉葛。

「ワラワには、こつちの世界……ん？　ああこの世と言って欲しいんだな。分かった。ややこしいからな。もう一度言っぞ。ワラワにはこの世の戸籍がない」

ああ……！

納得。

あつ、でも玉藻さん、免許持ってなかったか？

でもあの人なら無免で運転しそうだな。

「玉藻姉様が『どうせ要らなくなるんだから要らないでしょ』って言うって作ってくれなかったのだ」

作れるのかよ!?

「まあ、学校にはそのうちついていくよ。方法ならいくつか有るし。それにワラワも少し用事があるからな」

その『ついていく』の“つく”はどの“つく”なのかな?

“付く”?

それとも“憑く”?

後、用事って?

ゴチン!!

僕が玉葛の用事について聞こうとした時、紅葉が頭を机にぶつけた。

「あははは」

笑う玉葛。

僕は必死でこらえてるというに……

「ん? ん?」

状況を理解していない様子の紅葉。

今日の朝食は、玉葛の軽快な笑い声が響くとても楽しいものだった。

ってこれで終わるか!

「紅葉、早く食べてくれ。片付かない」

僕が用事についてもう一度聞こうとすると、玉葛は紅葉を促し、食べ終わった僕と玉葛の食器を持って流しに行ってしまった。

これじゃ聞けないじゃないか。

「玉葛。玉葛って学校どうするの?」

「ん? あっ紅葉は寝ていて聞いて無かったのか。晴信にも言ったが、ワラワは戸籍がないから学校に行けないのだ。玉藻姉様が『要らないでしょ』ってね。それに、今日は用事もあったしな」

んん!?

これは!!

「用事って何?」

紅葉ナイス!

「友人が来るだけだ。女性のな。勝手に招く形になったが……晴信すまん」

そう言うことか。
気にするな。

「その友人ってどんな人?」

「自己中心的で気まぐれで人の話を聞かない奴だが、友達思いでもあつて良い奴だよ」

振り向いて話す玉葛の顔は、かなり嫌そうな顔だが誇らしげでもある。

「仲良いんだね」

「……ああ」

食べ終わった食器を持って近づく紅葉に対して、玉葛は照れくさそうに後片付けに戻った。

第11話 早起きと朝食と僕 (後書き)

夜這いネタですね。

ええ王道ですよ。

どうも、爆弾蛙です。

今回の王道はですねえ。

一度はやられてみたいし、やってみたいかなあとは思っ、
シチュエーションなのですよ。 そんな
個人的に

まあ次回をお楽しみに
質問、感想お待ちしてます。
とくに質問を！！

第12話 玉葛の友人と僕 (前書き)

調子が良いみたいです。

第12話　玉葛の友人と僕

あの後、元気よく玉葛に見送られた僕らは、当然のごとく学校に登校し、半日だらだらと過ごした後、昼食がてら土曜日にあったコトを源太に説明していた。

ちなみに昼食は玉葛のお手製弁当。

紅葉もしきりに自分も手伝ったコトを主張していたが、甘い厚焼き卵が無い時点で本当かどうか怪しいものである。

「ふーん……そういやあ有ったなそんな事も。っでその恩人さんが来たと」

僕の親友、日出川源太ひでかわげんたは僕らの話を茶化すことなく真面目に聞いてくれた。

無論笑顔で。

「っで、学校に転入してきたりしないんだね」
そう言うこと。

僕は最後の玉子焼きを口に入れ、源太の言葉に頷いた所で固まった。横を見ると、紅葉が期待の眼差しで見っていた。

紅葉か……

僕が食べた玉子焼きは、かつおダシの風味と砂糖の甘さのきいた味だった。

僕個人としては好きになれない味だ。

「っで晴信。聞いてるか？」

すまん。

聞いてなかった。

この玉子焼きに気を取られていたよ。
っで一体何？

「だから、今日お前の家行くからな」

たぶん、大丈夫かな？

いや、でも、玉葛の友人が来るとか言ってたし……

どうだろ……

「じゃっ、ちよつと用事があるから。よろしくな」

「なにになに？ 源太。またラブレターで呼び出し？ なかなか減らないね」

「ああ。正直疲れるよ……とりあえず今日行くからな。頼むよ！

……はあ……どうやって断ろう……」

源太は疲れた笑顔でその待ち合わせ場所に向かって行つた。

あいつホントにモテるからなあ。

でも、源太が誰かと付き合つたと言う噂や話しは一度も聞いたコトが無い。

どうしてなのだろうか……

何か考えねば。

「お邪魔します」

「ただいまあ」

ただいま……。

源太、紅葉、僕ら三人は、なんの問題も無く僕の家へと着いてしまった。

何も思いつかなかった。

そもそも、目的達成至上主義と言うべきなのか、源太は“コレ”と一度目的を決めてしまうと滅多なコトで目的の達成を諦めない。

僕は目的に向かって突っ走る源太を止めた経験が無いのだ。

ここまで来たら仕方無いので、僕は、とりあえず源太を客間へと案

内しようとした。

が、既に客間からは話し声が聞こえてきた。

玉葛とその友人だと思っ。

「そっか……奴がこつちに渡ったのか……」

「そうにやあ。海亀一族と渡ったと聞いたから、もうこの町に居ると思っにや」

「3日前だろ？」

「そうにや。でも、あのお姫さんは水を介して移動できるにや。わけにやいにや」

「そっだな。他には何かあるか？」

「そっだにや……玉葛にはあまり関係にやいかもだけど……ローラソって分かるかにや？ ケット・シーの次期族長って言えば分かると思っにや。アイツも渡ったみたいにやのにや。ウザいにや。ム力つくにや。しかもパートナー見つけ出し、暇だからって日本に向かつてるらしいにや。マジ最悪にや」

「そっそっ……」

「ところでさつきからドアの所に人が居るにや」
げっ

気付いてた。

「男二人に女一人。男の一人は身長175cmぐらいかにや？ もう一人はもう少し背が高めにや。女は……ぷぷ、玉葛とほとんど変わらにやいにや。ちんちくりんにや」

すげっ！？

なんでそんなに分かる。

と一人僕が驚いていると紅葉に押し退けられた。

「あんた、初対面の人間にちんちくりんは無いでしょ……！」

ドアを開けると共に怒鳴り散らす紅葉。

気持ちは分からないでも無いが、お前も相手とは初対面な。

口が悪いよ。

「はんつ。いきなりお客さんを『あんた』呼ばわりする人に言われたくにゃいにゃ」

「それはあんたが」

「また、あんた呼ばわりにゃ。そもそもちんちくりんって言った時はまだあんたと会ってないにゃ。初対面ですらにゃいにゃ」

「あんただって『あんた』って……それにあんたの言ったコトが当てはまるの私しかないじゃない。いくら初対面ですらないからって……」

「あんた呼ばわりの人には『あんた』で十分にゃ。それにあんた自己意識過剰にゃんじにゃいの？」

「ううう……」

唸る紅葉。

諦める。

紅葉の負けだ。

僕は紅葉の頭を優しくなでた後、ゆっくりと玉葛の友人で、先ほどまで紅葉と喧嘩していた人物をみた。

一言で言おう。

たぶん予想できた上に予想通りだ。

玉葛の友人は猫娘だ。

彼女の頭にはピクピクとしきりに動く耳があり、腰の辺りから尻尾が二本クネクネとしている。

「あたいは猫又にゃ。よろしくにゃ。安森晴信君かにゃ？ 噂はきいてるにゃ」

さっさようで……。

てか名前は!?

第12話　玉葛の友人と僕（後書き）

ええつと質問が来ました??

玉葛「なぜ、疑問形」

まあそこは触れないと言うことで、質問の内容です。

玉葛の尻尾（九尾の尻尾）についての解説をお願いされました。

玉「だから疑問形か」

うん。

玉「ワラワのことだし、ワラワが答えよう」

ちよつと待って。

玉「ん？」

いいの？

本当に言っちゃうの？

玉「はっ！ 嫌だ！ ワラワは答えんぞ！ 帰る!!」

あああ帰っちゃった。

??「あたいが説明するにや」

きつ君は……!!

ちよつと出るのが早いかなあ

うん。

シッシッ

??「ヒドいにゃ!」

まあ、本編進行状の都合により次回!!

玉葛の尻尾、説明します。

ごめんね

第13話 玉葛と源太と僕 (前書き)

いままでのペースに戻ります。

第13話 玉葛と源太と僕

「晴信、紅葉。彼女は猫又の万里だ^{まり}」

「猫又万里にや。万里でいいにや。よろしくにや」

万里という少女は、見た目から16、7ぐらいの短い黒い髪とピクピク動く猫耳と二本の尻尾を持つ少女だ。

「私は紅葉。古山紅葉。よろしくね。万里。こっちのパイポくわえてるのが安森晴信。つでこのにやけ顔の奴が、日出川源太よ」

「日出川源太です。別ににやけてるわけじゃ無いんですけどね」

紅葉が僕らを紹介する

各々頭を下げ挨拶をしてゆく。

僕がしないのは、紅葉と玉葛に声を出すなと睨まれているからである。

「失礼かもしれませんが“猫又”と言うのは名字か何かなのですか？」

源太が万里さんに質問をする。

確かに僕もそれは気になる。

「そうにや。あたい達がいた世界じゃ名前でどこの誰か分かるようににやってるにや。例えば、あたいの名前、猫又万里にやら“猫又族”の“万里つて人”つて分かるにや。玉葛にやら、九尾玉葛だから“九尾族”の“玉葛つて人”つて分かるにや。種族で大体の住んでる場所が限定されるからよく分かるにや」

僕を含め、源太、紅葉はへえと感嘆の声を上げる。

玉葛……九尾つて名字だったんだ。

「こ、こら！ 万里。一般人が居るのに何を」

「源太にあの世のコト説明したよ」

「紅葉!？」

万里を叱ろうとした玉葛は、紅葉の言葉に驚く。

源太には玉葛が来たコトを言った時点であの世のことを説明した。まあつついといつという訳でして……

「晴信……ってそんな顔したって許さんぞ……くう……」

僕の顔をすぎる様な表情で見た玉葛は、すぐに頬を赤く染め、顔を背けた。

少しむくれた表情をしたのが気になる。

「もう一つ、玉葛さんと万里さんに聞きたいコトがあるのですが……」

とまた源太が質問をする。

たぶん、源太が意地でもウチに来た目的に関係するのだと思う。

だって、いつも爽やかな笑顔に不気味さがあるし……しかも、目が爛々と輝いていて少し怖い。

「いいが……源太と言ったか？ 君は晴信の大切な友人だ。だってらワラワに敬語はいらん。自然体で話してくれた方が嬉しい」

「あたいもにや！ さん付けにやんて虫酸が走るにや」

玉葛が照れながら言う。

万里さ……いや、万里もそれに便乗するように言う。

万里……一応、気を使ってくれた人に『虫酸が走る』はないと思うよ。

「そうですか？ ありがとう。なら遠慮なく」

一拍置いて。

「君たちの世界に魔女、魔法使いといった類たぐいの人はいますか？」
へ？

源太、かなり予想外な質問だよ？

源太の顔は珍しく笑顔では無く、真剣な表情へととなっていた。
冗談では無さそうだ。

「いや、そういった類の者は、ワラワ達が居た世界にはいないな」

「そうにや。そういう人達はむしろこっちの世界の奴にや。まあほとんども半端者だけにや。源太、もしかして魔法使いにでもやりたいのかにや？」

源太は、ただ一回だけ、真剣な顔で頷く。

源太の様子を見ていた紅葉が口を開いた。

「そついえば玉葛の神秘の力つていかにも魔法つて感じたよね。火作つてみたり、氷作つてみたり。あと変化できたり消えてみたりしてさあ。源太、玉葛の弟子になったら？」

「えっ!？」

「本当か!？ お願いできませんか？ 玉葛」

紅葉の発言に玉葛は驚き。

源太もまた、嬉々と輝く目で玉葛をみる。

今度の目は純粹に好奇心で喜んでいるらしく怖くない。

だが、

「無理だ」

無情にも玉葛の口から出たのは否定の言葉。

「ワラワの力は魔法使い達のそれとは別物。魔法使い達とワラワ達では術の体系が違う。だから、ワラワに教えを扱いても魔法使いにはなれない。それにワラワが教えたからと言って、源太がワラワと同じ力を使えるとは限らん。ワラワ等の体系は、その個人の持つ属性を重んじて訓練するからな。“得意不得意はあれど万能に”の魔法使い達とは違うのだ。あと、変化能力は種族の持つ体質のようなものだから人間である源太には無理だ。」

そうだったのか。

玉葛の否定の言葉は源太を思つてのコト。

源太の目的達成至上主義に気付いてはいないと思うが、これで源太が目的とする“魔法使いになる”という目的からズレずに済んだというわけか。

でもこのままだと、あまりにも源太が可哀想過ぎる。
どうにかならないだろうか。

と思っていると、突然万里が源太に話しかけた。

「源太。約束が守れるにやら、魔女を紹介してあげてもいいにや」
「どうやら万里には魔女の知り合いがいるようだ。」

源太もその言葉に普段の調子を取り戻し、笑顔で返した。

「ああ、絶対にその約束を守ろう」

「わかったにや。最初に守って欲しいことにや。あたいを、その魔女のそばにいるマジウザいローランっていうバカネコから守って欲しいにや」

「ん？ わかった。必ず守ろう」

万里が『ローラン』と言う名前を出した時の顔はかなり嫌そうな顔である。

まだ会ったことは無いが一体どんな人（？）なのか気になる。

「じゃつ、教えるにや。名前はマーリン。年は114歳。性別は女。今あたいが知ってるのはここまでにや。ウザいローランと一緒に行動してるから、今日本に向かってる上に、必ずあたいのところにくるにや」

自慢げに話す万里。

そして続けて。

「会うとこまで面倒を見てやるから、ご飯と寝るところの面倒を見て欲しいにや。さっきの約束の中に入れ忘れたから、面倒を見てくれる代わりに、魔法の初級の基本ぐらいなら少し分かるから教えてあげるにや。どうかにや？」

万里は意外にも律儀と言うのが分かった。

「ああいいとも。喜んで」

OKするのかよ。

まあ分からないでも無いけど……

てか、いろいろ知ってるんだな。

驚きだよ。

「晴信、かなり驚いてる様子だな。万里は猫又だ。猫又という種族は両世界を股に掛けた屈指の情報屋種族だ。しかも万里は、その猫又の姫だからな。自然と様々な情報が集まるのだ」

胸を張り語る玉葛。

今朝はなかなか酷いコトを言っていたが、やはり大切な友達なのだろう。

しかし姫ってのは、凄い。

しかも情報を沢山持っているということは、敵に回してはいけな
と言っこと。

気を付けなければ。

まあ本人は良い子だし、大丈夫かな。

第13話 玉葛と源太と僕（後書き）

はい、と言う訳で玉葛の尻尾（九尾の狐の尻尾）ですね。

ええつと誰が答える？

万里（以下万）「あたいがやるにや。玉葛じゃ恥ずかしがって駄目にや」

玉葛「えい。駄目とか言うな。万里が言うぐらいなら自分で言う」

万「……顔真つ赤にや」

玉「うるさい。では、ワラワの尻尾だったな。ワラワ達、九尾一族はの尻尾は成人の証だ。だから皆、二十歳までには九本生えそろうのだ。もっと詳しく言うと、九尾一族は、産まれた時から大量の神秘の力を持っており、尻尾の数によって解放できる神秘の力の量が決まってくるのだ。ちなみにワラワは、八本使えるぞ」

万「おかしいにや。あたいの情報じゃ九本出せるって聞いたにや」

玉「こら、万里！」

万「まあ、ここいらでさよならにや。バイバーイ」

玉「こら！話を聞け」

あつ取られた！！

まあいつか……

てなワケでこんな感じです。
次回をお楽しみに。

感想、質問まってまあす

第14話 玉葛の登校方法と僕（前書き）

ついに……ついに……ついに!!

一人突破!!

感謝感激、土下座の嵐。

皆さんありがとうございます!!

第14話 玉葛の登校方法と僕

朝です。

学校です。

階段の陰です。

玉葛付きです。

「晴信、どうした？ こんな暗い所に……もしや!!」

僕の手のひらの上で、手のひらサイズの玉葛が人聞きの悪い表現をしている。

「ん？ 何をするのだ？」

と、小首を傾げる玉葛。

つて、漫画かテレビで聞きかじった表現するから訳が分からなくなるんだよ。

「ん！？ 何をする！ 紅葉放せ!!」

「うるさい！ 朝決めなかったかな？ 玉葛は私に着いて行ってくて！」

紅葉が玉葛をつまみ上げる。

そう、僕らがこんな階段の陰に居るのは、玉葛が、紅葉の所ではなく、僕の所にいたからだ。

ちなみに、さっきは手のひらサイズと表現したが、正確には20cmぐらいである。

「かなり迂闊だった。学校の感想をすぐに言うべきでは無かったな」「むっ！ サッサといくよ！」

と、紅葉は乱雑に胸ポケットへ玉葛を入れる。

ちなみに、僕らの制服は学ランとセーラー服だ。「痛！ もっと丁寧に扱え!!」

僕もそう思うけど、玉葛も約束を守らなかったのだから自業自得だと思うよ？

「さっ行くよ。ハル」

一人先に行ってしまう紅葉を僕は慌てて追いかけて行った。

「晴信、紅葉。おはよう」

教室に入ると、眩しい笑顔の源太がいた。

そして、紅葉を見て、ニヤリと笑う。

この笑い方にいやらしさが無いのが凄い。

「紅葉、胸ポケットに玉葛がいるでしょ」

見抜いた。

一発で玉葛が居ることを見抜いた源太を、僕を含め、紅葉、そして、玉葛も僅かに顔を出し驚き顔で見ていた。

「おいおい、そんなに驚くなよ。万里に教えてもらった魔法の初級の基礎を実行したまでだよ。“サーチ”ってやつ。他にも神秘の力を増やす“チャージ”を習ったよ」

まだ、二つだけだと、付け足しながら、これまた、眩しい笑顔を作る源太。

「こいつ……天才か……」

玉葛の呟きが聞こえた。

「もしもの事を考えて、並みの者では、見ることが出来ないように、自分に術を掛けていたし、漏れ出す神秘にも気を配っていたのに……」

……

見破られたのがショックだったようだ。

源太には、どうやら魔法使いとしての才能が有るみたいだ。

親友としては嬉しいばかりだ。

「……私達もサーチ使えるけど、何か違うの？ そっちは魔法なんでしょ？」

どうやら紅葉は、魔法と僕らの術……仮に超能力として、それら

の違いに興味がある様子。

「うーん……俺もそこまでは聞かなかったからなあ……玉葛、分かります？」

「とりあえず、ワラワが分かるのは、紅葉やワラワの使うサーチは“探知”で、源太の使うサーチは“探査”と、漢字にすると違うと言うことだけ、後は、ワラワより万里の方が詳しいから後で聞いたらどうだ？」

“探査”と“探知”の違いがいまいちピンとこないが、字が違うぐらいだからそれなりの違いは有るのだろう。

どうでも良いが、僕は玉藻さんに『晴信の探知能力は玉葛にも引けを取らないわ。鍛えれば、玉葛より高くなるかもよ』と評価されており、紅葉は『無いよりマシなレベルね』と評価されている。

本当に僕らの使う超能力は個人差が強いと思う。

キンコンカーン

「HR始めるぞ。古山、日出川、あと安森。そこにいたら先生が入れないだろ。サッサと席に付け」

チャイムが鳴り、突如、僕らの後ろに現れた、僕らの担任、小松^{こまつ}大先生^{だい}。

突如と言ったが、僕らが登校してきた時間や立ち話をしていた位置、要するに始業時間間際に来たコトや教室の入り口に居たコトを考えると驚くことでも無い。

僕は窓側の一番後ろの席、源太はその右斜め前の席、紅葉は真ん中の最前列にある席に着く。

「出欠席を取るぞお」

出欠席を取り始めた、担任、小松大先生。

別に小松先生が先生の仕事をするのに疑問があるわけでは無いが、いつ見ても小松先生を見ていると納得が行かない。

小松先生は、角刈りで逆三角形の体型と、見るからに体育会系の先生なのだが、これでも美術の担当教員。

しかも繊細な絵が多く、生徒の中には小松先生の絵のファンと言う人が居るのだ。

どこか納得が行かない。

「なんだ？ 橘槻は居ないのか？ 休みの連絡もないし……珍しいな」

大豊が居ない！？

『連絡なき欠席や遅刻は悪、サボりはもつと悪』とか言っている大豊がこんなコトをするだなんて……

「とりあえず、橘槻はやす」

「遅れてすみません！」

小松先生が欠席と記入しようとした所で大豊が教室に入ってくる。

「おお、橘槻、残念だが遅刻な」

「はい、分かりました。すみませんが俺と晴信を早退にしてください。訳は言えませんが、お願いします」

は！？

「……………わかった。橘槻、安森早退と」

「ちよつまっ先生！？」

「ちよつと大豊！？ なっ……………」

「すかさず立ち上がる紅葉。」

だが、大豊のただならぬ雰囲気、すぐ、押し黙ってしまう紅葉。

「晴信、ついて来い。話がある」

……………仕方ないな。

なんか火が付いてしまったようだし、話をして収まるような奴でもないし、ここは素直に従いますか……

「古山、日出川、お前らも早退にするか？」

小松先生は、じつと小松先生を見ている紅葉とつこの間にか立ち上がった源太に向けてそう言った。

なんと言わねば……。

まあ、良い先生何だろうな。

たぶん。

そして、僕ら三人は大豊の後に続き、教室を後にした。

第14話 玉葛の登校方法と僕 (後書き)

なななななんと!!

一万人を突破してしまった。

どうもマジに嬉しい爆弾蛙です。

いや、本当にありがとうございます。

今後とも、王道と王道でない道の間ぐらいを突き進んでいけるように頑張りたいと思います。

感想、評価が力になりますので、どうぞよろしくお願いします。

第15話 水のお嬢さんと僕 (前書き)

新キャラ (女)

前売り状態

お姫様系。ワガママ

第15話　水のお嬢さんと僕

「ここだ」

大豊に連れて来られたのは河川敷。
ここで一体なんの話をするのだ？

「晴信、玉葛を今すぐここに呼ぶコトができるか？」

呼ぶもなにも、玉葛は……。

「ワラワならここに居るぞ」

玉葛は紅葉の背後から飛び出した。

たぶん、すぐポケットから出て、紅葉の後ろで、元のサイズに戻ったのだろう。

ちなみに、服は赤いチェックのスカートに白のブラウスと赤のネクタイ、上着に茶色のファー付きジャケット。髪の色は黒髪白金メッシュである。

「九尾玉葛、君に話の有るものがある。出てきて大丈夫だ。セフィリア ニュクス ウンディーネ」

大豊は、玉葛にそう言うのと、川に向かって誰かを呼んだ。

誰か水の中にでも居るのか？

てか、玉葛の名字、大豊に教えたっけ？

「わかったぞ」

どこからともなく声が聞こえた。

かと、思いきや、川の水面が不自然な動きを始めた。

何がどう不自然かと言うと、ブクブク、いや、ムクムク？

とりあえず、水面が持ち上がり人の形に変化していった。

そして、人の形になった水の塊には、細かい起伏が現れ、表情、

服、髪の毛の一本一本が浮きぼりになっていく。

ちなみに、髪が長い、スタイルの良い女性だ。

形が分かるようになるにつれ、徐々に色も着いてきた。

髪は青い、肌は白、着ているドレスは水色である。

「タイホーよ。妾^{わらわ}のコトは、“セフィ”と呼ぶように言っただけに」
変身（？）が終わった、セフィなんとかウンディーネさんは、優雅な歩みで大豊の横に並ぶ。

身長178cmの大豊と比べると、セフィなんとかウンディーネさんの身長はだいたい168cmだろうか。

表情はかなり勝ち気である。

それはもう、玉葛や紅葉以上にである。

「たまんうう……。タイホー、何をする」

セフィなんとかウンディーネさんが話そうとした所を大豊がすかさず止めた。

一体なんだ？

玉葛は玉葛でわなわな震えて居るし……

「すまん、セフィ。先に人を全て集めたかったただけだ。セフィの話は、俺のあとでいいか？」

「タイホーがそう言うなら……。仕方ないな。なるべく手短にすませるのだぞ」

「すまない」

とこちらに向き直る大豊。

セフィなんとかウンディーネさんの顔がほんのり赤い、
つて、僕ら置いてけぼりですよ。

特に僕。

「晴信、話は聞いたぞ。なんでも、そこにいる玉葛と言う少女を騙し連れ帰り、あまつさえ、俺には、家事手伝いと嘘をつかせた」

ちよいー！

待てー！！

何か勘違いしているぞ！！！！

「貴様は悪だ！ この拳で叩き直してやる！！」

大豊は無慈悲な男では無い。

だから現行犯で無い場合は、本人に弁解の時間を与える。

今、大豊は、僕に弁解の時間をくれている。

僕は、必死にジェスチャーで弁解する。

紅葉と玉葛への配慮だ。

「返事がないな」

残念ながら大豊は、目を閉じていた。

なぜ、目をつむってるだよ！

ヤバイ。

マジで殺されかねん。

何か考えねば！

大豊の攻撃は、非常に早い。

何が早いのかと言うと、その初動が尋常で無い速さなのである。

陸上選手に例えるなら、それは、ロケットスタータータイプである。

だったら……

「その無言、肯定の意味として受けていいのだな」

目を開ける大豊。

僕は、左手を前に突き出し、ソフトボールのボールを握れるぐらいの大きさに手を開く。

まず、体の周りに漂う自分の神秘の力をコントロールして広げる。

そうだな、イメージは半径5mぐらいのドームだ。

次に、広げた神秘の力のドームの中にある光を、僕の神秘の力と混ぜるイメージ。

そして、その光を左の手のひらに、球体状で集まるイメージ。最後に、この光の球に役割を与える。

“眩しい光で激しく爆発するように光れ”だ。

光の球を完成させるに約二秒。

大豊は、既に動き出しており、10mの位置にいる。

だが、この距離では、大豊にとって目と鼻の先。

僕はすぐに光の球を爆発させる。

周りが真っ白になる程の閃光。

この技の名前は“閃^{ライト}光球”。

安直だが、これ以上にピッタリな名前は無いと思う。

指向性を持たせるのを忘れたので、玉葛や紅葉、源太が心配だ。

「ハルのバカ！ それ使うなら使って言ってよ！ それに、何、バカ正直に声出さないでいるのよ。命掛かってんだから出しなさいよ！！」

「そうだぞ！ 晴信！！」

そんな、勝手な……。

そう言えば、源太は？

「うをおおお！！！！ 目が、目がああ」
悶えていた。

「光か……それが晴信の神秘の力か？」

そうさ、コレが僕の神秘の力。

光を操る神秘。

属性“光”と言うところさ。

「俺も本気になれる……晴信、俺も神秘の力が使えるんだよ」
……マジ！？

「俺の使う神秘の力は、“強化”だ！！」

マジ！？

第15話　水のお嬢さんと僕（後書き）

神様、僕にアイデアを！！

神様、僕に時間を！！

神様、僕に自動車学校を卒業できるだけの運転技術を！！

神様、僕に本免試験を受けることのできる日にちを！！

今真面目に欲しいモノを神頼みしてみました。

頑張りますよ！！

ええ頑張ります！！

作品の方の応援待ってまあす。

第16話 暴走暴力英雄と僕

「紅葉、源太、二人を止めなくては」

「うん、止めたいのはやまやまなんだけどね……」

「大豊……完全に火が付いちやってるからねえ」

うん、二人の判断は正しいよ。

僕だって静観するからね。

絶対。

「ところで玉葛、強化属性って何ができるの？」

僕もちよつと気になってた。

「ん？ 強化属性か？ あれはバカ単純でな。ただただ、体を強化するだけ。例えば筋力がアップしたり。拳を固く強化したり出来るのだ。目立った特徴が無い代わりに、少ない神秘の力で大きな力になる。強化属性の奴は、決まって身体能力が化け物だ」

大豊そのままじゃん。

僕は急いで光球ひかりたまごを両手に一つずつ作る。

光球って言うのは、閃光球の元になっている光の球。

これまた安直な名前だけどピッタリだと思う。

ソフトボールだいの大きさなのは、そのサイズが一番作り易く、出力も丁度いいのである。

ちなみに、手のひら以外にも、僕の神秘の力が充満している範囲になら、同時に6個まで作り出せる。

って、大豊の動きがない。

まるで、精神統一をしているようだ。

「気を付ける。奴は神秘の力を洗練して己を強化している」
なるほど。

このまま、素直にやられる訳にもいかないので、アレを使おう。
技の名前は“光線^{ライン}”。

光球に“レーザービームのように敵を撃て”とイメージして出す技だ。

こんな適当なイメージで大丈夫なのかと思うかもしれないが、出来てしまうものは仕方ないのだ。

名前は、さすがにレーザービームじゃ駄目だろうと思って、少しひねってみた。

試しに、大豊を撃ってみる。

出力は肌に焦げ目が付く程度。

それでも、結構痛いと思うけど。

両手の光球を構え、光線を撃つ。

光線が放たれる瞬間、普段白く光る光線が見えなくなる。

そして、音もなく光の線が、まさに光の速さで大豊へと伸びていく。

左肩、右ももにヒット。

だが、大豊は微動だにしない。

うっわヤバ。

効いてはいると思うけど………いつそのこと出力を上げた方が………
駄目だ、あれはマジで危険だし………

今日、光球を作れるのは、あと7個。

閃光球も光線も基本、一個の光球で一回きりだが、ラインならちよつと裏技を使えば繰り返し使える。

なら！！

僕は、僕の周りに光球5つを作る。

役割は光線だ。

手に持たない光球に光線の役割を持たせると完成する技“衛星光線”。

配置は、僕の真上に一つ、残りが一定速度で僕の周りを回っている。

いつでも一斉射撃ができる。

来るなら来いや!!

「……………」

あの……大豊?

「晴信、急げ!!」

お、おう。

玉葛の声に押されたまらず一斉射撃。

右腕の付け根に一発、左すねに一発、胸に三発をこれまた微動だにせず受け止める大豊。

止まったか?

念のため、両手に光球を作っておく。

「リフレッシュ」

ん?

大豊?

ええつと……何ともないんですか?

「それが全力か? 痛くも痒くもないぞ。まあ、回復したのだから

「当たり前だがな」

「げっ！？」

大豊は一瞬で間合いを詰めてきた。

いつも以上に速い！！

そのまま左頬を殴られ、右後方に5m程飛ぶ。

痛って〜。

歯が折れてないのが奇跡だよ。

「思わず手加減をしてしまった……次は全力だ」

「ヤダ！！」

光線の出力アップ！！

今までのより焼ける程度に！！

この微妙な加減が難しい。

あと、両手光線では、たぶん駄目なので片手を閃光球に変える。

「行くぞ！！！」

「おう！！」

「来い！！」

「二人とも止まれ！！」

「ん？」

「なに？」

源太。

「なんだ？ 源太？」

僕ら二人を源太が止める。

どうやら閃光球の効果が消えたようだ。

「大豊。確認する相手、一人忘れてるぞ」

「誰だ？」

「玉葛だよ」

……確かに。

ってか、そっちに確認した方が確実だよ。

「……そう言われてみれば……。玉葛、ホントの事を話してくれ」
「ホントも何も、ワラワは自分の意志でこちらの世界に来ている」
「そうだ、その通りだ。」

「間違いなのだな。晴信……疑ってすまなかった。俺を殴ってくれ」
「あつ……いや……あの……。」

僕もだいぶ光線を当ててるから。

お互い様ってことで……

って言葉に出さなきゃ伝わらないよ。

「わかった。ありがとう、晴信。やっぱり、お前は最高の友達」
「伝わったよ。」

何で？

声出してないよ？

コレが強化の力？

まあ、でも、これで一件落着。

良かった。

良かった。

「妾は認めんぞー!!」

良かったにならなかったよ……

第16話 暴走暴力英雄と僕（後書き）

セフィリア（以下セ）「妾の出番はどうしたのじゃ」

うゝん……

セ「誠意が感じられのじゃが？」

うゝん……

セ「コラー！！ 聞いておるのか！！？」

うゝん……

あつ、次回予告よろしく

うゝん……

セ「うつ、うん。次回予告じゃな。任された。次回、妾が華麗に玉葛を倒すのじゃ！ どうじゃ？ スゴいだろ」

玉葛（以下玉）「嘘をつくな！！ なぜに初めての予告をセフィリアにやらせるのだ！？」

うゝん……

とりあえず、また、次回にお会いしましょう

玉「あつ！ このつ！ バカ！！！！！！」

第17話 セフィなんとかなんとかウンディーネさん対玉葛と僕

空気が重いです。

なぜかと言うと。

青い長い髪（よく見るとピンと跳ねたアホ毛がある）と水色のドレスを着た、セフィなんとかなんとかウンディーネさんの一言によって空気が固まってしまったのである。

「セフィ……どうした？ 認めないって、どう言うことだ？」

「駄目じゃ。駄目じゃ。この様な結果は駄目じゃ。タイホーが、あの何とも表現のしようのない男に勝って。玉葛が元の世界に戻らねばなんのじゃ。」

戻って妾と王の名を競い合わねばなんのじゃ。玉葛無しで得た王の名など要らん」

だだをこね始めるセフィなんとかなんとかウンディーネさん。

呆れる玉葛。

意味が分からず、キョトンとする僕ら4人。

ええっと……要約すると、ただのワガママ？

「セフィリア……ワラワは、何度も言ったぞ。王の名など要らんと。第一に、純粹に神秘の力ならセフィリアの方が強いだろ。それに今は、こちらでの生活が楽しくてたまらないのだ。すまん。ワラワは帰れない」

玉葛が理性的にだが、自己中心的な説得する。

「ちょっと、玉葛？ 話が全く分からないんだけど？ 『王の名』ってなに？」

そうだ、そうだ。

置いてけぼりも良いとこだぞ。

「すまん。王の名と言うのは、まんまあの世を治める王の事を指す

のだ。あの世じゃ、名前が地位とか権力を表す事も多いからな、名前を継ぐと言うことは、その名前の地位や権力を受け継ぐと言うコトなんだよ。まあ、あの世を治めるとか言っても、ただの全種族長の象徴みたいな役職だし、興味ないんだよ」

興味ないんだよって……玉葛……。

「と言うコトは、玉葛は次期王様ってコト？」

「あくまでも、“候補だった”だがな。それに、王になるには、72人の代表議員が決めた72のお題をこなさなければならないんだ」
72のお題って……多……！！

でも、それぐらいやらなきゃ王として認められないと言うコトなのだろうか。

「妾を……妾を無視するなあ……！！！！！！！！」

あつ……忘れてた。

「すまん、忘れてた」

忘れてたって、玉葛……セフィなんとかなんとかウンディーネさんが可哀想だよ。

まあ、人のこと言えませんが……。

「こうなったら力づくじゃ！」

セフィなんとかなんとかウンディーネさんは、おもむろに川に手を入れる。

そして、ゆつくりと川から手を上げる。

引き上げられた手には、ぷよぷよとしたサッカーボールだいの水の玉がまとわり付いている。

水玉には、これまたはつきりと神秘の力が充満していて、水の塊と言うより神秘の力の塊と言っても良いくらいである。

神秘の力の密度が違う。

僕の作る光球が豆腐なら、セフィなんとかなんとかウンディーネ

さんの作った水玉は鉄ぐらいの密度の違いがあると思う。

「覚悟せい!!」

とセフィなんとかんとかウンディーネさんが言うと、水玉がはじけるように膨らみ、三本の腕になって玉葛に飛んで行った。

が、玉葛は華麗なステップでその腕達を避けていく。

腕達もうねったり、時間差を入れたり、フェイントを入れたり、同時に攻撃したりするが、玉葛は一向に捕まる気配がない。

てか、玉葛、平気に空中二段ジャンプとかしているんですが……。

「ええい！ 大人しく捕まるのじゃ！ ん？ あっ」

セフィなんとかんとかウンディーネさんが何かに気付いたようだ。

水の腕の一本が突然、別方向に向かったかと思うと、残った二本の先っぽが無数に割れ、玉葛を二方向から襲い、玉葛を貫いた。

っ!!???

唖然とする僕らをよそにセフィなんとかんとかウンディーネさんが口を開けた。

「忘れておったぞ。玉葛を相手にする時は冷静にやらんならなかつたな。そうだろ？ 玉葛」

何を言う!!

あれ玉葛がいない……

水の腕に貫かれたはずの玉葛の姿が消えていた。

そのかわりに、僕から見て左前方、セフィなんとかんとかウンディーネさんから見て右後方に玉葛がいた。

普段とは違う、見慣れない姿で。

八本の白に金メッシュの入った尻尾と、結った髪がまるで一本の尻尾に見える白に金メッシュの入った髪をなびかせて、最近、ずっとくせ毛状態になっていた頭の耳も、ちゃんと耳としての働きを戻したようで、ピクピクとしきりに動いている。

玉葛はセフィなんとかんとかウンディーネさんの言葉に対してニヤリと不敵に笑う。

水の腕に捕まっているのなんて関係のないかのように。

「セフィリア。自慢気に言うのは良いが、今、お前が捕まえているワラワも偽物だぞ。さあどれが本物が当ててみる」

と、だけ言い残すと、水の腕に捕まっていた玉葛の姿が消え、代わりに大量の玉葛の姿が現れた。

ええつと……1・2・3・4・5……12人の玉葛だね。
多い！！

「……避けられる？ 本物は12分の1だ。せいぜい頑張って避ける」

12人の玉葛が一斉に狐火を作り出す。

多分、一人あたり9個の狐火を作っていると思うから、総数は……108個。

やっぱり多い！！

よく見てみれば、周りは、玉葛の神秘の力が充満している。

「ハルどうしたの？ ……ん？ うゝん……なっなによ、これ！ 殆ど玉葛の力に満たされてるじゃない」

僕の反応に気付いた紅葉が、周りを見て驚く。

こんなにハッキリ見えるのに、紅葉は目にそこまで力を込めないと見えないの？

源太にも見えたらしく、かなり驚いている。

大豊はこれといって驚いている様子はないが、気持ち足が後ろに下がっている。

これが玉葛の本気なのだろうか……

第17話　セフィなんとかなんとかウンディーネさん対玉葛と僕（後書き）

今回の次回予告は……

紅葉！！

紅葉（以下紅）「えっ！！　ああ、予告ね。ええつと、次回は白熱する二人を後目にハルとラブラブ。この闘いの行方はいかに！！！」

玉葛（以下玉）「だから、何故に嘘をつく！！　何か？　出番が無いことをひがんでおるのか？」

紅「そつそそそんなこと無いよ？」

玉「動揺しまくりだな……」

紅「とつとりあえず次回をお楽しみに！！！」

第18話 セフィリアなんとかなんとかウンディーネさん改めセフィリアさん

睨みあう12人の玉葛と一人のセフィなんとかなんとかウンディーネさん………つていい加減長いよ。

ええっと、確か、玉葛が『セフィリア』って呼んでたな。
セフィリアさんでいいよね。

「……晴信、安心しろすぐ終わる」……

12人の玉葛が108個の狐火を携え、一斉にしゃべる。

うゝん、壮観だ。

って違うだろ。

コレがどの程度スゴいのか、まったく見当がつかないが、僕らからしてみれば、足元にも及ばない気がする。

多分、五年前に『同じくらいね』と言われたサーチ能力だって、この五年でかなり離されているだろう。

「……八本………まだ、妾を愚弄する気か！ それでは、貴様の八割ほどの力しか出ないであろう！！ こんな………子供騙しで、何が出る……！」

セフィリアさんの怒声と共に、水の腕が弾け、雨粒ほどの無数の水の玉になった。

「玉葛………よく聞くのじゃ。こんな子供騙し、時間稼ぎにもならんぞ………やれ！」

セフィリアさんの声一つで、セフィリアさんを中心に回り始める無数の水の玉。

その回転速度の速いこと………まるで台風だ。

そして、徐々に、その回転する水の範囲が広がり、分身した玉葛達を飲み込んでいく。

狐火も、108個有ったものが回転する水に当たり消えて行く。

いくつか煙をたて、鎮火するかのように消えたのもあるようだが、全ての狐火がセフィリアさんの作った台風に飲まれた瞬間に消えていった。

それは、狐火だけに言えたことではなく、12人の玉葛にもそうだった。

「ふん。どこに隠れおった、玉葛。姿を表すのじゃ」

台風が元の水の腕に戻り、セフィリアさんの周りに控えると、そこには、玉葛は1人もいなかった。

玉葛が1人もいないって表現は変かもしれないが、実際に12人に分身した玉葛が1人も残っていないんだから仕方ない。

玉葛……どうしちゃったんだ……。

「玉葛……やられちゃったの……？」

紅葉も同じ様に心配している。

「コラ！ 玉くず！ こんな簡単に死ぬなあ！！」

「おい、コラ！ バカ枯れ葉。人を勝手に殺すな」

……………お約束？

「このワラワが早々に負けるわけないだろ」

玉葛は、僕らの後ろにあきれ顔で立っていた。

「な〜んだ」

な〜んだ、っておい、紅葉、そんな反応？ 僕は、玉葛に怪我無く、嬉しいんですが？

「本当に九尾一族は、良く言えば慎重、悪く言えば臆病じゃな」
うふふと優雅に笑うセフィリアさん。

「ほお〜言うようになったな」

玉葛……頬がひきつってるよ？

落착着こ？

ねっ？

と思い、玉葛の肩に手を置こうとした時、玉葛の姿がスッと消え、空振りをする。

えっ！？

「よいしょっ」

玉葛は上にいた。

しかも、なんかでつかい火の玉あるし、具体的に言っなら直径30cmぐらい？

デカイよね……。

「はっ、大きくしたところで……」

「セフィリア、コレは、いつものより熱量多めに作ったぞ。……要するに熱いぞ」

ニヤリと笑う玉葛。

そして、放たれるでつかい狐火。

「……所詮、^{あそび}戯じゃ」

即座に、一本の水の腕で受け止めるセフィリアさん。

ジュウウ

音と煙をたて、小さくなっていく水の腕。

「くっ！」

すかさず、二本目の水の腕を使い、狐火を止める。

そして、

「……じゃ。あれ……じゃ。……は……じゃ」

この場所からは、上手く聞こえないが、独り言をブツブツ言っているようだ。

狐火を見ると、音も煙も弱くなっているようだ。

狐火の勢いは全然衰えてないし、水の腕だって健在だ。

なのに……

「どうじゃ、玉葛。貴様の術など、対策が出来ておるのだ。そして、考えもお見通しじゃ」

セフィリアさんがそれだけ言うと、一步ずれて、振り返った。

そこには、三本目の水の腕に捕まった玉葛がいた。

「玉葛、貴様の術の属性は“幻”。それも、かなり強力で、実際にあるように感じてしまう程のな。しかも、その効果は、術をかけられた者の思いによって変わる。じゃから狐火は、焼けると強く思えば思うほど焼けてしまうのじゃ。だったら焼けない。あれは偽物じやと思えば焼けないと言うわけじゃ。そして、これも偽物なんじゃろ？」

水の腕が玉葛を握り潰す。

玉葛は、簡単に消える。

本当に、偽物だったんだ……。

てか玉葛の神秘の力ってスゴ……。

「本当に困った。まさか、ここまで読まれているとは……」

またもや僕の後ろから現れる玉葛。

もしかして……ずっと僕を盾にしていた？

「あつ！ 晴信、決して盾にしていたなんてことはないぞ。絶対にないぞ。頼れる背中だなあとは、思っていたが、決して盾などには……」

はいはい……。

てか、かなり余裕のある考えをお持ちなんですね。

僕、かなりハラハラしながら見てたのに……

「ほ……、男にうつつを抜かすとは、なかなか余裕のようじゃな。まだ、策でもってあるのか？」

「いいや、ほとんど万策つきたな。セフィリア、ワラワは、初めてお前に負けたと思わなければならぬかもしれないな」

えっ？

玉葛！？

「そうか？ そうなのか？ なら帰るぞ！ 王になるためのお稽古をするぞ。これで、やりがいが出るといふものじゃ」

玉葛、帰るのか……

嬉しそうに笑うセフィリアさんをみる玉葛は……どこか、悲しきうである。

負けたことが悔しいのだろうか……

「セフィリア、お前は凄い。うん、ワラワの上をゆく頭を持っているようだ」

「そっそうか？ そうか」

が、すぐに悲しそうな顔をやめた玉葛はセフィリアさんをおだて始めた。

「そうだとも、そうだとも。そうだ、久しぶりにアレを見たいな。セフィリアの得意なアレだ。ほら、小さい容器に入るアレだ」

「ん？ そうか？ 見たいのか？ いいじゃろう。見せてやるぞ。小さい容器はあるか？」

「ああ、ワラワが持つておる。ペットボトルという、こちらの世界の飲み物を入れる容器だ」

と玉葛が、取り出したのは200mlのペットボトル。

「ちょうど良さそうじゃな。入るから蓋を開けてくのじゃ」

蓋を開け、待つ玉葛。

セフィリアさんは、目を閉じ、現れた時の逆再生で水になる。

そして、ゆつくりと水が浮かび、ペットボトルの中に吸い込まれる様に入っていった。

ペットボトルがいっぱいになったところで玉葛が蓋を閉める。

そして、

「ワラワの勝ちだ。セフィリア」

玉葛が勝利を宣言した。
は？

は
あ
！
？

第18話 セフィリアなんとかなんとかウンディーネさん改めセフィリアさん

えつと特に何か言いたいコトが有るわけでもないの……次回予告。
玉藻さんです。

玉藻（以下藻）「なに？ あたしが次回予告すればいいわけ？ ま
あ先のコトはわからない方が楽しいんじゃないかな？ ってコトで
サヨナラ」

あれ？

玉藻さん？

帰っちゃうんですか？

玉藻さん！

ととりあえず次回をお楽しみに

第19話　ペットボトルのセフィリアさんと玉葛と僕

「ふざけるな！　こんなことが認められるか！　ここから出すのじや」

「はいはい、素直に負けを認めい。まあ、どうしても嫌と言うならそこから出てこい。そしたら、ワラワが負けを認めてやろう」

「なに！？　それは本当じゃな？　よし、やってやろう。えい！　どうじゃ！　これでもか！」

世にも珍しいしゃべるペットボトルと会話をする白髪金メツシュ少女。

そんな光景が僕の前にあった。

無論、白髪金メツシュ少女とは玉葛のことだし、しゃべるペットボトルはセフィリアさんが入ったペットボトルの事だ。

ペットボトルの中をよく見ると、中の水が三等身にデフォルメされたセフィリアさんになっており、中から必死に水の腕でペットボトルを殴っている。

しばらくして……。

「なぜしゃ！　なぜ壊れない！　なぜなのじゃ！！」
騒ぎ始めるペットボトル……もといセフィリアさん。

ペットボトルの中で地団太を踏むセフィリアさんは結構可愛く見える。

ちなみに、今、ペットボトルを持っているのは大豊。先ほど、玉葛に説得され、セフィリアさんには反省が必要という結論にたっし、無表情でペットボトルを見ている。

「セフィリア……いい加減あきらめろ」

「嫌じゃ！　絶対に嫌じゃ！！」

セフィリアさん、なかなかの頑固一徹さんです……。

「もう、この際だから言ってしまうが、ワラワの力は、厳密にいうと“幻を見せる”ではなく“認識させる、誤認させる”だ。狐火を例えて言うなら、そこに“熱い火の玉がある”と無理やり認識させるのだ。誤認とは恐ろしいぞ。強く、本当に強くそう誤認してしまうと火傷でも擦過傷まで出来てしまうんだからな。まあワラワの力ではまだ、色々と制約があるのかな」

……うーん、難しい。

とりあえず、強力ってコトは分かる。

「そしてだ。今、セフィリア、お前には、ワラワの力が最も強力に発動する条件を揃えた上で術をかけてある。その術とは、“このペツトボトルを内側から壊すことに絶対な恐怖を感じる”というものだ。だからお前は無意識のうちにペツトボトルを壊すコトに恐怖を感じ、躊躇い、力を抜き、壊すコトができないのだ。だから諦めろ」

玉葛の……すげー……。

セフィリアさんもそれを聞いて、絶望したのか騒ぐのをやめた。

「妾は……勝てないのか？ 玉葛には勝てないのか？ いや、そんな事はない！ 神秘の力の総量ではまだ妾の方が勝っている。それは、玉葛が九本尻尾を揃えてもじゃ。よし、今からお稽古を始めて、そして強くなつて、次こそ玉葛に勝つのじゃ。そして、連れて帰るのじゃ」

立ち直りはえー。

しかも、結構な熱血ぶりで……。

「よし、そうと決まれば、タイホー。お稽古に付き合ってくれんか？」

「ああいいぞ」

心なしか、大豊の目が輝いている。

特訓とか好きだもんなあ……。

「ああ……ところでセフィリア……」

歩き始めた大豊を止める玉葛。

ところで大豊、セフィリアさん、ペットボトルの中に入りっぱなしだけいいの？

「気になつていたんだが……ワラワを連れ帰ってしまったたら大豊と別れ離れたぞ」

「あつ！？ なつなら連れ帰るのは無しじゃ！！ でっでも、お稽古はやるぞ！！」

ええつと……何とコメントをするべきか……

「では、気を付けて帰れよ。セフィリア」

「当然じゃ。まっ妾には、タイホーがおるから大丈夫じゃ」

そして、軽く会釈をして帰る大豊。

つて、こんな終わりでいいの？

てか、ペットボトルから出なくていいの？

ねっ！！

「ところで玉葛。セフィリアなんとかって人……誰？」

紅葉の質問。

確かに気になる。

チヨロツと名前が出ただけで、それらしい自己紹介なしで行ったやつたし……。

「ああ、やつか？ やつは……」

言葉の詰まる玉葛。

説明が難しいのだろうか？

「にゃあ！！ あたいが教えるにゃあ！！」

「「万里」」

「万里、どうしてここに？ 家で留守番するって言ってたじゃないか」

情報屋猫又一族の猫又万里の登場。

「お昼ご飯聞くの忘れてたにや。っで来てみたら面白いコトにや
つてたし、それに、あたいの出番ばかったにや」

と胸を張る万里。

まあ確かにそんな雰囲気ではあったけど…… タイミングが良すぎ
ませんか？

「深く気にしちゃダメにや。っで本題にや」

と手を出す万里。

ん？

「にやにポケツとしてるにや！ 情報料にや。情報料。情報料も無
しに聞こうにやんて甘いにや。あたいは慈善事業じゃにやいにや。
情報と釣り合ったものを支払ってもらわにやきや情報を教えられに
やいにや」

流石はプロの情報屋。

しつかりしていらっしゃる。こういう態度の人の方が信用できる
思う。

「ええ……何か支払ってまで欲しいとは思わないなあ」

「にやっ！！ にやかにやか期待ハズレにや答えにや！ これじゃ
猫まんまの食い上げにや」

紅葉が普通に断った。

それが予想外だった万里は慌てる。

てか、猫まんまって……。

「はい、コレで教えてくれるだろ」

と源太が万里に弁当を渡す。

「にやっ！？ OKにや！ はな……っで待つにや」

まだ何かあるの？

「源太は、あたいにご飯を用意する約束をしてるにや。この情報の
情報料としては価値が低いにや」

「万里、残念だが君のお昼ご飯は台所に用意されているし、朝出る

時にだって言っ出ていったはずだよ？ 思い出してごらん？」

「……………言ってたにや。ごめんにや。朝は弱くてとても眠いにや」

この猫又ちゃんはどこまで猫なんだろう……

「じゃっ気を取り直して、セフィリアについてにや」
うん。

「本名セフィリア＝ウンディーネ。満17歳。現在のあの世の王を父親に持ち、ウンディーネ一族の中でもかなり高貴にや出である。かなりのお父さんツコで、父親の一族名である“ニユクス”を名前の中にいれ、名乗ることが多い」

ふん

「ふん」

「ふんって反応がイマイチにや。軽くショックにや」

いや、だって……見たまんまって感じだし……。

「弁当一つじゃここが限界にや！ むしろサービスしすぎにや」

ええっと……そうなんですか。

ありがとございます。

まあなんにせよ、一件落着つてことで、そろそろ頬を氷か水で冷やしたいのですが……。

腫れなきゃ良いけどなあ……

第19話　ペットボトルのセフィリアさんと玉葛と僕（後書き）

あわわわ

頑張ったよ？　頑張ったよ？

てなワケで次回予告は葛葉さんです。

葛葉（以下葛）「あらあらまあまあ、わたくしでよろしいのかしら？　任された以上頑張りますわ。次回、セフィリアさんとの^{いさか}争いを終えた玉葛一行は喫茶昼行灯にやって来た。そこで出逢ったのは……ところでわたくし、喫茶店という所には言ったことないんですよ？　一度は行ってみたいですわ。そういえばわたくし、洋食に挑戦し始めましたの。この歳で挑戦者なんてワクワクしてしまいますの。それに学ぶ事があるって良いですわ。作者を含め学生の皆さん、勉学に勤しんで下さいね」

なっ何をいつてんだ！？

このオバサン…………

ぼっ僕が学生なわ……

葛「なんだか急に蛙の潰れる音が聞きたくなりましたわ。それに少々お話し合いが必要のようですし……」

ちよっ！！

まっ！！

葛葉さん不文律を守って！！

暗黙の了解を守って！！

葛「あらあらまあまあ、意味同じですよ。というより、近くで蛙が

歌ってるいますわね。丁度いいですわ」

ぎゃああ!!

葛「でわ、読者の皆さん、不甲斐ない蛙の代わりさようなら。次回をお楽しみにして待っていて下さいね。あと、わたくし葛葉は皆様の応援メッセージを待っていますわ。アナタのたった一行のメッセージでも力になりますわ、そして出番が増えますわ。お願いします。アナタの暖かいメッセージお待ちしますわ。うふふ」

ぎゃああ

第20話 喫茶昼行灯と僕（前書き）

今日の次回予告誰にしよう……

第20話　喫茶昼行灯と僕

あの後、あのまま河川敷に居るわけにもいかず、かと言って学校にも行くわけに行かず、一度家に帰った僕らは、玉葛の作った弁当を食べ、街に出ることにした。

「はい、前にも連れて来たけど、ここが喫茶昼行灯。駅から徒歩10分、学校から徒歩15分。私達の家から徒歩13分の所にあるわ。まあ、一回行ったことあるから分かると思うけど、名前の通り店内でか店全体がポーツとした雰囲気の特徴よ。特筆事項としては、若と四六時中いる常連バカ野郎の誉末^{たかまつ}に気を付けて、殺したくなるほどにうざいから」

殺したくなるほどとは物騒だと思ふなあ。事実だけど。

ちなみに、若とはこの喫茶店の若マスターで、名前が、草分彩豪^{くさわけさいこう}と仰々しく、今年22になったと思った。

そしてもう一人、真咲誉末^{まこぎたかまつ}と言い、名字と名前が逆な気のするフリーライターな22才の青年である。

「殺したくなるほどの奴が居るのに、紅葉は常連なのか？」

スルドいところをつく玉葛。

「ん？ そうよ。だって、ここには、こつ……言葉じゃ上手く表現出来ないけど、何とも不思議な魅力があるのよ。それに、パスタ系の料理がスツツツゴク美味しいし」

確かに、僕もこの喫茶店は好きだ。

とその時、カランコロンと鳴りながらドアが開いた。

「あゝ、紅葉ちゃん。今日も店に寄って〜く？ サ〜ビスするよ〜」

噂をすればなんとやらなのか、若が出てきた。

「ねっほらほら紅葉ちゃん。ねっ紅葉ちゃん」
しきりに中に誘う若。

紅葉はかなり迷惑そうである。

仕方無い、寄って行こう。

僕は、紅葉と玉葛の手を引き、店の中へと入って行った。

「よお！！ 元気にしてたか？ お兄さんはとっても元気にしてたぞお！！ あははは！ 晴信、昼間っから学校サボって、しかも両手に花のハーレムだあ！？ 何をやってるんだ！？ ン、グツチョコブ！！ 玉葛ちゃん、お兄さんと一緒に飲もうぜ！！ ふっ、玉ちゃん……その、白と金のメツシユ、とても似合っていて可愛いよ……。 ああ！！ ホントにも、可愛い過ぎ！！ お兄さん奢っちゃうよ奢っちゃうよ！ まだまだ、奢っちゃうよ！ 若！！ 昼行灯ブレンドを二つね！」

………はい、この人が誉末さんです。
とっても元気があり溢れている人です。

ブローのかかった茶髪にノンフレームの楕円メガネの青年です。
店に入るなり直ぐに話しかけて来た上、僕らと一緒に座り始めてしまいました。

ちなみに、紅葉の前だけに、昼行灯スペシャルフルーツパフェ（一杯4800円也）が若のサービスにより早々に置かれ、玉葛の前には、誉末さん奢りのコーヒーがあつたりする。

間延びしたしゃべり方の若とマシンガントークの誉末さん……
タイプは違えどなぜか親友同士らしい二人。

この二人に寄ってたかつて喋られた日には、次の日に熱を出して寝込むほどであるから注意したい。

そしてまた、玉葛の前に昼行灯ブレンドコーヒーが置かれ、紅葉

の前に昼行灯特製ロイヤルなチーズケーキ（一個400円也）が置かれる。たぶん、若のサービスだ。

そう言えば、玉葛はコーヒー初体験なのではないのだから？

確か、前に来たときに言っていた気がする。

「晴信……」

ん？

どうした？

「美味しいな……コーヒーは美味しいな！！ 砂糖とミルクを入れ甘くしたのも美味いが、何も入れないブラックか？ あれもいいな。緑茶にはない香りがあっていいな！」

どうやらかなり気に入ってくれたようす。

しかし初めて飲んでここまで気に入ってるってすげーな。

「あれ？ 玉ちゃんコーヒー初めてだったの？」

「そうだ！ ありがとな。ほら、晴信も飲んでみる！ 美味いぞ」と少々興奮気味の玉葛が誉末さんを軽くあしらい僕にコーヒーを薦めてくる。

しかも、飲みかけのコーヒーを……

「うぬぬぬ……負けてられない……」

えっ？

紅葉さん？

「ハル！ この昼行灯スペシャルツパフェ。スペシャルなだけあってスッゴク美味しいよ！ だからおすそ分け！ はい、あーん」

紅葉さん！？

ちよいハズいですよ！？

「ぬぬ、なら。ふー、ふー。ほれ、晴信飲みやすいようにふーふーしたぞ。」

わーい。そりゃいいや。

って喜べないよ!!

ちよつと待つて!

普通に恥ずかしいから!

「ちっ! ハル! はい!」

何を考えたのか、紅葉は突然よそつたクリームとフルーツにキスをして、再度僕にあゝんをしてきた……。

「なぬ!? そうきたか! なら、はぬのう、くひうふひう!」

いきなりコーヒーを口にふくみ始めた玉葛。

たぶん、口移しと考えたのだろっ……無理だよ!!

何、ぶっ飛んだ行動とってんだよ。

「ハル!」

「はぬのう!」

はい!!

待つて下さい!

心の準備があ!!

って二人とも目が血走ってるよ?

誰か止めて!

「はゝるくゝん?」

「晴信ゝ!!!?」 あっ!!

若に誉末さん!

助け……て……

「晴信ゝなかなか見せつけてくれるなあ」

「はゝるくゝん。他のゝお客様ゝ、あと店員にゝ迷惑をゝかけちゃゝダゝメだよ」

何故!?

誉末さんと若が凄い顔で迫ってきた。

ええつとええつと……ええどうすればいい!?

紅葉、玉葛ちよつと待つて。
誉末さんと若も待つて！！

パコパコーン

「彩豪、誉末ちよつときな。ごめんなハルくん。もみちゃん達もほ
どほにしな。ハルくん困ってるぞ」

輝美先輩！

この喫茶の看板娘、高校の先輩で、確か学年は三年。
名前は草分輝美。

しつかり者で姉御肌なお姉さんだ。

若とは実の兄妹であるが呼び捨てなのは若に信用がないからだろ
う。

「輝美ゝ実のゝ兄を殴るのはゝダメだよ。呼び捨てもゝ」

「やめて欲しければもつとしつかりしな！ 馬鹿兄貴！」
やっぱり。

「痛い痛い痛い痛い痛い！ てるちゃん痛いよ！」

「知らん！ 今から私が説教してあげるんだから我慢なさい。って
なんでハルくん達いるの？」

それは……

「これには色々深い理由があるの。だから見逃してお姉ちゃん」
輝美さんをお姉ちゃんと呼ぶのは紅葉。

いつからから紅葉は輝美さんをそう呼び慕うようになった。

僕にはあまり関係ないことだが……。

「いいわ。私もあまり人に言えたたちじゃないしね」

と、それだけを言う輝美さんは店の奥へと二人を連れていった。
耳を千切れんばかりに捻り上げながら……。

その様子を呆然と見ていると輝美さんがふと何かを思い出したの
か、僕らの方に振り返った。

「あつ……、ハルくん、悪いけどお店手伝ってもらっていい？
まだ大丈夫だと思うけど……なんだかんだでこの店、人入れ良いか
らお父さん一人じゃ心配なのよ……頼める？」

別に良いですけど……そんなに長い間説教するんですか？

二人の顔があらさまに絶望的な顔だし……マスターも、今まで
影が薄かったマスターも苦笑いで、なんだか手伝ってくれと言っ
ているみたいだ……。

分かりました。

手伝いましょう。

僕は力強く頷いた。

「ありがとう！ バイト代色々と色付けて上げるから」

嬉しそうにそれだけ言うと、輝美さんはまた二人を引きずって店
の奥へと入っていった。

よし、とりあえず店の手伝いを頑張ろう！

と僕が気合いを入れ立ち上がった時、ある意味聞きたくない言葉
が聞こえた……。

「ハル、私も手伝い頑張るよ！！ 任せて！」

そして、頼もしいが、何か嫌な予感のする言葉も聞こえてきた……。

「晴信、ワラワに任せろ。紅葉よりは役にたつぞ！」

二人の間に火花が散る。

絶対に一波乱あるよ……。

頑張ってフォローせねば……。

第20話　喫茶昼行灯と僕（後書き）

どうも、あの店員（間延び野郎）とあの常連（フリーでライターな野郎）がいなければ行きたい喫茶店だなあと思うつくづく思う蛙です。

では、お待ちかね次回予告。

安森夫妻です。

静音（以下静）「どつりやああああ！！　オイ！　蛙！　何様のつもりだ！」

ええ！？

静「せっかく春茂と……だあああ！！　邪魔しやがつてええ！！」
春茂（以下春）「まあまあ落ち着いて。蛙さん、僕ら今夜景の綺麗なレストランで食事をしたんだよ？　やっぱり、邪魔は良くないと思うな。次から気をつけようね」

は、はい！

静「よろしい。お前の唯一の救いはあたしと春茂と一緒に連れて来たことだな。よし、次回予告だな。やってあげるわ」

春「次回、玉葛ちゃんの意外な弱点発見。紅葉ちゃんの今更てきに弱点発見。二人共通の弱点発見の弱点発見てんこ盛りですよ」

静「まあ気長に待ってるよ。後、感想などを待ってるぞ。特にあたし達のようなサブキャラ宛ての感想はあたし達の出番が増えるから遠慮せずよこせ。待っているぞ」

というわけです。

待ってて下さいね。

あと、待ってます。

第21話 二人のウエートレスと僕 (前書き)

お知らせあります

第21話　二人のウェイトレスと僕

喫茶昼行灯の制服はいたってシンプルだ。

白いYシャツに黒い蝶ネクタイと黒いエプロンそして黒いズボン。女性の制服も同じようにシンプルで、白のブラウスに黒いリボンと白のエプロン、そして、黒のタイトスカートだ。

そして二人とも何故かポニーテール。

似合わないことは無いけど……。

何か意味あるの？

二人のバイト適性だけど、これは働き始めて約二時間で出てきた。まず、玉葛。

持ち前の家事能力を生かし配膳、掃除とそつなくこなし、マスタ―を感心させていた。

ただ、気になったのが接客である。

独特な口調からなのか、初対面のお客さんの前に一人で行くと、言葉がどもり、時おり注文も間違える程であった。

また、助けを求める子犬の目で見えてくることもあったので、そばに寄ると、途端に自信満々に話し、間違えずに注文もとれるという不思議な現象を起こしてくれて、なかなか不安の残る接客だったのが印象的であった。

次は紅葉だ。

紅葉は玉葛とは逆に、接客が上手い。

元気な挨拶、眩しい笑顔、少々乱暴だが聞いていて悪くない口調、間違えないように注文を復唱する態度などがお客さんに受けがよく、楽にこなしていたようだった。

だが、良かったのはそれだけで、配膳はてんでダメだった。

コーヒ―をこぼすこと12回。

料理をこぼすこと10回。

食器を割ること8枚。

お客さんにコーヒーをぶっかけること5回

手に何かを持ちながら転ぶこと9回

他にも他にもetc.

なかなかのドジっぷりです。

何故なのか……どうしてなのか、途中何度か紅葉と玉葛がケンカを始めたりと、あからさまにお客さんの迷惑になったにもかかわらず、二人のお客さんからのウケは凄く良かった。

「玉葛ちゃん大丈夫だよ。ゆっくりでいいからね」

「紅葉ちゃん足元に着付けて。ほら、そこさつき拭いたばっかで滑るよ。……よし！ 転ばなかった！！」

ほらね。

「……………」

ばったり目の合う二人。

やばっ！！

「いいご身分ね。玉葛ちゃん」

「人のこと言えた立場か？ 紅葉ちゃん」

「ふん！ ちゃんと注文は取れたのかな？ 昼行灯ブレンド3つよ。わかってる？ 良かったわね。簡単なオーダーで」

「はっ！ 紅葉こそ、次は転ばないように歩けるのか？ 良かったな。滑る場所教えてくれる優しい人達で」

一発触発だぁ！！！！

止めなくては！

「止めなくていいわよ。ハルくん」

えっ？

あっ！

輝美さん！？

「やりたいだけやらせなさい」

えっ！？

でもそれはちよつと……

「そんな心配そうな顔をしなさんな。大丈夫よ。漢は喧嘩するほど仲良いんだから」

あの……二人は男じゃないんですが……。

「あはは、なんか不満そうだね。分かった分かった。二人を止めるよ。あとうちの馬鹿兄貴達もそろそろ来るから、あがってくれて大丈夫だよ」

約二時間叱りっぱなしでしたか……。

ご苦労様です。

「じゃっ二人を止めるから協力してね。ついでにバイト代も上げるから」

はい。

って止めることとバイト代になんの関係が？

「二人とも、ちよつとハルくんを借りてくね。仲良くしてなきゃ返さないから」

えっ！？

「行くよハルくん」

と抱き寄せられ連れて行かれる僕。

ちよつとまで！！！！

二人は、輝美さんの言葉で固まってるご様子。

確かに止まったけどあり！？

僕が連れ込まれたのは休憩室。

誰もいない……静かだ……。

目の前には茶封筒。

今日のバイト代だ。

受け取った時、帰れると思ったのはいいが、輝美さんが帰るのを許さないと言わんばかりの雰囲気を漂わせていて僕は帰れないでいるのだ。

「ハルくん、この部屋暑いわね……」

とエプロンを外す輝美さん。

暑くありませんよ!?

大丈夫ですよ!?

「もうっ、照れちゃって可愛いなあ〜ハルくんは」

ゆっくりと僕の方へと寄りながらリボンをほどき、ボタンを一つ外し、また、一つ外す。

ボタンを外す指は、まだ、止まらずまた一つボタンを外した。

三つ目のボタンが外されたところで見えてくる双きゅぶちゅ!!

「はい、ここまで。ハルくんもやっぱり男の子だね。可愛い」

輝美さんに両手で頬を挟むように叩かれたのだ。

痛い……。

「二人とも入ってらっしゃい」

と輝美さんが言っと、いつの間にか着替えたのか、私服の玉葛と紅葉がいた。

気持ち笑顔に青筋を浮かべた二人がだ……。

すみません!!

とりあえず土下座。

二人からの白い視線を背中いっぱいに浴びながら土下座。
すみません!!

「ほら、帰るよ」

えっ？

「なにぼさつとしている。さっさと着替えて来い」

あっああ……

どうやら許してくれたようだ……

僕は着替えに更衣室に向かった。

だが、その場で怒ってくれた方がよかったと、晩御飯の時に思い知らされた。

ええっと……なんですか？

これは……？

食卓に並ぶは白っぽい料理たち……。

「なんだか不思議そうな顔だな。晴信」

ええ、こんな不思議な料理が並んでいれば……。

「あっ、今日の料理は私と玉葛で考えて作ったんだよ」
へっ？

「そうだ。今日、ワラワと紅葉、二人に足りないものが有ることがよくわかったのだ」

足りないもの？

「女が男を誘惑する時に必要ような色気を中心」

「男をとりこにするのに必要な色香の要」

ふっ2人とも？

「「そう胸！ 豊満な胸！！」」

息ぴったしに机を叩きながら立ち上がった紅葉と玉葛。

「ワラワ達には、あの輝美さんやセフィリアのような胸がない」

「私は……む、昔から意識……してた……けど……今日、つくづく
思い知らされたわ。……… あんなハルの顔を見たら……… 思っしか
無いじゃない！！」

……… すみません。

「だからだ！ だからこのめにゅーなのだ」

「そう。増える胸の料理。題して増胸料理ぞくきょうりょう！！」

増、胸、料理？

「ご飯の牛乳炊きに鮭の牛乳煮込み。ほうれん草の牛乳ひたしと肉じゃが牛乳風味だ」

「ぜーんぶに牛乳を使ってるの」
なぜに牛乳？

「牛乳は胸を大きくする！！……らしい！」

「という紅葉の言葉を信じて作ってみたのだ。さっ食べるぞ」

……らしいって……なんでそんなに不確定な情報でここまで……。
これはいわゆる自業自得なのか？

いかにもお腹に悪そう、特に肉じゃが……白い肉じゃがヤバそう
なんですが……。

「さっ、食べよ！」

「そうだな。無論、晴信も食べるだろ？」
逃げられそうに無いです……。

「いただきます。」
いただきます……。

この日の料理の味はもはや語る必要が無いだろ……。

この日のことは、『白く破壊された日』として僕の心に深く刻ま
れた事であろう……。

思い出したくないよお……。

第21話 二人のウェイトレスと僕 (後書き)

ええっと、次回予告の前に……

私生活が少々忙しくなってきたのと、執筆速度の遅滞が原因で更新を週に一回……下手したら二週に一回になってしまいかも知れません。

とりあえず次の月曜日から週に一回になります。
すみません。

では、次回予告。

予告するのは僕です。

話しは一気に二週間すみ、いまだ胸を気にする紅葉に玉葛。
晴信ファイト!!

てなワケで次回もよろしく

第22話 バイトと僕 (前書き)

遅れてすみません。

しかも遅れた割に、良いものに仕上がった気がしません。

ホントにすみません

第22話　バイトと僕

「お願いします」

「うーん、だからあ、ハルくんを無期限で貸してくれたらいいよって言ってるでしょ？」

「だから、それは無理です！」

今日で何日目だろうか……。

かれこれ二週間？

カレンダーはすでに10月から11月に変わり、校内は11月1日から3日間ある文化祭、“狸煌祭”^{（じりくわい）}に向けて熱く燃えている状態である。

ちなみに、今、学校にいます。

しかも放課後です。

もっと言つと、今日は11月4日です。

つで、玉葛&紅葉が輝美さん相手に何をしているかと言つと……。

「胸を大きくする秘訣を教えてください」

「君達、恥ずかしくないの？　てかホントに何度いわせるの？　ハルくんを無期限で貸してくれたら教えるって言ってるでしょ」

「だから、それはできないってさっきから言っている」

人を物のように扱う三人……。

ちよつと悲しい。

「おい、晴信。何故に玉葛達は妾に聞かぬのじゃ？」

と、ペットボトルの中のセフィアさんが話かけてきた。

何故、ペットボトルの中なのか、それは、単に大豊に付いて学校に来るさいにこの方が利便がきくからだそうだ。

何故ってセフィアさん……。

貴女、玉葛が始めに聞いた時に『それは生まれの違いじゃ』って高笑いしたじゃないか……。

あの後大変だったんだよ？

「晴信、お前、バイトしないか？」

話し掛けてきたのは大豊。

……唐突だなあおい！

「街の自警団のバイトなんだが……やらないか？」

自警団って……おい！

「さすがに、セフィと二人では少々キツくなってきたな。晴信の他にも玉葛や紅葉にも頼みたいのだが……」

確かにあの二人に頼めば結構な戦力になる。

でも、僕はあからさまに戦力外じゃないか？

てか、大豊達二人がキツい相手に僕が勝てるわけ無いじゃないか。

「安心しろ、相手自体はただの雑魚だ。ただ……」

ただ？

「仕方ないわね。それで手をうつわ」

「「やったあ」」

ん？

どうやら三人の話しがついたようである。

「じゃあ明日からお願いね。玉葛ちゃん」

「あれ？ 私は？」

「紅葉ちゃんはいいわ。玉葛ちゃんだけで十分よ。それにコツチヨリアツチの方が紅葉ちゃん好みだと思うなあ。じゃああたしは教室に戻るから、準備あるからね」

と一人帰る輝美さん。

「晴信。ワラワ、明日から昼行灯で働く事になった。『ばいと』だそうだ」

そっかあ……っておい！！

大丈夫かよ。

「安心しろ。上手くやってみせる」

頼もしい限りで。

まあ、玉葛なら問題ないか。

「ところで一体何の話しをしてたの？」

「それはじゃなあ……タイホーよろしく」

「出来ないなら出しゃばるなよ……夏の初めぐらいに、街の自警団から自警に入ってくれないかと頼まれてな。それをお前たちにも、手伝って欲しいのだ。報酬は出る。むしろ向こうから出させてくれと言ってくるはずだ」

「ふーん……なんか凄い話ね。てか、あなた達二人なら、この街の不良達なんて余裕なんじゃないの？」

確かに、わざわざ僕らが出る必要は無いだろう。

「少し前までならそれで良かったのだが、ごく最近、ここいらの不良達が組織だつて動くようになってきたんだ。しかも一つだけでは無く、最低でも3つあるらしくてな、少々手に余っているんだ。それに、セフィが最低でもあと一人、欲をかいてあと四人は欲しいと言いだして聞かないんだ。頼めるか？」

と、頭を下げる大豊。

そんな事情があるのか、力になるかは分からないが出来るだけ手伝ってみるよ。

「そうか、分かった。自警団事態、ワラワはもとより賛成。ばいとの合間でよいなら参加するぞ」

玉葛も参加するようだ。

後は紅葉だけだ。

この手の話には、結構食い付きの良い紅葉の事だから参加するだろ。

僕はそう思いながら紅葉をみた。

だが、そこには僕が想像したような、目をランランと輝かせる紅

葉では無く、沈んだ、難しい表情をした紅葉だった。

「ごめん、みんな。私は参加しない。……先、帰るね」
と、それだけを言い残すと紅葉は走って帰ってしまった。

その日の晩、食卓の席に紅葉の姿はなかった。

第22話 バイトと僕 (後書き)

月曜日に定期的に更新すると言っていましたが、すみません。どうも出来そうに有りません。

二週間以上間を開けないように頑張ります。

これからも読んで下さい。

第23話 失踪紅葉と僕 (前書き)

お待たせしました!!

結構いいできたと思います。
あくまでも僕基準ですが。

第23話　失踪紅葉と僕

「目が、目があああ！！！」

「ぐはっ！！！」

「うぐっごぼごぼごぼごぼ……」

「あははっお花畑だよあはは」

僕の目の前に広がっているのは阿鼻叫喚な状況が広がっています。
正直……説明したくない……。

「まったく持つて、ナイスな作戦だね。流石は俺！あれだね、
まず晴信の閃光球ライトで不良たちの目を潰す。そこをすかさず、大豊が
殴って黙らして、セフィリアさんが水で死なない程度に窒息させて、
最後に玉葛で危ない夢を見せると二度と不良になれないように暗
示をかける。完璧だね」

興奮気味に語るのは源太。

いつも爽やかだった笑顔が今は黒い……。

今、僕たちは、大豊のいう通りに不良グループを取り締まってい
る。

不良グループを取り締まるに当たって真つ当な理由もあるし、そ
の理由を裏付ける証拠も、録音テープとしてあったりする。

まあ万里経由の情報ですが……。

僕としてはこんな方法は好きじゃない……。

力で抑え付けた上に、強力な暗示で行動を縛る……いくら不良だ
からって可哀想だ。

それに……

「紅葉のことが気になるのかい？」

源太が声をかけてきた。

先ほどのまでの黒い笑顔では無く、いつもの……いや、心配そうな
笑顔を浮かべている。

「大丈夫、安心しなよ。今万里が捜してくれてるよ」

源太の言うとおりだが、心配なものは心配だ。

紅葉が帰って帰って来なくなつて4日目である。

たかが4日、されど4日。

いつも隣にいた人がいないっていうのは、どうも落ち着かない。

それに、玉葛も何だか元気がなく、紅葉が失踪してからマトモな
会話をした覚えがない……。

「さつ、用も済んだ事だし。帰るか」

「そうじゃな。帰るぞ」

大豊が肩を鳴らしながら僕らのところにやって来る。

セフィリアさんも大豊に続いてやって来て、その後ろに暗い顔の
玉葛がついてきていた。

「……晴信、どうした？ 暗い顔をして。玉葛もだ」

暗い顔つて……お前……

「こんなやり方あまり好かん。正々堂々さに欠ける」

「玉葛、貴様がそれを言うとは意外じゃな」

挑発的なセフィリアさん。

まあ、わからないでもないけど……

「ワラワにだつてワラワなりの正々堂々でやっているのだ」

「ふんっでその正々堂々とはなんじゃ」

「………うっ五月蠅い！ 貴様に言う事じゃない！ 帰るぞ晴信
！！」

顔を真っ赤にしてセフィリアさんに怒鳴る玉葛。

かなりご機嫌斜めの様子だ。

僕は慌てて、一人帰っていく玉葛の後を追った。

その日の晩。

いつにも増して静かな食卓。

食べ物やせがむツツすらいない……ご主人様である紅葉が失踪するの同時にこの家から姿をけしている。

玉葛を見る。

黙々と晩御飯を食べていく。

たぶん、葛葉さんのマナー教育が行き届いているおかげか、物音がほとんどたない。

「晴信」

突然、玉葛が話し掛けてきた。

これで長い沈黙も終わる……。

「食べ終わったら流しに置いてくれ、片付けくれたら嬉しいが、まあ明日、朝起きたらワラワが片付ける。今日は疲れた。先に休ませてもらおう。戸締まりを頼むな」

と思ったが、玉葛はそれだけ言うとりビングを出て行ってしまった。

玉葛の奴……いよいよヤバイ気がする。

俺はどうしたらいい……。

……………ダメだ。

全然分らない……。

とりあえず、明日、万里から何かあるかもしれない。

紅葉には鍵だつて渡してあるし……大丈夫だろう……。

今日は、もう戸締まりをして寝よう。

僕が玄関に向かうと、ドアから『カリカリ』とドアを引つ掻く様な音がした。

何かと思いドアを開けると、そこには、傷だらけのツツがいた。

ツツは僕の顔を見ると、すぐ、外に向かって駆け出した。

ツツが行った先には紅葉がいた。

体中怪我だらけの紅葉が……。

「あつハル……。よかった、起きててくれて。玉葛は……もう寝てるんだ……。ある意味よかったかも。会わせる顔ないし……言葉もない。……ハル。ハル達も不良討伐やってるんだよね」

……あつああ。

一方的に喋る紅葉に僕は頷くしかできなかった。何より、その傷だらけの体に目が行き、ろくに考えてられない。

「ふふふ。この傷気になる？ 今日、大豊達とやり合ったのはあ！？」

「源太がね。ハル達にはわざと知らせてないって言ったから……だから……だから来たの。お別れ……い……言いだね。……今日から……敵……同士だね。……バイ……バイ」

言い切るが早いか、紅葉は、まるで未練を断ち切るかのように走り去った。

「待てよ！！紅葉！！」

暗闇の住宅街に響く僕の声。

すぐに出なかった自分の声が恨めしい。

だが、そんな事に構っている場合じゃない。

紅葉がいなくなってからのもろくろりと過ごしてたわけじゃない。

「光球、閃光球、光線に次ぐ技を作ったのだ。」

その名前は、“第三眼”だいさんのめと書いて“レンズ”と読む。

ラインの応用で、光球が読み取った映像を僕の目に向けて直接送ると言うものだ。

まだ、慣れてなくて一回使っただけで吐き気がするが、そんな事はどうでもいい。

時間がない。

玉葛には悪いが、書き置きで勘弁してもらおう。

“紅葉を見つけた。すぐ連れて帰る。待っていてくれ”

ドアにそうラインを使って書き残すと、早速レンズからの映像を受け取る。

うつ……。

レンズから送られてくる映像は上空からの映像だ。

かなり気持ち悪い……。

だが、泣き言は言ってられない。

すぐさま、紅葉を探す。

……………見つけた！

レンズに紅葉を追うように命令を送り、僕も走りだす。

時折、レンズからの静止映像や動画映像で紅葉を確認しながら走る。

待ってる。紅葉。玉葛。

第23話 失踪紅葉と僕 (後書き)

待つてました次回予告

まあ次回もたぶん二週間いないには更新します。

すみません。

では、 本日は古山夫婦です。

芯 (以下芯) 「……………」

紅華 (以下紅華) 「こんにちは」

芯 「うをおおおおもおおみいじい」

紅華 「あらあらまあまあ」

芯 「もおおみいじい……………」

紅華 「蛙さん？ 夫が使いもんにならないくなってしまったので帰らせてもらいますね」

えっ！？

あの……

紅華 「さてさて紅葉はどうなるのかしらね」

あの…… 芯さん引きずって帰るんですか？

あの……

てか、 何で大人がたは普通に僕に話し掛けてくるかなあ
マナー違反だよ？

てなわけで、次回をお楽しみ

第24話 闘恋隊とコライレンジャーと僕 (前書き)

お久しぶりです

第24話 闘恋隊とコライレンジャーと僕

これで最後。

……よし、できた。

「いい痛いよ。ハル」

涙目で頬を膨らめてもダメ。

あんな無茶をしたんだから反省をしなさい。

「あにさん。姐さんが可愛いでしたら優しくお願いしますよ」

「「そうですぜ」」

「……」

えっと、現状を説明すると、ここは町外れの丘にある建設途中で建設中止になったマンションの一室。

大まかな壁があるだけなのでだっ広い。

そして、目の前で涙目になって頬を膨らめいるのは、古山紅葉。

あの後、このマンションの前で転んでベソをかいているところを発見した。

次に、僕らの周りに居て、僕を『あにさん』、紅葉を『姐さん』と呼ぶ男達、総勢10名。

この人は、不良だ。

しかも、紅葉が面倒を見ていてある程度、改心した不良達らしい。この不良達も、濡れネズミな上にいろいろ怪我をしていたところを見ると、たぶん、大豊達とやって生き残ったのだろう。

紅葉……一体どんな鍛え方したんだ？

「さっハルがうるさく言うから手当てしてもらったけど、問題はこれからね」

「と言うことは……また、あの化け物とやりあわにやいかんという事っスか」

不良の一人が肩を落としながら言う。
分からなくもないよ。その気持ち。

「日が明けたらたぶん来るわよ」

………確かに。

万里にかかればこんな所すぐに見つかるだろう。

にゃ〜。にゃ〜。にゃ〜。

………てか、猫多！！

なんか万里が混じってそうで怖いな……。

「これで奴らが来るのは確定ね。みんな、朝に備えて体を休めること！ いい？」

「うすつ！！ 分かりやした。姐さん」「」

紅葉の言葉通りに、各人思い思いに体を休める不良さん達……。

あの……紅葉さん？

なんで確定なの？

「ん？ 何？ ハル？ ……あゝ。なんで確定なのか気になるんですよ。それはね。今日？ いや昨日かな……とにかく襲われた時も今みたいに猫がどっちゃりいたのよ。関係無いわけじゃないと思うわ。私は」

さようで……。

とりあえず今日は休みましょう。

「あつ、ハルは寝ずに見張りをしててね。大豊が攻めて来てる時に寝起きの悪いハルを起こすのは面倒だから……分かるよね」

………はい。

笑顔が怖いですよ。紅葉さん……。

あつ……金星が見える……。

要するに日が上り始めたか始めないかぐらいの時間。

僕は時間をかけ、このマンションの周囲にレンズを設置してある。レンズの弱点は、レンズ自体を僕が視認をしなくてはならないという事だが、別のレンズを経由する事によって多少は克服できたと思う。

レンズだけではダメだと思ったので精度はかなり低いが、かなり広い範囲にサーチを使っている。

神秘の力の塊がやって来ればすぐわかる。そんな程度だが、化け物二人、大豊とセフィリアさん相手なら問題は無いだろ。

とか、言ってるうちに早速やってきましたよ。

「古山紅葉！！ 以下“とうれんたい闘恋隊”素直に投降しろ！」

とうれんたい？

「私たちのグループの名前。可愛いでしょ」
可愛いでしょって……。可愛いか？

「あんた達こそ、しつこいのよ！！！！ 一体私たちが何したっていうの！？」

叫ぶ紅葉。

「そこに晴信がいるだろう。晴信誘拐疑惑だ」

冷静に大きな声で返す大豊。

やっぱり僕がいることまで知られてるし……。てか、何故に誘拐されたことになってるの？

「ハルは、ただ私を追ってきただけよ。誘拐じゃない」

「即言い返す紅葉だが、

「言い訳など、何とでも言えように。妾ら“不良撲滅戦隊コライレ

ンジャー”のグリーンをたぶらかした罪は重いのじゃ」

不良撲滅戦隊コライレンジャー？

何、意味不明なコトを言っているのかな？ セフィリアさん。

てか、僕がグリーンなんですか？

一体何なんですか！？

「ちなみに命名、配色はセフィリアさんの独断だから」

源太、要らない情報をありがとう。

「とりあえずだ。不良とそれらを束ねるトップは悪だ。そちらの味方をするというなら、誰であろうと容赦はしない。覚悟しろ」

とだけ大豊が言っていると、そのうしろにセフィリアさんと源太が続いてやって来る。

起こるって分かってても、いざ目の前で起こると、無性に悲しくなってくるものだ。

何が楽しくて、また、大豊とやり合わなきゃいけないのだろう。

第24話 闘恋隊とコライレンジャーと僕 (後書き)

玉葛(以下玉)「次回予告だ。ワラワ抜きでの戦いが今はじまる。一人寂しく家に残るワラワ。一人寂しく朝食を食べるワラワ。一人寂しく晴信の事を思うワラワ。……はっ！ 次回予告とは、サブキヤラに出番を与えるとかなんとか調子の良い理由を付けて居るが、その実は、作者のバ蛙がそれらサブキヤラの存在を忘れない為がある……ワラワは忘れてしまうのか!？」

そんなこと無いから。
ねっ？

とりあえず次回をお楽しみに！

玉「イヤだああ!！」

第25話 激突！！ 闘恋隊VSコライレンジャーと僕（前書き）

遅れました。
すみません。

第25話　激突！！　闘恋隊vsコライレンジャーと僕

まず、状況を整理しよう。

場所は、町外れの丘に建つ、建設中に不慮の事故が相次ぎ、建設中止になったマンション。まだ、大まかにしか造られておらず、部屋分けの壁すら無い状態である。資材とかも運び込まれたままの状態で放置されている。

次は、配置だ。

まずは、闘恋隊。

マンション四階に陣取っており、コライレンジャーを向かい討つ作戦を取る模様である。

主力は、紅葉と何故か僕。

今更、逃げられないのでやるしかないのだけど……できる事なら逃げ出したい。

次に、大豊率いる、セフィリアさん命名の不良撲滅戦隊コライレンジャー。

こちらは、まとまった行動はしていない。

大豊は、鬼のような速度で壁を登って来ている。これは日の明けないうちに置いてあった資材で階段をふさいだからだ。

セフィリアさんは外にある水道から水をせつせと集めている。そろそろ10m近い水の球が完成しそうである。

源太は……ジツと僕らの方を見ている。

そろそろ、レンズを戻そう。

攻められている以上、リサイクルしなくてはならない。

「鈴田！！ 他の連中と一緒に下の階で待ち伏せしなさい。大豊には手を出しちゃダメよ」

「わかりやした。でも姐さん、大丈夫ですか」

「ハルが居るから大丈夫よ。さっさと行きなさい」

「うす」

移動を始める不良たち。

不良たちには悪いけど、居たら邪魔だからコレで良いと思う。

「ハル、窓から離れて」

弓を構えるようなポーズの紅葉から指示がかかる。

一光矢を放つつもりのようだ。

紅葉の目が光る。

その瞬間、圧縮された空気の矢が音速で放たれる。

摩擦で光る矢が壁に吸い込まれるよに当たり、壁を吹き飛ばす。

遅れてゴーツと言う轟音と着弾時の爆音が鳴り響く。

すぐさま紅葉が、外を見る。

僕もつられて外を見る。

そこには、セフィリアさんの水の腕に抱きかかえられている大豊と憤怒するセフィリアさんが居た。

しきりに何かを叫んでるかと思うと、こちらに向かって真っ直ぐに走りだした。

セフィリアさんって凄いなあ。あんな事まで出来るんだ。

セフィリアさんは水で足場を造りながら走って来ているのだ。

そして、水の球をまとい、激流の様な勢いで突撃を繰り出して来てくれた。

幸い、僕と紅葉はそれぞれ左右に飛び退いて突撃を避けていた。

早く周りに散らばっているレンズを回収しなくちゃいけなくなっ
てしまった。

レンズを回収するついでに、マンシヨン全体を包むように広げた
僕の神秘の力もこの部屋に凝縮させよう。

ふと、突撃をしてくださったセフィリアさんを見ると小さくうめ
いている大豊を揺すっていた。

「紅葉！！ 貴様のせいじゃ。タイホーが死んだら妾は貴様を許さ
んぞ」

たぶん、紅葉だけのせいじゃない気がするよ。

それに、その程度で大豊が死ぬようなことはないと思うよ。

「なんじゃ、晴信。文句でもあぐう」

「セフィ。俺は平気だ」

軽く頭を振り立ち上がる大豊に言葉を止められるセフィリアさん。

「でも、すぐに平気じゃなくしてあげるわよ」

そんな大豊に喧嘩を売る紅葉。

右手には2mはある資材を軽々持ち上げている。

「俺に勝つ。と言うことか？ 面白い」

「当然」

僕は今、修羅のごとく殺気を放つ大豊と般若のごとく笑う紅葉た
ち二人を目の前にして言葉を失っていた。

最初に動いたのは大豊。

全身をひねり、バネが弾けるかのようにして放たれた風切り音の
する大豊のパンチは、真っ直ぐ紅葉へと向かっていった。

だが、紅葉はそれを、左手で跳ね避け、右手で持っていた資材を
振り下ろした。

表現しにくい豪快な音とともに、資材は砕け、大豊がバランスを
崩しよろめく。あくまでもよろめいた程度である。

化け物が二人……。

「晴信。今、化け物が二人とか思ってるかと思うが……貴様も十分人としての域を逸しているぞ。……と言うか妾とちゃんと戦うのじや……！」

今、僕はセフィリアさんの相手をしている。

僕は、正直、戦ったりするのがめんどくさい、出来れば無血で済ましたいし、願わくば自滅してもらいたい。

だから、僕はセフィリアさんに対してある技を仕掛けたのだ。それは、レンズを使ってセフィリアさんの見えている景色を上下左右前後を逆さにして見せるということ。

馴ればなんでも無いのだが、セフィリアさんは全く馴れずいて技をかけた直後なんて『うなっ……！ なんじゃ！？ 何をした晴信……！ 事前に進めん……！ なぜじゃ……！？』

爆笑必至の大パニック。

ここまで驚くとは思わなかった。

「きゃっ……！ ななな、後ろに倒れたはずなのに鼻が痛い……なぜじゃ……！」

なんか……ここまで行くと扱いに困る。

「とりあえずじゃ。貴様も既に化け物のじゃ。なんじゃこの凄まじい濃度の神秘の力は……！」

正直維持するのは、かなり必死ですけどね。

戦うなんてことしたらすぐに薄れてくよ。

「じゃが、色々とバランスが悪い様じゃな。神秘の力を使えない者が大量に持つには問題無いが、中途半端に使える者がもつと……下手をすれば暴走じゃぞ」

急に真面目な話をしてきた。

暴走……確かにそれは怖いな。

「貴様何か申せ。妾は今、貴様の顔が見えんのじゃぞ。判断がつかないじゃろうが」

はいはい。

失礼しまし……

「きゃっ!!」

短い紅葉の悲鳴。

「なんじゃ？ タイホーの勝ちか？」

紅葉が部屋の隅まで飛ばされていた。

「どうやら、勝負ありだな。紅葉、お前は風を操っているみたいだな。だが、神秘の力が使えなくなるとただの馬鹿力でしかない。それでは俺に勝てんよ。残念だが、トドメ……だ……」

トドメをさそうと、紅葉にゆっくりと近付く大豊。

僕がラインで牽制をしようとした矢先、大豊がバタリと倒れた……。

何事！？

大豊に近寄って見ると、

「zzzz……」

寝ていた。

一体誰が。

第25話 激突！！ 闘恋隊vsコライレンジャーと僕（後書き）

セフィリア（以下セ）「なあ妾の扱い酷くないかえ？」

大豊（以下大）「そうか？ いつも通りだと思っぞ」

セ「なっ！？ そんな馬鹿な話があるわけ……」

大「あるぞ。 少なくとも電化製品全てを水浸しにしたり、
寝相が悪くて風邪を引いたりする奴のすることだからな」

セ「なっ……」

大「とりあえず、次回は不愉快だ」

セ「……」

大「帰るぞ、セフィ。 セフィ？ おい！ 寝てるのか？ 仕方ないなあ。 抱えて帰るか」

セフィリアはバカキャラです。

すみません。

バカキャラですみません。

美人なのに……。

次回をお楽しみ

いつになるか分からないですけど

第26話　なっがあああいお説教と僕（前書き）

なっがあああいお説教とか言ってるけどあんまり長くはない

第26話　なつがああああいお説教と僕

お腹が減ったなあ……。

って当たり前だよ。朝から何も食べてないし、今お昼だし……。

僕らはまだ、建設中止になったマンションにいる。

急に寝始めた大豊も起き、静かに正座をしている。

他に、正座しているのは、セフィリアさんと紅葉。

僕は、その傍らで資材に座りながら彼らを見ている。ちなみに、僕の隣には源太と憔悴^{せうすい}しきった万里がいたりする。

なぜ、こんな状況なのかと言うと、それは、正座する三人の前に立ち、セフィリアさんに用意させた水を時折飲みながら、朝から今の今までも叱っている玉葛のせいだ。

そう、あの時、大豊を眠らせたのは玉葛。

その後、ひとしきり怪我の手当をやると、今の姿勢のままで居るのである。

「たく、皆ヒドい怪我がなくて良かったが……古山紅葉！　ワラワは不甲斐ないぞ。なんだ！　その有り様は！！　ライバルとして恥ずかしいぞ！」

「ばつ馬鹿言わないでよ！！　私は普通の人なの、あんた達みたいに神秘の力に恵まれてるわけじゃないの！！　せいぜい、ちよっと珍しい体質なぐらいだし……他はいたって普通の女の子なの！！」

普通の女の子が、いくつもの資材を曲げたり、砕いたりしますかね。

僕はそこじゅうに無残な姿で散らばる“元”何本、何枚もの資材を見る。

紅葉が、大豊を殴るのに使ったり、大豊の攻撃を防いだりした結

果だ。幸いなのか、紅葉に大豊、両名には目立った怪我はない。

「そして、セフィリア・ウンディーネ！」

「なっ！ 玉葛、妾のお父様の姓である“ニユクス”が抜けておるぞ！！」

「それを入れたら、お前の正式名じゃないだろ！ とそんな事より、お前は能力ばかり磨いておらず、ちゃんと頭の中も磨いたらどうだ！？ ワラワのライバルだと名乗る以上は勉強をせい！！ 後、家事の勉強もな！！」

ごもつともです、玉葛さん。

セフィリアさんは何だか固まって居ますが……。

「何度も言うが、お前はやり過ぎだ！ 橘槻大豊！ 悪即滅という

心掛けは良い。だが、それはあくまでも心掛けでの話し。ここまで顕著に表してどうする！？ お前は必要悪を知らんのか！！」

「悪は悪だ。悪を倒して何が悪い」

「ぬううなああ！ まだ言うか！ 確かに悪を認めるわけでは無いが、時としては仲間を思い、わざと泥をかぶり、そして悪になる者もいるのだぞ！ お前はそんな人まで殴ると言うのか？」

「そっそれは……」

「後、大豊。お前は“暴力英雄”と呼ばれてるようだな。何を浮かれている！ “暴力”とはお前にとって悪なのではないのか？ ヒーロー自ら悪を掲げてどうするのだ！！」

「……」

「何も言えないのか？ 少しでもわかったのならよい。とりあえず自重しろ！」

スゴすぎる。

あの大豊の悪即滅の精神を言葉だけでねじ伏せるだなんて……。

「そろそろ、説教もこれぐらいにするか」

と玉葛の言葉に安堵の表情をする三人だが、次の瞬間、三人の顔が絶望的なものに変わった。

「やはり、悪い事をした奴には説教だけでは無く、罰も必要だと源太と話してな。だから、罰を用意した。では、まずはセフィだ」

とセフィリアさんの頭に触れる玉葛。

すると、

「う、うわああああん！ タイホー！ 怖いじゃ！ 恐いのじゃ！
雷が怖いじゃあああ！！ タイホー！ お父様！ お父様あ
ああ！！」

半狂乱で大豊に抱きつきながらマジ泣きした。

「次は大豊。コレがダメなんだろ？」
と、大豊に頭を触れる。

「うつ！ ……カ……ラス……」

大豊の唯一の弱点。

それはカラス。

詳しい理由は知らないが、とりあえずカラスを毛嫌う。

現に、目の焦点はあつておらず、歯切れの悪い口調でカラスとエンドレスリピートしている。

「最後に紅葉だ。コレは幻覚では無く、実際にやってもいいのだが……紅葉との協定を違える事になる、だから幻覚で済ましてやるというワラワの優しさだ。ありがたく思えよ」

それだけを言うと、玉葛は紅葉の頭を触る。

「えっ？ えっ？ 何も無いけど？」

どういこと？

「それはどうかな？ 晴信を見てみる」

「え？ ……ああ！！ ちょっとなんで玉葛が！？ ……違う違う
！ あれは幻……でも何か許せない！！」

紅葉が慌てた様子でこちらに走ってくる。

どうやら僕の横に玉葛が見えるらしい。

慌てて走り寄ってきた紅葉の足が、僕の手前1mぐらいで止まる。

「あれ？ あれ？ 寄りたいのに寄れない……てか寄りたくない。寄りたいのに……あれ？ あれ？」

そのまま動きの止まる紅葉。

どうしたんだろ？

「それだけでは、あまり罰にやらんと思ってな。ついでに晴信に近寄れない様にもしといた。ワラワも鬼ではないからな、今日中には術が解けるようになっている。安心しろ」

安心できないよ。

大豊をしてみる。半ば気絶しかけてるよ。

セフィリアさんだつて半狂乱で大豊を絞めながら泣き叫んでるよ？

紅葉は…… コレは思考停止って奴だね。

「晴信。一人涼しい顔をしているが、お前にもちゃんとあるからな」

えっ！？

「夜が楽しみだな」

満面の笑顔で言う玉葛さん…… とても恐いです。

その晩…… ただひたすら目的無く街中を走り回るといふ夢をみた。走るコトをやめられず、ましてや夢から醒めることができないまま、24時間ぐらいを走り続ける夢を見るのは、苦行いがいの何もかももってなかった……。

精神的に辛いです……。

第26話　なつがあああいお説教と僕（後書き）

次回予告

さして予告する事がないがとりあえず呼んでみた。

彩豪（以下若）「ど〜も。　喫茶昼行灯の〜若こと草分彩豪さんで〜すよ〜？」

誉末（以下誉）「いやいやどもどもフリーなライターをしている真咲誉末さんだぞ。覚えてるか？　22歳の優しいお兄さんだぞ。

気軽にお兄ちゃんと呼んでほしい。　特に玉葛ちゃん！　君は天使だあ！！　俺には今彼女がない、だから付き合っで欲しい！

そして『にいに』とか『兄様』と『兄上』とか呼んで欲しい！！」

若「僕だつて〜紅葉ちゃんに〜来て欲しいな〜」

誉「そうだな。そうだな。だから許せねえんだよ。晴信の奴がよ〜！　くっ〜羨ましい！　いつちよやつちまうか！？」

若「それ〜いいかも〜」

輝美（以下輝）「ふざけてないで仕事しろ！！　私は私で文化祭の準備で忙しいっていうのに3日前よ3日前！！」

若& a m p ; 誉「はい……」

輝「てな分けて次回は文化祭よ。お楽しみに」

はい、お楽しみに。

初めは若と誉末二人でやらせるつもりが、ポケッツコミの法則？により急遽輝美さんが参加しました。

キャラ紹介とかした方がいいのかなあと何となく悩む爆弾蛙でした。

第1回キャラ紹介、晴信と紅葉と玉葛（前書き）

すみません。

第1回キャラ紹介／晴信と紅葉と玉葛

どうも爆弾蛙です。

思いのほか27話が上手く書き進まず、キャラ紹介に逃げるという形になりました。
すみません。

では、第一回ということで、晴信と紅葉と玉葛になりまゐす。

安森晴信。

この物語の主人公

16歳。身長175cm。髪は長くも短くもない中途半端な長さ。常に目覚ましパイポ（禁煙パイポみたいなもの、禁煙効果は無く清涼感がある。実際に販売してます）をくわえており、寝付きの良さと寝起きの悪さはかなりのものである。

寡黙や無口と言うよりは、話したり声を出すのが面倒くさがつてるふしがあり、ほとんどしゃべらない。だが、表情に考えてる事が素直に出してしまうので、コミュニケーションになぜか困らない。

五年ほど前に、紅葉と共に神隠しにあり、玉葛に救われた経験がある。そこがそもそのスタートである。

生まれながらにして、かなりの量の神秘の力を持っており、その属性は光。

制御を覚える一環として覚えた技は、光を球状にまとめる光球と、その光球を激しい光として爆発させる閃光球ライトと、光球からレーザーを発する光線である。

ちなみに晴信が作った光球などは、晴信以外に、視認出来る者は基本的にいない。
レンズ

最近、第三眼をあみ出し、重宝している。レンズとは光球が読み取った映像をラインの応用で直接晴信に伝えるというものである。

古山紅葉。

この物語で重要な幼馴染み。

16歳。身長155cm。髪は、赤みかった茶色で、結構クセの強い髪をしている。長さはだいたい肩甲骨ぐらい。

髪の色や外見は全て母親譲りであるが、猪突猛進的なことや不器用さは父親譲りである。

父親から護身術として喧嘩やり方を幼い頃から教えられているため格闘センスは高い。

また、特異体質がら馬鹿力である。

幼馴染みの晴信の表情を読む上手さは、晴信の両親につぐ実力である。

晴信と共に神隠しにあったさい、ツツと名付けた謎の狐のような生き物と契約をする事によって一命を取り留めた。

その時、神秘の力の制御を覚える一環として覚えた技が“一光矢”といい。圧縮した風を音速で打ち出すという、日に三発しか撃てない大技だったりする。

ちなみに神秘の力の属性はツツに依存している

最近、高密度の風をまとして攻防に使えるようになってきたらしい。

九尾玉葛。

この物語で重要な狐。

16歳、身長152cm。紅葉よりは多少メリハリのある体型をしている。

髪は、首の後ろで結わえており、狐の尻尾のような形をした髪型をしている。

白髪に金髪のメツシュが入っていて、だいたい五分五分の色合いになっている。

葛葉さんの名の下に、良妻賢母として地獄のような修行をつみ、玉藻さんの名の下に、賢人として緩い学習を積んだ上で晴信の所にやってきている。

最年少で九本目の尻尾を出すことが出来るようになった天才で、その潜在的神秘の力の量は、普通の九尾一族の大人三人分である。

九尾一族とは、妖狐一族の中でも尻尾を九本出すことができる者の事をいい、潜在的に神秘の力の量が多い一族である。だが、原則、尻尾を九本全て出さなくては100%の神秘の力を使えず、また、九本出せるようになるまでに最低でも20年かかる。

玉葛の属性は、九尾一族の中でも一般的なもので、その属性は誤認である。他にも変化^{へんげ}が使えたりする。

玉葛達の誤認とは、相手の認識している事コントロールする事であり。

見えるはずの無いものが見えたり、熱くないにも関わらず熱いと感じさせ火傷をおわせたりする事ができる。

また、コントロールする事ができるものが感覚である以上、眠気などといった生理的な感覚までコントロールできる。そして、寝ている間に見る夢までもコントロールできる。

玉葛はまだこの力を使うのに制限が多い（発動条件や発動時間、効果範囲などが限定されている）が、玉藻さん（九尾一族最強）レベルになれば、少し時間をかけた程度で世界中を誤認させれる（例えば、偽の戸籍作りなど）。

一番一般的であるが、究めるのが極めて難しい属性である。ちなみに、玉葛はまだまだ成長します。

とりあえず三人書きました。

玉葛は凄いですねえ。最強ですよ。

第2回のさいはたぶん大豊とセフィリアです。

源太はまだまだ先になると思います。一人出きっていないので……

第1回キャラ紹介／晴信と紅葉と玉葛／（後書き）

次回予告は前の通りあまり変更はありません

本当に申し訳ございません。

第27話 文化祭前々日と僕 (前書き)

更新でえゝす。

新キャラも更新でえゝす

第27話 文化祭前々日と僕

朝、玉葛の一言により、大変な事を思い出した。

ちなみに今日は11月9日。昨日、紅葉を無事に連れ戻し、何故か、そのお仕置きとして無駄に走り回るといふ悪夢を見させられた朝という訳なのです。

その玉葛の一言とは、

「文化祭とやらは明後日なのだろう？ 一体何をやるんだ？」
そうだ。

文化祭はすでに2日後までと迫って来ているのだ。

そういえば、うちのクラスは何をやるのだったっけ？

とりあえず、クラスに居る色んな意味で有能な三人が上手くやっていてくれるだろう。

「私たちのクラスは“一芸茶屋”よ」

「一芸茶屋？ なんだそれは」

「簡単よ。私たちのクラスメイト、要するに一芸茶屋の店員に何かしらの芸で勝負を挑む。勝てたら会計を半額。圧勝ならタダってルールよ。無論負けたら二割増し。ちなみに勝負を挑めるのは何人か居る決まった店員だけだね」

「なんだか、やけに赤字覚悟だな」

「そんな事ないよ。ふふふ」

意地の悪い、されど嫌みのない笑顔で笑う紅葉。

それをいぶかしめな表情で見る玉葛。

玉葛の言うことは分からないでもないが、紅葉の自信は確信あつての事だ。

その容姿からは想像出来ない特技を持つ人間が多いのだ……うち

のクラスは……。

それにずる賢い奴がいる……。

「まあ良い、頑張れよ。だが、まずは登校が先だな。そろそろ出ないと遅刻だぞ」

マジだ！

僕と紅葉は急いで家を出て行く。

玉葛は、今日、バイトが有るらしく一緒には行かない。玉葛も頑張って欲しい。

「セーフー!!」

「あれ、晴信に紅葉。今日はギリギリだね。玉葛が来てからこんな事無かったの……喧嘩でもしたのか？」

していないから……。

「あはは、そんな顔をしなくてもわかってるよ。大方、玉葛のお仕置きが効いて、晴信が寝坊でもしたんだろ？」

悔しいが合ってる……。

そんな勘のいい源太の憎たらしい爽やかな笑顔を気持ち睨みながら居ると、やや演技掛かった声がかかる。

「やあやあやあ、君達、そんな所でボーっとしていないで、席に付きたまえ」

仰々しい言い方だが、コレが奴の普通の喋り方。

そして、その言葉に続くように、奴のそばに控えた女子生徒が言う。

「今から、今日の作業スケジュールが発表されます。1分1秒大切にしたいので急いでください」

やんわりだがトゲのある言葉、これも彼女にとってはいつも通り

である。

まず、最初の演技くさい言葉の奴だが、名前は『かさいのぼる加西龍』。

黒縁の細い長方形を眼鏡をし、常に勝ち誇った表情が特徴的な切れ目で、オールバック気味の少年だ。うちのクラスの委員長だが、どう評価するべきか悩む存在だ。とりあえず言える事は、真生なる変な人、いわゆる変人である。あくまでも“変な考えを持つ人”という意味での変人で、決して“変な性癖を持つ変態”では無いということ、彼の名譽の為に言っておこう。

次に、そんな加西の横に甲斐甲斐しく控えている女子生徒は、『したらかあり設楽佳織』と言う。加西と同じくこのクラスの副委員長を務めており、主に加西のお世話人みたいな事をやっている。まさに加西の秘書のようなポジションにいる少女である。本人が喜んでやっている事なので、良いのではないかと僕は思う。髪はショートで、スマートな体つきのため美人だと言われるが、あの加西と居ることが多いせいか、変人に見られがちである。が、変わり者には変わり無い。後一人、加西の使いっぱのような奴が居るのだが、今はいない。多分、加西の指示で校内外問わず働かされているのだろう。彼もまた、加西の無理難題をブツくさ文句を言いながらも、真面目にこなす変わり者だ。

そんなむちゃくちゃな変人さん達だが仕事はできる。

彼らのおかげで文化祭準備もスムーズに進み、すでに大詰めの状態で、ほとんど仕事が無い状態である。

「ああ、晴信くん。考え事中に悪いが話を聞いて居てくれたかな？ どうやら、その顔の様子では、聞いていなかったようだな。おお、嘆かわしい！ だが、晴信くんの気持ちも分からなくは無い。教室のセッティングも終わり、後は、各自各々が、明後日に向けメニューにあれ料理の練習や接客の練習、そして芸に磨きをかけるだけ！

…気が抜けてしまうのも至極^{しごく}当然の結果なのかもしれない……。だが！！ そんな時だからこそ、気を引き締めるのだよ。我らはある一つの目標を掲げたでわないか！ 最優秀賞を取ると！ 立てよ一年E組！ そして知れ！ 大義名分、そして正義は」

「なんだあゝ加西。盛り上がってる所悪いが、そう言う激励は当日の方がいいぞ。あと、お前まだまだ補習やら補講がたっぷり残ってるぞ。文化祭当日もやりたく無かったら今からやるぞ」

加西のどこか聞いたことのある熱い演説は小松先生によって止められた。

補習補講とはその名の通り補習補講であり、成績劣等生が受けるものである。

そして加西は、先の通り弁が立つのだが、いかせん頭が悪いというアンバランスなリーダーである。

「ああ……了解した。小松先生よ。今行こう。後は頼んだぞ、佳織」

「はい、分かりました。お早いお帰りをお待ちしております。龍」

「うむ、では行こうか小松先生」

「……お前、本当に偉そうだな」

行ってしまう加西、それを廊下で見送る設楽さん。

加西が見えなくなっただのか、設楽さんが教室に戻ってくる。

そして、

「何を呆けていらつしやるのですか？ さっ、練習を始めましょう」
設楽さんの指示が飛んだ。

第27話 文化祭前々日と僕（後書き）

どうも爆弾蛙です。

はい

新キャラですね。

せっかくなので次回予告をさせちゃいます。

設楽佳織（以下佳）「龍、これが次回の資料です」

加西龍（以下龍）「おお！！ ありがとう、佳織」

佳「いえ、そんな……当然の事です」

龍「あつはつはつは。佳織は謙虚だな。当然の事をするのは意外と難しいものだ。それに当然の事だからといってお礼を言わなくてよいなんて事はないだろ。私としては素直に受け取って欲しいよ」

佳「……はい、龍」

龍「本当に君の笑顔は良いな。では、次回予告といこうか。次回は、早い話しが文化祭前日だ。開店までの最後の仕上げというわけだな。どうした？ 不安なのか？ 佳織」

佳「……はい」

龍「何故だね？」

佳「龍の出番が少ないから……」

龍「あつはつはつは。そんな事が。安心しろ。私は欠けても困らない駒に過ぎんよ」

佳「ですが！」

龍「大丈夫だ。全てはシナリオ通り。私の手のひらの中なのだよ。私としては佳織の方が、私より重要だと思っている。期待しているよ」

佳「はい！ 分かったわ龍」

てなワケで次回をお楽しみに！

なんかなげえーし。

第28話 文化祭前日と僕 (前書き)

実は僕……文化祭というモノを体験したことはありません。
あしからず

第28話 文化祭前日と僕

文化祭前日。

今日も玉葛はバイトで来ていない。

そして、加西もまた、『あっはっはっは。君達ならできる。と私は信じている。いや、確信をしている。私も勉学に勤しんでくる。君達も頑張るのだ！ あっはっはっは』と微妙な激励を残し、小松先生に連行されていた。

にしても、設楽さんは凄い。

キッチンスタッフの質問に答える傍ら、ホールスタッフの接客指導をして、そして最後に一芸スタッフの芸の洗練さをチェックしていく。

しかも、発せられる一言一言が的確で迷いが無い。
まさにできる女、キャリアウーマンである。

そして今、彼女が話し掛けているのは、『よっ』と小さいかけ声一つあげるだけで100kgバーベルを余裕でリフトアップする紅葉である。

「紅葉ちゃん……もう少し、重たそうな演技出来ないのですか？正直に言いますと、バーベルの重さも常識的な数値まで下げたいのです。今の紅葉ちゃんでは逆に客が引いてしまいます。紅葉ちゃんは力自慢なバカの男性客への切り札なのですから、もっと弱々しさを出してください。当然、アームレスリングの時も負けそうな演技をしてくださいね」

「うーん……分かってるけど……かおりん、それって、結構難しいんだよ」

「それは分かります。ですが、目的の為に頑張ってください。お

願います」

とりあえず、紅葉は一芸スタッフだ。担当は重量挙げとアームレスリングだ。

紅葉のパワフルガールとしての知名度は知っている人は知っているが、知らない人は全く知らないという程度で、よくて運動神経の良い小さな女の子程度でしかない。

それに、加西いわく。

『あつはつはつは。私たちがターゲットにするのは、この学校の生徒ではない。確かに1日目は学校の生徒しかいないが、2日目、3日目には大量の学校外の客がくる。我がクラスの事を何も知らない客が来るのだよ。良い力モではないか。正にネギを背負った力モ、カモネギなのだよ。あつはつはつは。最終日は力モ鍋だ!!』

奴は悪魔なのかもしれない……。

「佳織。今戻ったぞ。……ちつ。龍の奴いないじゃないか!!」

教室に、髪短い短気な少年がやって来た。

「満^{みちる}。首尾はどうなのですか？」

「ちつ。頑張つて来た仲間へのいたわりの言葉は無いのかよ。まあ一応、初めの値段より二割値下げしてきた」

奴が変人だが有能な三人の最後の一人。津田満^{つだみちる}である。

いつも眉間にシワを寄せ、難しい顔をしていて、口調態度ともに良好とは言わないが、なかなか成績もいいし、なんだかんだで優しい人物である。

「二割ですか……予定していた数値では無いものの、問題ないでしょう。龍から次の指示を預かっています。頑張ってください」

と設楽さんがメモ用紙を津田に渡しながら教室の片隅を指差した。何やらスピーカーなんか置いてある。

「てか五割は無理だろ、普通。つで次の仕事もむちゃくちゃなんだろう? ……やっぱり。何考えてるのだから……」

「龍の考えです。満が感化する事ではありません」

「はいはい。我が偉大なる龍様の為に、ハイルノツボルー。……はあ……………」
満は、やけくそ気味な言葉と盛大なため息を残し、数個の機材を持って教室を出ていった。

「ところで、安森くん。さっきからボーっと立っているだけの様ですが、分かっているのですか？ 無論分かっていますよね？ 分かっている筈です」

設楽さんが僕の方へと向かってくる。

何か気に障ったようだ。

「…………どうやら、本気で分かってない様子ですね。良いですか？ 安森くん。貴方は対女性客用接客兵器なんですよ？ 理解してください……」

対女性客用接客兵器……命名は当然加西だ。

役割としては、主に接客担当。しかも女性客専用の。

渡された作戦メモ（加西作）によると。

- 1、常に無言。
- 2、見せるは、心からの感謝の笑顔。
- 3、受け答えは、筆談で。
- 4、一度目の客が帰る時には“またのお越しをお待ちしましょう”と言うメモとまぶしい笑顔を。
- 5、リピーターの客が帰る時には『ありがとうございます』とそつと耳打ち。ただし、2人以上の場合、耳打ちをするのは、どちらか片方だけ。基準はよく話し掛けて来た方とのことだ。

僕には、無茶にしか思えない作戦だ。第一にまぶしい笑顔ってどうすればいいんだ？

源太に教えてもらっていた時なんかはクラスの女子数名が保健室に運ばれて行ったけど、あれでいいのか！？

一緒に運ばれた紅葉に感想を聞いても、『うん……知らない他の

女の子に見せなきゃいけないってのが悔しいよ……かと言って、私も見たら見たで身が保たないし……ああ！』と何やら悩み始めてはつきりとした意見は聞けなかった。

うん、と言っていたので、たぶん、あれで良いのだろう。

とにかく明日は文化祭一日目……頑張ねば……

「あっはっはっは。皆の者、喜べ！ 無事、補習補講は終了した！」

第28話 文化祭前日と僕（後書き）

玉葛（以下玉）「きいさあまあ！！！！　ワラワの出番はどうした！！」

えつと玉葛さん……暗黙の了解は？

玉「知らん！！　有って無いような決まり事なんて棄ててしまえ！！　そんな事よりワラワの出番！！」

一応……冒頭に……

玉「名前だけな。ふざけるな」

でも……

セフィリア（以下セ）「玉葛！　貴様はまだいい方じゃぞ！　妾なぞ名前すら出ておらん。出番を用意するのじゃ！！」

んなむちゃくちゃな……

玉「次回だってワラワに出番は無し！　無いどころか、最近晴信と会話しておらん！　なめとるのか！！？」

セ「そうじゃ。　妾にも出番が無いどころか、大豊だってあまり出番が無いらしいじゃないか。死にたいのかえ！！？」

ヒィィィ

頑張って次回の次回には出します。

大豊だって……

てなワケで次回をよろしく!!

玉・セ「こら!! 逃げるな!!」

第29話 文化祭、苛烈な一日目の朝と僕（前書き）

遅れてすみません

第29話　文化祭、苛烈な一日目の朝と僕

「開会セレモニーも終わった。君たちも分かっていると思うが、後、10分程で、生徒会長から開会の合図があるだろう。まず、確認を兼ねて開店前にミーティングを行う。今日の目的は客寄せだ。一芸スタッフは圧勝されない程度に負け。キッチンスタッフは出し惜しみ無く愛想を振るまき、ついでにこのサービス券をバラまくのだ！！ スタッフ総出でリピーターを増やすように努力するように！！ いいか？

我らは、利口な狩人なのだよ。罠を仕掛け、何食わぬ顔で獲物を追い詰め、仕留める狩人なのだ。今日は耐える日なのだ。罠を仕掛け、獲物を探すそんな日なのだ。チャンスは来る。必ず来る。例えば、なくとも私が必ず作ってみせる！！ だから今日は耐えてくれ、心血を賭けてくれ！ 皆、私に付いて来てくれるか！？」

「……うをおおお！！ のっぼっる！ のっぼっる！ のっぼっる！ のっぼっる！！」「……」

「龍……」

「佳織、共に頑張ろうではないか」

「はい」

「……」

「バカ、龍。みんなが見てる」

龍の演説に湧き上がる歓声。

その中で手と手を取り合う龍と設楽さん……映画とかで有りそうなシーンである。特に独裁者が出て来るやつに……。

てか、設楽さんキャラ崩れ過ぎじゃありません？

あと、紅葉さん。さっきから『ハルと……ハルと……』ってブツブツ言っています、一体僕と何なんですか！？

『ピンポンパンポーン』

放送が鳴りだす。

ついに時間だ。

さっきまで湧き上がっていた龍コールが消え、静まり返る教室。

『ええっと、先ほどの開会セレモニーの際にも挨拶させてもらえました、生徒会長の楠野春日くすのかすがです。ただいまより、各クラスの開店して下さい。ピンポンパンポーン』

放送が終わる。

「くくく。あぁっはっはっはっは！！ さっ生徒会長殿から合図があった！ 皆の者よ！ 準備はいいか？ 一芸茶屋開店だ！！」

「くくくくはい！ 店長！！」「くくく」

龍のかけ声により、一斉に配置に付くクラスメートたち。

正直に言つてこの一芸茶屋のシフトはおかしい。

午前と正午と午後で区切られているのはいい……だが、僕のように役職に兵器と付く面々にはそれが適用されていない……。

1日中……いや、3日間ずっと一芸茶屋の為に働かされるのだ。

それを、今、つい今さっき教えられたのだ。

無論、そんなバカな事を言っているのは加西なわけであつて、僕の隣で放心状態になっているのが『文化祭楽しみだね。私達のシフトどうなってるのかな？ ねっハル……い、一緒にまわる？』と満天の笑顔で今さっきまでハシャいでいた紅葉なわけで……。

ちなみに兵器と役職に名前がつくのは、一芸スタッフほぼ全員と、
【対女性客用接客兵器】の僕、【対男性客用接客兵器】の設楽さん、
【客呼び込み用接客兵器】の源太、【対退室願い客用接客兵器】の

大豊などと言った一部のホールスタッフだ。
キッチンスタッフが羨ましい

「……ゆるさない……ゆるさない……ゆるさない……」

……ええっと、人間、本当に怒ると静かにゆっくりと、それでいて激しく怒るそうです。

だから……やめてあげよ？ 紅葉。

「ふごおっ！！……くるし……はるの……ぶ君……たす……けては……く……れまいか……？」

紅葉に首を絞められ、早くも真っ青になり、今にも抜けてはいけないものが抜けそうな加西。

それぐらいにしてあげてよ紅葉。

設楽さんも珍しく慌ててるからさ。

僕は、紅葉の肩をぽんぽんと優しくたたく。
それで我に返った紅葉は加西から手を離し。

「はっハル」。だって、だってね、あのバカが悪いんだよ？ 悪くないよね」

よっぽど頭にきたのだろう。まだ、少し混乱しているみたいだ。
涙目で僕にすがりながら、小さい子のように言い訳をする。

分かってるよ、分かってる。

全面的に加西が悪いから。

そう思いながら、紅葉の頭を撫でていると、紅葉は完全に我に返ったようで顔を赤くして照れているようだった。

「けっけほっ……紅葉君の気持ちはよく分かった……私とてこんな事で死にたく無いので……けほっ……少々もったいないが、君にも休憩時間を割り振ろう……けほっ」

死にかけてもなお偉そうな上に、演技掛かって怪しい。

紅葉も信じられ無いのか、ジト目で睨みながら。

「ホント？ …… もちろんハルもだよな？」

「うう…… 命には代えられまい。晴信君にも認めようではないか」
命って…… どれだけビビってるんだよ。

「嘘だったら、次は本当にもぐから」

もぐって何する気！？

「分かった。約束しよう」

加西、約束は脂汗流しながらするモノではないと思うよ？

「…… まあ、タダでは休ませはせんがな……」

おおい、今、ボソツと怖い事言わなかったか加西！？

「何か言いたい事でも有るのかな？ 晴信君。まあ無いのなら静かに聞いてもらいたいのだが。ああ……。皆よ！！ 多少予定を変更しざるえなくなってしまった。だが、安心しろ！ 現実とは元来、予定通りに行かないものだ！！ 予定とズレてしまったのなら、その度に、予定を変更すればいいのだ！ ゆえに、この予定の変更はある意味予定通りなのだよ！ 君らに少々負担が大きくなるかも知れないが、予定を少々早める事にした。始めから全力疾走をするぞ！！ なに、不安に思うことはない。

君らには、それを成し遂げる事のできる力があるのだ。

何度となく言っているだろ？ あれは嘘でも虚言でもないのだよ。

私は事実しか語らないのだぞ。さあやるぞ。一年E組の午前スタッフの諸君！ 今こそやる時なのだ！！ 見返してやるのだ！！ そして、逆に見下してやるのだ！！ 今、頑張らなくてはその願いは叶わんぞ！！！！ 作戦コードG・Y・M・N・G・Sを発動する！！ 皆、準備にかかれ！！ そして、尊い犠牲に哀悼の意を……

……

「…… はい！ かしこまりました！ 店長！！」

何たる…… クラスのみんなが涙流しながら気合いに燃えてるよ……
あれ？

今って感動するところなの！？

クラスメートを感動させた張本人はおもむろに、いつの間にか存在する無線機らしきモノを手に取り。

「ああああ。マイクテスト。マイクテスト。異常なし。文化祭を楽しんでいる生徒諸君。私は一年E組で行っている一芸茶屋の店長。加西龍だ。たった今より、祝！ 開店全品90% off を行いたいと思う。サービスとして、【古山紅葉の頭撫でれる券】と【日出川源太に囁かれる券】をお配りしたいと思います。券はなくなり次第ごめんの限定品ですので、こぞっていらしてください」

は？

加西の声が校内中に響く……

てか、【紅葉の頭撫でれる券】ってなに？

「加西！！ 私聞いてないわよ！！」

「押さえたまえ」

クラスの男子（体格が無駄にいいやつ）5人がかりでやっとの事で紅葉を押さえ付ける。

「紅葉君、コレは条件だよ。君たちに休憩時間を割り振るためのね。ちなみに時間としては午後の時間丸ごとだ。悪くはないだろ？」

「午後全部！？ ホント！？」

「なんだろ……嫌な予感がする。」

「本当だとも。ただ、後一つ条件があるがいいかね？」

「な、何？」

「校内を移動するときはこの店を適当に宣伝してもらいたいのだよ。簡単だろ？」 とてつもなく嫌な予感がする……。

「それぐらいなら……」

「なら、この件の事も承諾してくれるね？ 晴信君と校内を移動するため」

「何だろ……」。

「いいわ。やってあげようじゃない！！」

「そう言ってくれると私は思っていたよ。さっ、早速お客様がいらした。お出迎えをしろ！」

無性に、加西の笑顔を見ていると悪寒やらなんやらで嫌な予感がする。

考え過ぎならいいけど……

ちなみに、第一号お客様が、言っちゃあ悪いとは思っけど、脂ぎったデブで小声で『もみちゃん……もみちゃん……』とつぶやいていた、ということと、そのお客様に撫でられただけで紅葉が気絶しかけたということは、ここでは伏せておこうと思う。

第29話 文化祭、苛烈な一日目の朝と僕（後書き）

セフィリア（以下セ）「まだ、妾らの出番がないの」

玉葛（以下玉）「頭の中ハッピーさんにしてやるか？」

あんに脅さないでください。

玉「ほ……。自分は鳥だっと思ってスカイダイビングすると、自分は魚だっと思ってスキューバダイビングするのどっちがいい？」

ああもう大丈夫だから！

笑顔で死に直結すること言わないでよ。

ちゃんとイチヤイチャするから君たちは。

次回予告お願いしますよ。

玉「嘘だったら、自分の体は鋼鉄の体とか思い込んだ上でいばらの草藪に入って貰うから」

地味に怖！！

痛いよ？ それ、存外に痛いよ！？

セ「とりあえず、予告じゃな……………楽しみにしろじゃ」

なっ！！！！

何やってんの！！

真面目にして！！

手抜きみたいじゃん

セ「妾が出ないんじゃ興味無いのじゃ。勝手にしろ」

玉「右に同じ」

この子ら悪魔や

本当に次回をお楽しみに
しくしく

第30話、文化祭、ちょっと過激な1日目の午後と僕、（前書き）

大変長らくお待たせしました。

第30話 文化祭、ちょっと過激な1日目の午後と僕

「うなああああ……はりゅ」

簡単に説明します。

時間、13:15。

場所、教室でか一芸茶屋の裏方、というより一芸茶屋のキッチン。状況、紅葉の有らん限りの尊厳とかなんか色々を傷つきまくった様子で、僕にすぎり付くように泣いています。

商品を破格の値段でご奉仕するばかりか、クラスメートを生け贄にするような謎の券を配る作戦……【G・Y・M・M・G・S】。

それは……。

G、激。

Y、安。

M、紅葉。

N、撫でれる。

G、源太。

S、囁く。

と言う作戦らしい。

限定とか称して配る券、しかもそれなりに知名度のある二人の名前を使った券で客を呼び、値段で客を惹き付け、券でまた客を呼び戻す。

というものらしいが、ここまで上手く行くとは思わなかった……。

なんと言つか……ダメなお兄さん方多かったと言っわけ……。

あと……。

「加西、コレどこに捨てればいい？ あと、どうやってこんなに作

ったの？」

愛に飢えたお姉様方も多かったみたいで……。

源太が持ってきたのは、使用済みの券がパンパンに詰まったXLサイズのゴミ袋である。

源太の役目は校内をねり歩き、一芸茶屋を宣伝する、そのため、押し寄せてくる愛に飢えたお姉様の持つ券を入れるゴミ袋を持っていたようだ。

愛に飢えたお姉さんも多かったというわけなんです。

「源太君、お勤めご苦労。なかなかの盛況ぶりだな。券は、満に永遠と作らせていただけたから安心したまえ。処分は私がする。ちり紙交換にでもだしてトイレトペーパーに換えてもらうさ」

「そっか。まあ俺としては、楽しかったからいいよ」

「そうか、それは良かった。しばらく休んだら、また頼むよ」

「あはは、分かっているよ。任してくれ」

今にも、『おぬしも悪よのお』『お代官様ほどでは』みたいな会話が聞こえて来そうな笑顔の2人……。

なにか無性にムカつく。

しばらくして、加西の横に控えていた設楽さんが、スッと加西に話しかける。

本当に秘書のようだ。

「龍、そろそろお時間です」

「何！？ もうそんな時間か？ 満、後は頼んだ」

加西は教卓の上にメモ用紙を残し、教室を出ようとしたが、直前で止まり、僕の方へと振り返った。

「そうだそうだ、忘れていた。晴信君。コレを君に渡しておかなくては」

渡されたのは“一芸茶屋”と彫られたスタンプ（朱肉の要らない

やつ)。

一体なんなんだ？

「ちつ。面倒ごとばかり押し付けやがって……」

舌打ちが聞こえたので振り向くと、津田が苦虫を噛んだような表情でメモ用紙を見ていた。

どうしたのか気になったので、声をかけようとした、その時。

「ああ！！！！ ハル急いで！ どうしても一緒に行きたい所があるの！！！」

はあ？

問答無用で僕の腕を掴み走り出す紅葉。

しばらく走った所で不意に放送が流れる。

だがそれは、学校の校舎にもとより備え付けられたそれでは無く、前日にカリスマ変人が有能変人(男)に指示をして構内中に付けさせた、特定クラス専用の放送である。

無論、聞こえてくる声は、疲れてるとも諦めてるとも取れる声で、そんな声をだすのは、我がクラス1の苦労人と言って過言では無いんじゃないかと密かに同情している有能変人(男)こと、津田満のものだった。

『ああ……、一年E組一芸茶屋です。現在、私用で不在の店長加西龍に代わりまして、副店長代理の津田満が……って副店長代理ってなんだよ！？ どんだけ曖昧な地位なんだ俺は！！……ブッン！

……』

キレた。もちろん二重の意味で。

たぶん、加西の渡したメモに書いてあった文なんだと思う。

津田も大変だ。

『大変お聞き苦しい所、申し訳御座いません』
再開した。

『ええ……、用件と言いますと、はあ……』

何だか諦めてるで、枯れかけている津田の姿が目に見えん。

『ええ、ただ今より一芸茶屋のサービスチケットタイムでございます。今より、一芸茶屋で飲食なされますとスタンプカードが無料で配布されます。そのスタンプカードに、校内のどこかにいる安森晴信の持つスタンプを押してもらってください。すると、そのスタンプカードはある券の引きかき券となります。そのある券とは……』
【古山紅葉三分間なで放題券】と【日出川源太一分間囁かれ券】となっております。ご来店のさいスタンプの押されたスタンプカードを提示した上で何か一品をご注文頂きますと券と引き換えとさせていただきます。なお 』

はああ！???

何だそれ！？

なにかパワーアップしてるぞ！？

「ハル、こんな話し聞いてた？」

紅葉が弱々しい声で聞いてくる。

僕にとっても寝耳に水。全力で首を横にふる。

「……ほん……と？」

今にも泣きそうな目で震える紅葉。

午前中のあれを思い出しているのだろう。

なんで、そんな大切なことを本人に伝えて無いんだ……！！
はっ！

加西と源太の不吉な会話……。

『そうか、それは良かった。しばらく休んだら、また頼むよ』

『あはは、分かっているよ。任してくれ』

あの会話……絶対に二人して『加西（源太くん）が知らせてくれるもんだと思った』とか言い訳するつもりだ……！！
完全にはめられた……！？

あの二人を相手に舌戦で勝てる気がしない。

あの時点で気付くべきだった……。

畜生お……。

「ハル……」

僕が裏切りと我が未熟さへの後悔という暴力に心がくじけそうにいると、クイクイと紅葉に服を引っ張られた。

「逃げよ……。スタンプなんか捨てて逃げ切る？　ねっ？　ハル。

……ハルう……」

弱々しい声。だけど、決意のある声だ。

その目には、今にも涙が溢れんばかりに溜まっているが、溢れるのを必死に堪え、強く僕を見つめてくる。

負けられない。

ダメなお兄さん方や愛に飢えたお姉さん方には負けられない。

と強く思った。

そして……これ以上、紅葉を怖がらせてなるものかと……！

『ああ……、ここからは業務連絡。晴信、古山。龍からの伝言だ。

「逃げるのは一向に構わないが、ちゃんと適度に捕まるように。後、スタンプを捨てた所で結局そのスタンプを拾われたらスタンプを押されたスタンプカードが出回る事は必至だと思っぞ。スタンプが捨てられているのでないかという一抹の希望を持って、スタンプを探しながら晴信君を追いかける者も居るだろう。だから、普通にもって逃げた方が良くぞ」との事だ。ああ……、なんだ、その……頑張れぐああ……！

読まれてる！

そして、心中察するよと言わんばかりの津田の同情。

涙が出てくよ。ありがとう。

そしてどこからか、ドタドタというけたたましい足音。

さっきの放送を聞いたダメなお兄さんや愛に飢えたお姉さん方たちだろう。

早い。

こんな事にコレほどまでに迅速かつ高い行動力を見せなくても…

…。
てか、冗談抜きにヤバイ！！

逃げなくては。

僕は、加西の伝言で心を碎かれボロボロ泣く紅葉の手を取り走り出した。

僕らは無事にこの日を終わられるのだろうか。

僕はそんな夢も希望も小さい事を考えながら決意した。

加西の伝言は無視して、絶対に逃げ延びてやる。そして、僕がこの手で握る紅葉の手とスタンプだけは、絶対に離さない！

第30話 文化祭、ちょっと過激な1日目の午後と僕（後書き）

玉葛「出番……」

セフィリア「出番……」

あの1日目コレで終わりだよ……

玉「本当か!？」

セ「まことか!？」

だから次回予告お願い

玉「うん」

あの次回予告

セ「わかつている」

あの次回

玉「わかつているわかつている。」

黙れ」

聞いちゃいませんね……。

てなワケで次回予告はお休みです。

でもお楽しみにっ……!

第31話 文化祭、2日目の朝と僕（前書き）

あとがきに作成秘話的な話あり
読みたくない人は読まないでね

第31話 文化祭、2日目の朝と僕

「晴信、起きろ」

優しい声……。

でも……、眠い……。

寝かせてくれ……。

「晴信！」

揺らさないでくれ……。

「起きろと言っのが聞こえんのか！」

聞こえてます……。

でも、寝ますから揺らさないでください……。

「そうか、よく分かった」

揺れがとまる。

「……晴信はワラワが嫌いなんだな……そうか……うつ……分かつた……出ていく……」
「はあ!？」

玉葛の言葉に驚き、飛び起きる。

そして、即座にアイアンクローを食らう。

「晴信、今楽にしてやるからな……」

えっ……玉葛？

ミチつと玉葛の手に力が入る。

「うわああああ」

とつさに叫んでしまった。

だが、予想していた痛みはない。

と、言うか、頭がかなりスッキリしている。

さっきまで僕を蝕んでいた睡魔が一切感じられない。

茫然としていると玉葛から声が掛かった。

「な、なんだいきなり叫んだりして。こっちが驚いたぞ。それより

どうだ？ 眠気はスッキリしたか？ 今、力を使って一時的に眠気を感じなくしてみたのだが」

楽にってそう言うこと……。

って、納得してる場合じゃない。

今出てくって……。

「出ていくって言うのは嘘だぞ。安心しろ。輝美さんがそれを言う」と飛び起きると教えてくれたんでな。試してみた」

試してみたって……輝美さん……。

「うん。効果できめんだな」

だとしても心臓に悪い。

玉葛の肩に手を置き、ジッと見つめ、目で訴える。

「あっ……ああ……なんだ、その……急に見つめられたら恥ずかしいぞ……」

……っ、伝わらなかった……。

「いいいいいそげ。学校に遅れるぞ。紅葉は、なんだかクラスの女子に呼ばれたとかで慌ただしく出ていったぞ？ 『かゝさゝいゝ』って唸るように言いながらな。とりあえず下で待ってるからな」

早口でそれだけ言うのと玉葛はそそくさと部屋を出ていった。

チラッと見えた玉葛の顔は真っ赤だった。

僕は急いで支度をし、家をでた。

横には玉葛。

「今日から一般の人も行つて良いのだったよな」

朝食を食べてる間、一度も目を合わせようとしなかった玉葛だったが、今はちゃんとこちらを見ている。

それはいいんだが、一般の来場は10時から。

今はまだ8時。

「ワラワな、少し寂しかったんだぞ。だって晴信、昨日一日中紅葉と手を繋いで学校中を見て回っていたんだろ？ 源太から聞いたぞ。だからな、だからな。」

はあ？

源太の野郎、適当な事を……。

あの後、結局逃げ切れず……色々あって……色々あって……心身ともにボロボロの状態で家に帰り付いたんだ……。楽しみだなんて……夢のまた夢の話だ。

ガチャン

と、突然聞き慣れない音と右手に違和感。
ゆっくりと視線を落とす。

玉葛さん……どういったお考えで？

「おっ、気付いたか？ コレは離れ離れになりたくない相手と自分を繋いでおく道具だそうだ。源太が貸してくれたぞ」

………焼く。

「は、晴信？ か、顔が怖いぞ………どうした？」

別に何でも無いよ………ただ、源太の目を………いやいや、何もしいと思うから安心して？

と僕は優しく玉葛に微笑みかける。

「……言にくいのだが………安心しろと言う意志は伝わって来るのだが………その………その笑顔は人をとて不安にさせるぞ。って晴信！？ ちょっはや、まっ。晴信！？ 目が………目が………いつもの優しい目はどこにいったのだ？？」

とりあえず、学校に着いて、まず、やったことは、光線と閃光球を応用を利用して指向性の高い閃光球で源太の目を焼くことだった。そして、冷静になった僕はあることに気付く。

だが、気付くのが遅すぎた。

「おい、晴信！ 誰だその少女は……！」

「きゃああ！！ なになに？ 晴信君とどんな関係？ てか、手錠

って……ホントどんな関係なの？」

「名前なんて言うの？ この後一緒に回らない？」

手錠付けっぱなし「クラスに玉葛を連れて来てしまった」クラスメイト達の質問責めに合うという簡単な公式が出来上がってしまった。

そして……。

「た〜ま〜か〜？」

紅葉登場。

「た〜ま〜か〜。何でいるの？ って居るのはそんなにおかしくないか〜。でもさあ〜その手はなに？ あはは、私には手錠が付いているように見えるのだけど〜？ ホント、それなに？」

しかも、手錠のせいで少々混乱気味のようです。

「あはは、おかしいよね。今日も朝からハルと一緒に登校しようと思ったら。搬入がどうのこうのでかおりんに呼ばれるしさあ。ちょっと目離したらそれ？ それって協定違反？」

目が据わってます。

「はんっ」

紅葉の怒りを鼻で笑う玉葛。

「協定違反は紅葉だ。昨日起きた事を妾は源太から聞いたぞ。しかも朝、お前が出た後にな。だからコレは妥当だと妾は思うぞ」

「うつうつう……仕方ないかも……連絡義務」

紅葉はしぶしぶといった感じで納得する。

協定ってなに？

連絡義務！？

君ら一体なにしてるの？

「なんか、納まりが悪いから源太をける！ コイツが余計な事言わなきゃ良かったわけだし」

紅葉……それは八つ当たりなのでは……。

源太は紅葉に蹴られ、廊下へと転がっていく。
でも、いい気味だ。

と僕が密かに笑っていると玉葛が手と言つか手錠を引つ張った。

「晴信……妾が嫌いなのか？ 妾と繋がられてるのはいやなのか？」
うがっ！！

玉葛の目尻には小さな涙……。

いや、その……玉葛が嫌いな訳じゃなくて方法がね。分かる？

方法があれすぎるだよ？

「くすつ。そう慌てんでも分かっている。少しからかったただけだ。

晴信がこういう反応をするのは源太から聞いて分かっていたさ。だから安心しろ」

玉葛が優しく微笑む。

ちよつと……こつ……綺麗だ……。

……だあ！！

つてか源太は一体何がしたいんだ。

えっ何か？

目が焼かれる事も予想済み！？

「いや、さすがにそこまでは予想できなかったよ」

えらく復活が早いじゃないか。

「紅葉に蹴られて廊下に転がり出たところで大豊に無理やり覚醒させられたんだよ。ああセフィリアさんのおかげでびしょびしょになりながらだけどね。ちなみにまだ、目はしょぼしょぼするよ」

あははと笑う源太。

心なしに笑顔がちよつとひきつつている。

「やあやあ君たち。コレは一体何の騒ぎだね。私にも分かりやすい説明してくれる者はいないのか」

めんどくさいのが来た！

今日もまた、ヒドい目にあうのだろうかと不安にさせてくれる奴が来た！

このクラスのトラブルメーカー！

その名も加西龍！！

ってわざわざ言う必要もないか。

第31話〈文化祭、 2日目の朝と僕〉（後書き）

毎度、お騒がせ（？）な爆弾蛙です。

本日はちよつとだけ作成秘話的なお話を一つ。

読みたくない、聞きたくないという方は無視してください。

安森晴信について。

名前は安倍晴明と信太の森からちよいとしつけいしました。

二つとも狐さんとは関係が深いんですよ。

コンセプトは「モテモテで端から見たらムカつくけど憎めない奴」です。

上手くいっているといいのですが……。

と、ここで気付いてくれると嬉しいのですが、晴信の最大の特徴「無口」がコンスタントには存在しないのです。

なぜ、無口になったのかと言うと、制作計画立案中に『晴信がしゃべるとなんかなあ』と思ってしまったのです。

三角関係が絶妙なバランスで仲良くみたいな関係を作りたかった僕としては晴信がしゃべると都合が悪い気がしたのです。

だから、晴信を無口にして、紅葉と玉葛に強引にかつ無理やりにつ張って貰う形で話を進める事にしたのです。

あと、主人公が無口って珍しくない？ てか、地の文をやらせればバランスも取れんじゃない？

という考えもありました。

実際にやってみて壁はありました。

思いの外頑張ればできちゃうもんなんです。

書いている本人である僕自身もたまにうざいなあと思う設定ですが成功だと思ってます。

本日の作成秘話的な話はここまで。

何か聞きたい作成秘話的な話がありましたら遠慮せずどうぞ。

ちなみに次回は、文化祭なら外せないコンテスト系のイベントへの突入編です。

どんなコンテスト何だろうね〜。

楽しみですねえ

では長々と失礼しました。

第32話 文化祭、2日目のとんでもイベントと僕 (前書き)

あははは。

遅くなりました？

第32話 文化祭、2日目のとんでもイベントと僕

思いの外、加西からの追求やらなんやらは無かった。そればかりか、僕と紅葉に午前丸々休みをくれた。

怪しい……。

怪しいものにも、あの駒が揃った事を喜ぶ黒幕の様な顔が頭から離れない。

そして玉葛はというと、未だ手錠に繋がれたまま。

「へえ、それって花嫁修行ってやつ？」

「すごいすごい。私料理なんてダメダメだし家事なんて……ぜったい……たいに無理！」

「ああ私も尽くす女目指してみようかな……ほら、ヤマトナデシコ？　ってやつ？」

クラスの女子達に根ほり葉ほり聞かれていた。

対して玉葛も。

「そうだな。だが……葛葉姉様が言うには『押し掛け女房修行』らしいのだから。葛葉姉様もそれで亭主関白な夫に頭を下げさせたらいいぞ」

「料理はやらないとマズいぞ。男心を掴むには料理が一番だと葛葉姉様が言っていた。

例えばそれが出来ない料理であろうと努力する姿を見せる事が重要らしい」

「ただ尽くすだけではだめだぞ。良い尽くす女とは、男に『アイツが居なきゃ俺はダメなんだ……』と思わせる女だそうだ。だから葛葉姉様が編み出した『押し掛け女房修行』が必須なのだ。なんなら初歩的な所から少しずつだが教えてやるか？　まだ、未熟者の域を出ていないが、一応免許皆伝した身だ。たぶん大丈夫だと思うぞ」

とヤケに生々しい……てか男子には怖い内容で女子からの質問に

対して丁寧に答えていた。

ふと、周りを見れば女子達が続々と集まって来ている。

内訳としては、真剣そのものの顔で玉葛の言葉に集中している女子が数名。ものの参考にと興味本位で寄ってくる女子十数名。興味が無いという事をアピールしながらそわそわと寄ってくる女子がほんの数名である。

とくに、先頭に切り込んでくる真剣な女子達と後ろの方でそわそわとしている女子達からは、あんに『私達、男に振り回されてます』という切実な心の声が聞こえて来るような気がする。

あつ、設楽さん発見。無論、真剣な女子の軍団の中でだ。

切実なんだね……ちょっと涙が……。

「失礼します。貴方が安森晴信さんですね。それと玉葛さんと古山紅葉さんで間違い無いですね」

突然声を掛けられた。

黒スーツに黒のサングラスを掛けた学生に……学生だよね？

「詳しくは話せないがご同行お願いしたい。と、言うより、連行させてもらう」

と自然な動きでタックルをしてきてくれた。顔面に！

ああつ……星が見える。

僕は、けたたましいドラムロールで目が覚めた。

「レディー……スエーデンジェントルメ……ン。本日はお忙しい中、お越しいただき誠にありがとうございます」

目の前では、スポットライトを浴びた取り立て特徴の無い男子学生が、眼前に集まる大勢の観客に向けて自己紹介をしていた。

「本日の司会は、わが校のお耳の友として有名な、狐禮高校放送局部部长こと天枝幸司郎あまじしゅうじろうが務めさせて頂きます」

「部長部長」

上機嫌で自己紹介をする天枝さんの脇に舞台袖から小柄な少年が現れた。

「部長部長。訂正しますが、『放送局部』ではなく『放送部』です。あと、誰も部長の事を『お耳の友』なんて思って居ません。むしろ『耳汚し』と思ってます。お間違えのないように」

と少年は天枝さんに真顔で言うと素早く舞台袖に戻っていった。
てか、自分の部の名前を間違えるってどんだけよ。

ちなみに、少年が言った事は天枝さんが持つマイクにより会場中に響いていたりする。

それでも、天枝さんは恥じる事などせず。

「さあ、誰が決めたか、会長が決めた本日のメインイベント!!
『禮高一のベストカップルは誰だ選手権』お前らんかただのバカ
ツプルだあ!!! (泣)』の開催だあ!!!」

……………いま何て？

第32話 文化祭、2日目のとんでもイベントと僕（後書き）

爆弾蛙です

源太君、次回予告よろしく！

源太（以下源）「はあ……」

あつ……どうしたの

源「今日の俺……踏んだり蹴ったりだったなあって」

それは……

源「別に目的は達成できたから良いんだけどさあ」

いいんだ……

源「次回予告だろ？ ふつ、する必要なんてないだろ。分かりきった事なんだから。あの三人の絆が確かめられるんだろ。あはは。楽しみだね。どんな競技があるんだっけ？ ええ〜つと、『伝えて伝わってツーカーなカップルはだ〜れ』だっけ？ あと」

だああああ……！！！！

ネタバレはやめて下さい！

やられ役ポジションには絶対に置きませんから許してえ〜

源「俺は、別にそこまでして欲しいだなんて言っただけ……してくるって言うならして貰おうかな。バレる嘘の嫌いな爆弾蛙さ

ん

あゝあゝ……

やられた……

えつと次回をよろしく

第33話、文化祭、伝えて伝わってツーカーなカップルだ、れだと僕、（前書き

高校生時代……こんなイベントやりたかった……
無論スタッフのポジションで……

第33話 文化祭、伝えて伝わってツーカーなカップルだ〜れだと僕〜

「『だああ!!』」と盛り上げたところで、このイベントの説明だ」
僕は今、どうしようもなく訳の分からないイベントに巻き込まれてるようだ……。

「まあ、概要としては題名のままベストカップルもといバカップルを決めるといういたってシンプルなモノ! 目一杯ノロケちゃってもらって勝手にバカップル認定をしまいましょう!」

いや、イベント自体は司会の天枝さんの言う通りにいたいって程に意味が伝わって来るが……何故に僕らが!?

「では、本日の主役達を紹介しよう!! 我ら『バカップル認定委員会』は 「部長部長、『ベストカップル認定委員会』です」

事前に自薦他薦を問わずカップル達を募集をした所、多数の応募がありました。幸せだなあこのお!! そこで我らは、自薦の者を、書類審査と昨日行われた選考会で二組、他薦の者は、推薦者と共に身辺捜査をし、意外性、オモロ性などなど、独断と偏見で凝り固まった選考基準で三組。計五組のカップルを選ばせていただきました。ではでは、一組目のカップルをご紹介します。照明さんよろしく〜!」

バンツと言う音と共に、僕らとは反対側の端が照らされる。

「どこにでもいる。確実にどこかにいる。正にカップルバカップル。二年B組、鈴木正也すずき まさやと二年B組石本真亜奈いしも まあなカップル。昨日の選考会ではペアのTシャツ、お揃いのお弁当。だて食う虫も食わない痴話喧嘩を見せてくれた強者バカップルだ! ただ、ネックなのはどこにでもいる特徴の無いバカップルと言うことだけ! 頑張れ!」

と天枝さんの紹介に照れながら応える鈴木さんと石本さん。

本当にどこにでも居そうなカップルだ。

「続きして!! コレより先はかなりアクの強いカップル達だあ!

！ 心して行こう！！ 二組目のカップルは、抜群のコンビネーションと言つより尽くしっぷり。その息の合った様は金婚式を迎えた老夫婦並み！！ 愛を囁き合うのは2人っきりの夜だけ！ 一年F組加西龍と一年F組設楽佳織カップル。なんとこの少女の少年への溺愛っぷりで並み居るバカップルをドン引きさせ、更にはこの少年の少女への齒の浮く台詞も他のカップルから奇妙な物を見るような視線と羨望の視線を根こそぎ集めたと言つ」

パンツと照らされるは加西と設楽さん……出てたんだ……てか何やってんの！！

「これから先は他薦で選ばれたカップルです。まずはこのカップル。まだ居たんだ生息してたんだ！？ オモロ性一位通過の天然記念物級カップル。一年G組ギヤル男の山田有弥やまたゆうやと三年A組汚ギヤルの佐藤麻実さとうまみカップルだ！！ マジにまだ居たんだ……すげえ」

あれって本物！？

てか、何故に誇らしげなんだ？

「続きまして、意外性莫大！！ 超絶ビックリ！！ 我らの暴力英雄こと橋槻大豊に外人美女の彼女がいた！？ 一年F組橋槻大豊と来場客のセフィリアニクス「ウンディーネさんカップルだあ！！」

大豊お前までえ！！！！？？？

「最後は……男のロマンを実現したカップル……厳密にはまだカップルでは無いらしいがそんなのどうでもいい！！ 男の夢……美少女2人に寄り添われる……羨ましい！！ そのポジションをよこしやがれと心の声がただ漏れになっちまう、そんなカップルだ。一年F組安森晴信と一年F組古山紅葉と来場客の九尾玉葛ちゃんカップルだあ！！」

パンツとライトアップされる僕ら。

紅葉はノリノリで手を振り、玉葛は頬を染め軽くうつむき加減でいる。

僕は無論啞然としているしかない。

「ちなみに、優勝したカップルには山海空全てで遊べる日本最大級のアトラクションテーマパークと誉れ高い『海千山千アイランド』の3日間フリーペア券と宿泊券だあ！！金がかかってるぜ」

ホントにどんだけお金をかけてるんだ！？

同意を求めて紅葉の方を見ると、

「ハル！！死ぬ気で頑張ろ！！ホントは昨日の選考会からでるつもりだったけど……結果オーライだね」

目を輝かせる紅葉がいた……。

そんな紅葉の言葉に反応してか玉葛が、

「やはりそんな事を考えていたのか！？ルール違反だぞ」

「そんな事ないもん。ちゃんと言ったもん『校内の出店と一緒に回る』って伝えたもん。嘘は言ってないもん」

「うぬぬぬ……まあ良い。今日この場を借りて決着をつければよい」

「はん！望む所よ。どっちの晴信とのラブラブ度で優勝できたかで勝負よ」

かなり思わぬ方向へ話が行っていますが……優勝……する気なんですね……。

「ではでは、第1の種目です」

天枝さんの声に反応して、また、けただましいドラムロールが鳴り響く。

「題して『黙って伝えるツーカーなカップルはだーれだ』です」

「部長部長。『伝えて伝わってツーカーなカップルはだーれだ』です。間違えないでください」

また、あの少年の訂正が入る。

諦めたのかどうしたのか、直接言うのではなく、完全にマイクを使って伝えている。

「岸堵くん。絶対にこっちの名前の方がいいよ。まあいいけど。では、気を取り直してルール説明です。ルールは簡単！男性が言葉を使わずに女性に紙に書かれた物を取りに言ってもらいます。当

然女性は紙に何が書かれているか見てはいけません。男性も『あれ』『それ』ぐらいまでなら言って構いませんが、ジェスチャーや実物を指差するような行動はとらないようにしてください。では、岸堵君例の物をお配りして」

「はい」

と舞台袖から、さつきから何度も天枝さんの言葉を訂正していた小柄な少年が出てきた。

その後ろに黒スーツの男が数人ついてきている。手にはイヤホンとアイマスク。

「念のため、女性陣にはこれらを付けてもらいます。……岸堵君、お題の紙を渡して」

「はい」

と天枝が女性陣がみなイヤホンとアイマスクをしたのを確認すると岸堵君に新しい指示を出す。

岸堵君も手際よく二つ折りの紙を配っていく。

紙には五つの物名前が書いてある。

「男性の皆さん。お題は覚えられましたかあ？ 一応不正防止の為紙は回収させてもらいます。岸堵君回収して。ちゃんと誰がどのお題かわかるようにメモとるかしてね」

「はい」

どうやら全員違う物らしい。

「はいはい。皆さん。聞いた通り、皆さんのお題は1カップルごとに違いますから頑張ってくださいあい。では、男性陣、女性陣のイヤホンとアイマスクをどっちゃって下さい」

言われた通り玉葛と紅葉のイヤホンとアイマスクを取る。

すると紅葉が勝ち誇った顔になり、玉葛の表情が軽く沈む。

「私の勝ちね。この勝負。さっハル、お題を教えて！！」

ぐっと顔を近づけてくる紅葉。

ええっと取りあえず、ヤカンにまな板、生け花に使う剣山とキャ

ツプの無い使えないマジック。最後が青い星の書かれた風呂敷。

……… つて、伝わるか！！！

こんなの！！

伝わったらその人エスパーかなんかだよ？

「ハル、確認するよ。ヤカンとまな板と生け花に使う剣山とキャップが無くて使えなくなったマジックと最後が青い？ 星の？ 書かれた？ 風呂敷？ で合ってる？」

つ、伝わってる……… も、紅葉……… 貴女いったい何者？

「あってるんだね。じゃあ取り行って来るから」

ささつとお題の置かれているテーブルに走って向かう紅葉。

他の人達はまだ伝えて（？）いる最中だと言っの……。

「紅葉は凄いな………」

悲しそうな声で独り言のような声で玉葛が呟いた。

「ワラワは四つしか分からなかった……。最後の一個がどうしても分からなかった」

それでも十分凄いと思いますよ。

四つ目のキャップの取れたて使えないマジックが分かったただけでも凄いつて。

僕は慰めるように玉葛の頭を撫でてやった。

いつの間にか玉葛もこちらを見ていた。

多分、僕の伝えたい事は伝わってるだろう。

だって玉葛の表情がさつきより明るくなっているんだから。

「ハル」。持ってきたよ！！」

紅葉はホントに伝えた通りの物を持ってきていた。

無論、結果はダントツの一位。

ちなみに他の人の順位は、以下の理由によってこうなった。

二位、加西設楽さんカップル。

理由、正解数3つ。無難にこなした様子だが、最後の二つが分か

らなかった様子。ちなみに最後の二つは穴の空いたスプーンと白地に黒の斑点のマスクだったらしい。

三位、鈴木さん石本さんカップル。

理由、正解数2つ。良くも悪くも終始普通だった様子。

四位、大豊セフィリアさんカップル。

理由、正解数0。伝わっていたようなんだが、何を持って行けばいいのか分からなかったらしい。時間ギリギリでそばのスタッフに聞く事を思い付いた用だったが、間に合わず、あえなく0個。

五位、ギャル男汚ギャルカップル。

理由、ずっと喧嘩をしていた。当然正解数は0。五位なのはやはり、終始醜い喧嘩をしていたからだろ。あれは痴話喧嘩ではなかった。

この無理難題の伝言ゲームは終了した。

てか普通の人には無理だろコレ!?

次はもつとまともなものでありますように!!

そうでありますようにお願いします。

「次の種目に行ってみましょう!! 第2の種目は……」走って走って私を抱えて走ってマイダーリン。カッコお姫様だっこ希望カッコ閉じる」です」

「部長部長、間違っていないですよ」

な、なにがしたいんですかあんだ達は!!

第33話、文化祭、伝えて伝わってツーカーなカップルだ、れだと僕、（後書き

海千山千アイランド……なんかすげーな

日本にそんな土地有ったっけ？

細かいことは気にしない！！

予告するキャラが決めらんない！！

てなワケで、

次回は走ります。

お楽しみに

第34話　走って走って私を抱えて走ってマイダーリン（お姫様だっこ希望）と

一身上の都合により第34話が消失……続きを待ってた皆様方、誠に申し訳ございません！！

第34話　走って走って私を抱えて走ってマイダーリン（お姫様だっこ希望）と

「怒涛の勢いでルール説明だぁ！！」

と司会の天枝さんが手をあげると、巨大スクリーンが降りてきて映像が映し出された。

スクリーンには『走って走って私を抱えて走ってマイダーリン（お姫様だっこ希望）』と書かれている。

「ルール説明はこのスクリーンで行います。協力は映研部並びにパソ部とアニ部、漫研部です」

と天枝さんの言葉に連動するように画面がかわり『協力、映像究極追究研究部。パソコン連盟活動部。アニメ至上主義同盟部。至高文化漫画研究連合部』の文字が書かれていた。

名前はアレだが、基本やってる事はそんなに変わんないと思う。

……たぶん……。

「ルールはいたって簡単。男が女性をお姫様だっこして、屋上のチエックポイントを通過して此処に戻ってくる速さを競うといったものだ。さっきはちよつとばかり女性が苦勞するものだったからね。男性陣よ漢を魅せろよ！！」

スクリーンには簡単だが、手の込んだアニメーションで天枝さんの説明を映像化して説明していた。

来場者もそのアニメーションを見て驚いているようだ。

舞台袖にはその来場者の反応を見て感無量といった感じで涙する人達がいる。

たぶん、協力した部の人達だろう。

「おおっと忘れてた。この種目、カップル達が普通にこの会場を出て行ってしまうワケなんですが……ご安心あれ！！　我ら放送局部

「放送部です。部長」　の精鋭達による命掛けの生中継があります。準備はいいか！！？」

「…………はっ！！ 我ら放送部中継部隊、命と放送魂と誇りを掛け継ぎいたします」……」
かなり上等のカメラを背負った男達5人と巨大な無線機のようなアンテナの付いた機材を背負った女の人が舞台袖から現れ敬礼をする。

相当訓練されているようだ。

…………何となくだけど…………。

「ではでは、各カップルは準備してください。あと皆さんも道を空けちゃってくださいね」

各カップル達が恥ずかしがりながらお姫様だっこをしていく中、玉葛不敵に笑い始めた。

「ふふふ、紅葉。残念だがお前は此处でお留守番だ」

「はあ？ なんで？」

どうやら玉葛が抱かれる役をやると言い張るようだ。

ワケが分からないと言わんばかりに紅葉も反論しようとするが、
「当然だろ？ 今日のワラワと晴信は手錠で繋がっている」

まだ、付いたままなんです……。

「それにだ…………」

ここで玉葛がもの凄く勝ち誇った顔をする。

「ワラワの方が紅葉より500g軽い」

「なっ！！！！」

玉葛の後ろにバーンっと言う効果音の付きそうな勢いにガーンと言う効果音が背後に付きそうな反応で返す紅葉…………。

そのままゆっくりと肩を落とし落ち込む。

「それにいざという時は、力を使って疲労感や重量感を感じさせなくする事も出来るからな。ワラワ程の適任者はおらんだろ。さっ晴信。お姫様だっこやらを」

なし崩しのだが、玉葛をお姫様だっこをすると、

「なっ！ なななんて、は恥ずかしい格好！！」

もの凄く照れる玉葛。

それを見た紅葉が、

「恥ずかしいなら変わるわよ」

と僕の腕に抱きつきながら玉葛に言う。

「いいいいいや、ワラワが抱かれる！」

恥ずかしいさからなのか少し動揺している様だ。

僕らはすでにスタート地点に列んでいるのだが、紅葉が注意されないということは、僕はこの状態で走らなくてはいけないのだろうか……。

「ええ〜。安森古山九尾カップルはホントム力つくので、その状態で走って下さい」

ちよっマジっすか！？

「文句は受け付けません。よいドン」

不意打ちと言わんばかりのスタートの合図。

完全に出遅れた！！

順位は五位だ！

うつ……地味に走りづらい……。

「晴信、大丈夫か？ 力を使うか？」

「ハル、大丈夫？」

心配そうに僕を覗いてくる玉葛と紅葉。

ここはやはり、天枝さんの言うとおり、男を魅せる所なんだろう。頑張ろう。

と決意を固めたところで順位が変わった。

ギャル男汚ギャルカップルをぬかせたのだ。

すれ違い様に、

「こんなとこでへばってんじゃねえよ。ほらぬかされたじゃん！！
どうしてくれるのよ」

「うるせえブス！ てめえがおもてえんだよ！！ ちったあ痩せろ！ 今すぐ痩せろ」

とまた、醜い喧嘩をしていたのだ。

その様子をカメラマンが何とも嫌そうな顔で撮っていたのが印象的だった。

よし！

頑張ろう！

前を走るカップルは比較的早く見つかった。

と言うよりずっと視界に入っていたしそんなに差は付いてなかったワケなんですが……。

とりあえず、前を走るカップルは加西設楽さんカップル。

なんかいい感じに盛り上がっている様子だ。

「龍……すみません。私が重いばかりに負担を掛けてしまつて……。頑張つてなるべく軽くなりますわ！」

「だ……大丈夫だ。佳織よ。良いから服を脱ぐのを止めたまえ。な、何より力のない私が悪いのだ。愛する者一人抱えて居られない私が悪いのだ。佳織は気にしなくて良い。ただただ、私に笑いかけて居てくれ。それが私の力になる。私のキャラでは無いが……佳織の為、男を魅せるぞ！」

「龍……ああ！！！」

「佳織！！！」

あれ……ホントに加西？

設楽さん？

まあ何にせよ僕らはその横を走つて行く。

カメラマンは暑苦しそうな表情をしていたが……まあスルーって事で。

次のカップルは普通過ぎるカップルこと、鈴木さん石本さんカツ

ブル。

ちょうど階段を上るとこだった。

鈴木さんは結構息が上がっていた。

実は僕も軽く息が上がりに始めている。

ホント……ツライです。

校舎は四階建てだから、五階分の階段を上らなくてはならない……

…気が滅入る。

一段一段ゆっくり上ろう。

安全の為に……。

ここで僕らと普通過ぎるカップル鈴木さん石本さんカップルとの地味なデッドヒートが始まった。

僕らの一進一退のゆっくりしたデッドヒートでだいたい三階にたどり着きそうになった時だった。

それはドッタン、ドッタンと言う音と共に現れた。

「お先」

「玉葛、妾達の勝ちじゃな！」

大豊セフィリアさんカップルだ。

セフィリアさんの勝利宣言を置き土産と言わんばかりに階段の段差をまとめてすっ飛ばして降りていった。

15段ぐらいある階段を一回のジャンプで降りるってどんだけ化け物だよ。

「私も……できるかもよ？ 階段まとめてすっ飛ばし」

紅葉、そんな事言わないで……。

惨めになるから。

少し遅れてだが、カメラマンが駆け降りて来た。

カメラマンの表情はかなり使命感に燃えた表情だった。

感動ものだ……。

「晴信！！」

おつといけない。

感動していたら鈴木さん石本さんカップルにぬかされてしまった。

結構、屋上のチェックポイントまで地味なデッドヒートは続き、
やつとのこととでたどり着いた。

「お疲れ様です。水分補給は彼女さんが飲ませてあげてくださいね。
いつそのこと口移しでブツチューっで行っちゃってください」

「出来るか!!」

玉葛が叫ぶ。

玉葛……恥ずかしいんだね。

顔が真っ赤だよ……でもね……玉葛。

君は一度コーヒーを口移しで僕に飲ませようとした前歴があるんだよ……。

その後、結局スポーツドリンクの入ったストロー付きのボトルで
飲ませる事になり、どっちが僕に飲ませるかもめ始めた。

「ワラワの方が近いからワラワが飲ませる!」

「あんた抱かれてるんだから譲りなさいよ」

終始こんな感じで平行線……。

「あの……」

おずおずと言った感じにカメラマンが声を掛けてきた。

「なに!」

「ヒイ!」

2人ともカメラマンを脅さないの!

で、いったいなんですか?

場を和ませるように笑おうとしたが疲れからちよつと無理。

カメラマンもちよつと少しびびりながら、

「あの……2人で飲ませたらいいじゃないですかすみませんすみませんすみません」

猛烈な勢いで頭を下げるカメラマン。

だが、カメラはちゃんと僕らを映している。しかもブレて無い様子だ。

そして2人はと言うと、

「……………」

ぽかぁーんとしていた。

「はっ！？ あぁー！！ はいどうぞ！」

仲良くボトルを向けてくる。

は、恥ずかしい！

飲むしかないだろ！！

そんなこんなで普通過ぎるカップルの鈴木さん石本さんカップルに置いてけぼりにされる形になってしまったようだが、比較的すぐに追いつけた。

なんつつか……………良くも悪くも普通なんですね。

鈴木さん、かなりお疲れの様子です。

かく言う僕もですが……………。

またもや起きた地味なデッドヒートのすえ、なんとか二位通過を果たせた僕ら。

無性に自分を褒めてやりたいが……………会場からの視線が何だか痛い……………特に男性からの……………。

ちなみにビリはギャル男汚ギャルカップル。

あの後も喧嘩が続けていたらしく、スタッフにより強制回収。と言うより失格退場になった。

第34話　走って走って私を抱えて走ってマイダーリン（お姫様だっこ希望）と

本当にすみません！！

早い話が操作ミスです。

本当にすみません。

玉葛も紅葉も何か言ってあげて。

玉葛& a m p ;紅葉「……………」

すみません。まだ照れてるみたいです。

次回はなるべく早く更新します。

第35話、文化祭、ベストカップル最後の種目と僕（前書き）

気楽に行こう！

祝3万人！

気楽に行こう！

第35話 文化祭、ベストカップル最後の種目と僕

「さああて、最後の種目の前に順位発表！！ 順位がついてたのか
つて？ 当然でしょ。競っている以上はついてますとも。ですが、
結局はオマケみたいに、ついでも付けていた物なんであんま気にす
んなー！ ちなみに一位だったカップルに五点。五位だったカップ
ルには一点と、加点されてます。他の順位だった場合、何点なのか
は察しろ」

いい加減だなあおい！！

ヤバイ…… けななしの体力を使ってまでツツコミをしてしまった
……。

こんないい加減な司会で良いのだろうか、かなり早い段階で思っ
てたけど、ダメでしょこの司会者！！

「ではでは、第一位、安森古山九尾カップル。九点。安森くくん、
いっぺん吊される？？」

お断りします。全身全霊でお断りします。

観客の方からも『どうかあゝん』とか聞こえて来るけど聞こえま
せん！！

「第二位、橘槻ウンディーネカップル。七点。なんにも言いません。
言えません。てか言えないよ！！ 見せ付けやがって！ お幸せに
っ！！！」

何があつたんだろ…… かなり悲痛な叫びに聞こえる……。

「次は同着三位、鈴木石本カップルと加西設楽カップル。六点。ま
あ普通っつて事で、お幸せになっ！！」

グツと親指を立てた手と良い感じの笑顔を向ける天枝さん。
なんか態度の違いが気になる。

「ああ……残念でも無い話なんですが、と言うより、皆さんも知っています。一応お知らせします。あの見るに耐えない汚カップルには速やかに退場して貰いました。やったあ……！」

天枝さんの声に便乗してか、歓声を上げる観客。

そうとう嫌われてたんだ……。

「さてさてのさて、お待ちかねの最後の種目……『ラブってコクって始まる。愛を示して！ 表して……！ 囁いて……！』だあ……！ ルール？ そんなもんは無い……！ 有るけど無い……！ とにかく男女共に相手への愛を示せ！ 表せ……！ 叫びやがれ……！ ……………要するに好きなだけノロケてくださいって事です。さっきの順位で一位だったカップルからどうぞ」

一位からって事は、僕らからだね。

……………っていきなり……！

無理無理……！

僕なんにも考えてないし、ノロケろってどうしろと……！

「ちなみに、ここにいるカップル達にはあらかじめ、競技をお知らせしてあるのですが、安森晴信てめえは羨ましいんだよバカ野郎君は半ば拉致って来た影響で競技を事前に説明出来ませんでした。だから取り繕いの無い素の愛情表現が出てくると思いまあす」

お、鬼がいます。

皆さん……！ ここに鬼がいます……！ ……って皆さんもあの鬼と同じ表情……！ 皆さんも鬼だあ……！

「はいこれ。マイクね。言葉だったならこれ使って会場中に聞かせてあげてね」

いつの間にか舞台の中央に来ていた。

そして、あの鬼こと天枝さんがマイクを持ってきていた。

「あつ、じゃあ私から」

それを紅葉が受け取る。

「ハル、私ね。ハルと一緒に居るのがすごいい幸せなの。安心して笑ったり泣いたり、そのまんまの自分でいられる。そんな幸せをハルが私に感じさせてくれるの。それにハルは、私の暗くなった道にまた光をくれた人。だから……失いたくない。支えになりたい。そばに居たい。いつまでも……ずっと……。だから決めたよ。ずっとずっと一緒にいるって。大好きだよ。ハル」

静まり返る会場。

そして、ざわめく事も許されないような雰囲気の会場に響く声。

「姐さ〜ん!!! 俺ら……俺ら闘恋隊が姐さんのこと応援しまあす!!! 俺ら闘恋隊のメンバーは、古山紅葉の恋を支える会のメンバーっすから〜」

闘恋隊の皆さんだ!

みんな涙しながら叫んでる。

「うおお!!! 俺もその会に入っただ!!! 俺も応援するぜ!!! てなワケで次九尾さんどうぞ」

「ワラワの番か。くしくも紅葉と似たような表現になってしまっただ……まあこれが一番ワラワの気持ちを伝えるのだから仕方あるまい」と前置きを言いながら紅葉からマイクを受け取る。

「晴信。あの時、晴信が居なければ、ワラワは暗い部屋で孤独に耐えるだけのつまらない女になっていただろう。晴信が変えてくれたのだ。晴信が明るい部屋の外にワラワの居場所を光照らしてくれたのだ。だから……。ワラワは決めたのだ。ワラワは……。晴信と一生共にあると……。晴信。今のワラワは晴信の為にあるようなもの……。それを忘れないでくれ。大好きだぞ。晴信」

なおも静かな会場。

そして、また響く闘恋隊の声。

「玉葛の姐さん。貴女は俺ら闘恋隊の命の恩人です。俺ら、その事を忘れない為に、そして恩返しのためにも、九尾玉葛の恋を支える会の設立を宣言します!!」

ええっと……凄い事になってます。

闘恋隊の言う会に入りたいという人達で会場が一時騒然となっています。

司会でこの騒ぎを収める立場に居るはずの天枝さんもこの騒ぎに加わっているらしく姿が見えない。

「おおっと！ これも大切だが、まだ大切なコトがあった！ 安森晴信てめえこの子ら裏切ったら学校中敵に回すぞこらあ君がまだです。サクツとやってもらいましょう！ サクツと」

あつ！！ それどころじゃなかった！！

ななな何言えはいんだ？ 何すればいいんだ？

そもそも誰に対して？ 玉葛？ 紅葉？

え、ええっと……はじめの言葉って本日はお日柄も良く……ってこれ違うよ!?

そもそも、ノロケるってどうすればいいんだ!?

ノロケ、ノロケ……ノロケ……好き？

好き………なのか？ 僕は………。

あの玉葛の時だって、こんな可愛い子がこんな目にあってて良いわけ無いって思ったから……紅葉の時だって……。

「あれあれ？ 安森晴信てめえいつまで考えていやがる君？ 本当に大丈夫かい」

ぎゃっ!!

天枝さん!?

なんでいきなり天枝さんのどアップなの！？

ってマジどうしよなにしょ、こうしよう！！！！

「早く早く！ いい加減にしろよこの野郎！」

笑顔ではやし立てない下さい！

今やりますよ！！

スーッと深く息をする。

僕ならでる。僕でもできる。やればできる！ やってやる！

「闘恋隊！！ 道を空けて！ 玉葛、紅葉逃げるよ」

「「えっ？？」」

僕は急いできよんとする玉葛と紅葉を小脇に抱え舞台を飛び降りた。

闘恋隊も、その僕の行動を見てやっと動きたした。持ち前の人相を使い、モーゼの海割りの様に人の海に道を作った。

「おらっ！！ 道を空ける！ あにさんが通るやるが！！」

「それっ！ どかんかい！」

……ちよつと乱暴すぎ……ちよつと反省ちよつと後悔。

僕はできた道を走り会場の外へと逃げ出す。

これぞ火事場のクソ力！

背後から天枝さんの声で『愛の逃避行だあ！！』と聞こえる。

全くその通りだよ！！

その後、僕は裏庭に着いた所でぶっ倒れてしまい。現在、玉葛によってゆつくりと疲労感を取って貰いつつ、紅葉に涼しい風を送って貰っている。

てかツツいたんだ！？

「うん。ツツは今、喚んだんだよ」

呼んだって……すぐ来るもんなんだ……。

「当然」

当然ですか……。

「……………」

「……………」

……………沈黙が辛い……。

「晴信、あまり考えすぎるな」

「そうそう。私たち案外今の状態が好きなんだよ」

「まだ決める時じゃ無いんだ。決めなきゃいけない時は必ずやってくるから今決めなくていいだぞ」

「そうそう。その代わりそれまでは、平等に愛してくれればいいんだよ」

「…………紅葉、それはちよつと違うかい？」

「えっ、玉葛は嫌なの？」

「いや、嫌なわけじゃ……………」

「ならいいじゃん」

……………ありがとう。二人ともありがとう。

「玉葛、紅葉。好きだよ」

「……………」

玉葛の言うように、いつか絶対に決めなくちゃいけない時があると言うのなら、その時は逃げずに決める。

それまでは二人が幸せであって欲しい。

だから、僕もそのために努力する。

僕は、僕のために笑う二人には幸せであって欲しい。今というこの瞬間を幸せに過ごして欲しい。そのために努力する。

「本当に好きだよ。紅葉、玉葛」

第35話、文化祭、ベストカップル最後の種目と僕（後書き）

大豊「キミ宛だよ。」

なんでも悪の組織っぽい人に捕まったから助けて欲しいって

大豊（以下大）

「わかった」

行っちゃった……。

続きは感想返信にて！

って次回予告どうすんの！？

セフィリア（以下セ）

「妾がやるぞ」

あれなんで？

セ

「……………置いていかれた……………置いていかれたのじゃ！！！！ 追い付けなんだ……………」

あの……………落ち込む前に次回予告を……………。

セ

「れでいには優しくするもんじゃぞ！ たく、仕方あるまい。次回
は妾と大豊のラブラブパワー全開で大活躍じゃぞ！！」

うん。 誇張表現ありがとう。

セ

「なっ！ こちよーひょーげんではないぞ！ ん？ こちよーひょーげんってなんじゃ」

はいはい。

次回をお楽しみ！！

最後に3万人の皆様ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6908d/>

恋せよ狐と幼馴染み

2010年10月11日22時05分発行